

---

# 光を強く

喜雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光を強く

### 【Nコード】

N0369R

### 【作者名】

喜雨

### 【あらすじ】

17歳の少女の異世界トリップファンタジーです。

少女は誰かに自分を見てほしかった

だが、その願いは中々叶う事はなく、心は寂しいまま

そんなある時 帰宅途中にある老木に出会った。

その出会いで大きく彼女の人生は変わる…。

（女主人公最強！！）

## キャラBookネタバレあり!! (前書き)

作者は絵が苦手で今回いろんな漫画を見て描きました。そのため、何か似てる!!と云うことがあると思います。なので、嫌な方はイラスト非表示でお願いします。

(中傷は受け付けません)

お手数おかけし、申し訳ありません。

**キャラBookネタバレあり!!**

イラストを見たくない方は非表示お願いします。!!  
(自己管理ですよ?)

準備はいいですか??

はい。では行きます。

> i 3 0 7 8 6 — 2 7 9 4 <

白井 凜 (シライ リン)

また、異世界では

リン・グレイス(グレイス家当主) (リーフレア領主)

性別女。

年齢17

誕生日、冬。

身長は158、。

肩にギリギリ着かない髪型はショートカット  
髪の色は黒、（だが、今は目立つため魔法で金髪にしている。）

性格…。普段はテンションが高く、活発的で能天気だが  
実は裏の顔はどこか冷めていている。

そして腕っ節が強い。

\*\*\*小話\*\*\*

凜の家は結構でかい財閥を経営していて、  
凜は幼い頃から英才教育を受けてきた。  
しかし、凜は2つ上の兄より出来が悪く見放されるようになった。

そして中学の頃には凜は夜 繁華街へ出かけ  
ストレスを発散させるように喧嘩に明け暮れた。

しかしそれも高校に入ると同時に面倒臭なり  
ただ、流れる時間に身を任せるようになった。

レイン・フォルテ（グレイス家所属）

性別男

年齢25

身長は178

髪の色は銀髪で髪型は長めのアシメだ。  
インテリ系

性格…心配性、腹黒、

\*\*小話\*\*

レインの家は代々グレイス家に使えている  
なので幼い頃から執事としてのたしなみを習っている  
エリート執事だ。

また10代の頃はずっと王宮の騎士団に  
所属し体を鍛えていたという過去も持っている。

アルト・ガラード（グレイス家所属）

性別男

年齢25

身長182

髪の色は赤茶色で髪型はソフトモヒカンだ。

顔には古傷がありワイルドだ。

性格：女好き、世話好き。

普段頭が悪いように見えるが本当は!？

\*\*\*小話\*\*\*

アルトは10代の頃ずっと王宮の騎士団に所属し体を鍛えて、成績優秀だったが、女関係で問題になり騎士団を追い出された…。アルトは行く当てもなく困り果てていたところ、グレイス家の領主に保護された。という過去も持っている。

今ではグレイス家専属の護衛係となっている。

アラン・シーラン (シーラン家当主) (シルフッド領主)

性別男、

年齢33

身長181

金髪で左の髪を

編みこみしっていてチャライ。



性格：愛人が多く女好き、頭がキレル  
人をからかうのが趣味。

> i 3 0 8 3 4 — 2 7 9 4 <

エルス・ファルト・ドラディラス（王宮騎士団総団長）（王族）

性別男

年齢21

身長183

髪は長めのアシメで色は深い青色

性格：騎士には厳しく鬼教官と呼ばれている  
リンには凄く甘い。

\*\*\* 小話\*\*\*

エルスと陛下は兄弟だが、髪の色が違う。  
母方がちがうのだ。

リンに会うまではまったく女性関係が見えなかったため  
男好きなのではないかと影で噂されていた。

> i 3 0 7 9 0 — 2 7 9 4 <

デイルド・ヒース (王宮騎士団総副団長)

性別男

年齢21

身長186

髪型はソフトモヒカンで色は燃えるような赤色だ。

性格：いつもガハハツと下品に笑う。

筋トレ大好き、おせっかい。

\*\*\*小話\*\*\*

エルスとは同期で幼い頃から一緒に訓練に励んできた初めはあまり仲良くなかったが、ある任務により親友へと発展した。

## 満たされない心（前書き）

初心者ですどうか暖かい目で見てくれると嬉しいです。  
これから宜しくおねがいます。

## 満たされない心

私の名前は白井 凜（シライ リン）

歳は17歳そう、女子高生だ。

身長は158、体重は…秘密にしておこう。

髪型はショートカット活発的な私にはぴったりだ。

髪の色はもちろん黒 染めたい願望は強いが我慢している。

性格、普段はテンションが高く、活発的で能天気だが  
実は裏の顔はどこか冷めていている。

そして腕っ節が強い。

\*\*\*\*\*

私はありきたりの生活にうんざりしていた。

はたから見れば私は幸せ者だ 友好関係は広く、明るい悩み事何て  
無い。

しかしそれは上辺だけ、友好関係は広い？それはいいことなのか…、  
親友もいないのに。

私は周りの友人が羨ましかつたずっと、自分の事を分かってくれる  
親友がいる事を

私が明るいのには親友のいない寂しさを紛らわすため、  
騒げば皆が笑い注目してくれる…。

そして家に帰っても私は邪魔な存在。

2つ上の兄のお陰で…、両親は何時も出来のいい兄ばかり愛情を注ぐ  
まるで私なんか見えてないかのように。

ああ…、見方を変えれば私はいつだって一人、

何時からこんな人生になってしまったのだろうか。

でも偽りの友人でも私は感謝している

こんな私の近くに来てくれる事を…。

だからもし、友人たちに危険が近づけば

私は身を呈して守るだろう。

それほど感謝しているのだ。

だが、こう簡単に自分を犠牲にできるのは  
自分が生きている事あまり執着がないかもしれない。

そんな悩みをもっているとは知らず私の多くの友人たちは私の事を  
こう呼ぶのだ。

「悩み事何てない幸せ者」…と、

そう呼ばれるたびに私は笑顔を貼り付け

「フフツ…、まあね」…と返すのだ。

心はどんより暗いのに…。

満たされない心(後書き)

「光を強く」始めました  
よろしく願います。

一本の樹（前書き）

すいません、訂正します。

人：「」

心の中の言葉…（）

人外…《》

詠唱魔法…【】

これから徐々に訂正していきたいと思います。



## 一本の樹

冬初めの寒空な夕暮れ時、凧は体をブルリと震わせながら  
通学路をゆつくり進んでゆく。

空を見上げれば雲は速く流れ、  
風はビュービューと荒く吹いている。冬独特の悲しい雰囲気  
がいつそう凧の心を寒くする…。

「はあ…、疲れた。」

学校を一步出れば あんなに騒いでいたことが  
嘘のように思えるほど、凧は暗い表情になる

…帰宅するのに気が進まないのだ。

凧は静かにため息を漏らしながらも

足元に視線を向け

ゆつくりとゆつくりと進んでいく

ずっと自分が前に進んでいることを確認するかの様に

足元を見ていた凧だが 何を思ったわけでもないのだが、

ふと、足元から視線をずらし前方を向いた。

「…ん、なんだろあれ？」

すると、気になる風景が目飛び込んで  
つい足を止めてしまった…。

それは通り道にある空き地にポツンと  
一本木が生えている風景だった。

凜はその木に引きつけられるように  
足を運んだ…そして木の目の前まで行くと  
木の姿が良く分かり、心が寂しくなった。

空き地にポツンと一人、この木は  
いつからここにいるのだろうか？  
木はご神木の様に大きく、木の表面は  
ガサガサで老木のようにだ。

「…老木かあ、」

いつの間にか私はその老木と自分を  
重ねて見ていた…。

「老木さん一人で寂しそうだね…。  
実は私も一人なんだ。…一人って苦しいね、」

凜は答えが返って来る訳もないのに

老木に手をあて話しかけていた。

しかし、突然凜の頭の中に声が響いた。

《ああ苦しいな…》

可哀そうな少女よ、お前の望みをかなえてやるわ》

「……………」

凜はいきなり頭に響いた声に混乱をする

誰か後ろにいるのかと振り向いたが…誰もいない。

「……………誰なの？」

《…あちらの世界に行つて困ると悪いから

私の力を少し分けてあげよう、安心しなさい君はもう寂しい想いはしない》

凜の問いは無視された…、しかも凜の混乱はさらに大きくなった

「…あちらの世界？…つてか私の頭大丈夫か？

えっ…私って病気だったの！？」

凜は混乱した頭を少しでも

整理しようとしたが…段々頭が痛くなつて来てしまった。

「…あれっ？…なんか、頭が……ッっ」

そして凜は倒れこむように膝をつき  
意識を手放した…。

## 新しい世界

「…んっ…痛ったッ…」

凜は痛む頭を押さえながら  
体の向きを変えた…。

そして まだ意識がはつきりしないが  
頭を手で押さえながら周りに目を向けた…。

「…なんじゃこれは…！」

凜は思わず狼狽する、  
ついさつきまであの寂れた空き地にいたというのに  
目の前には空き地とは全然違う風景が広がっている。

しかも季節まで変わっている  
冬だったのに、丁度いいぐらいの日差し  
夏の初め見たいな気候だ…。

ここは神殿なのだろうか…でもだいぶ使われて居なく  
屋根はないし蔭や木が建物の中に割り込んでいて寂れている。  
と凜は頭を傾げながら考える。

そんな場所に凜はポツンとこの神殿の中心だと思われる所にある台の上に寝ているのだ…。

「……………あつ、全部夢か…だよ…ね…うん、」

凜は多少硬い笑顔で

無理やり自分を納得させた。

凜は基本、面倒臭がり屋で

頭を使い過ぎると何もかも適当になる人間なのだ。

「こんな神秘的な夢。楽しまないきゃ損だよねっ!!」

凜は一気にテンションを上げ、まず神殿と思われる建物の外に出てみることにした…。

外に出ると凜のテンションは最高潮に…。

凜の頬は興奮で赤く染まった。

「……………わああ!! 私の夢にまで見たジャングル世界じゃないか!  
てか、夢なんだけどねっ」

凜は植物が大好きなのだ。

「今 私凄い幸せだああッ。ジャングルなんてテレビでしか見た事なかったし！」

「…この花なんて見てよ この色の鮮やかさっ！！」

凜はそう言いながら赤い一輪の

アマリリスに似た花を手で包んだ。

そして興奮のまなざしでじいーとその花を観察する。

…すると奇妙な声が…。

《／／／嫌ですわっ…。そんなに見ないでくださいなッ》

「…………えッ？」

凜はいきなり聞こえてきた声に驚き

辺りを見渡す…が、誰もいない。

「気のせい…か、それにしてもこの花綺麗だなあ…。」

《またまた、綺麗だなんてわたくし

照れてしまいますわッ／／》

「ふふっ…だって本当の事でしょ…う…っ。ええ!？」

(なに口走ってるんだ私はっ

いくら親友がいないからって花と話すなんてっ  
って…うええッ!？ 私今花と会話したの?)

《…あらあら、私の言葉が。貴女も植物と

お話できるかただったのですね?》

凜はもう一度聞こえた声を聞いて確信した。

ヤッパリこの花喋ってる!!っ

そして落ち着いて考えた凜思った…。

「ああ…。夢だから何でもありなのかつ!！」

《えっ夢?…貴女これは…夢じゃなくてよ?》

「またまたッ。お花さん冗談きついよッ

だってほらっ本気で木を殴っても…痛ッッた!!

えッ?…めちゃくちや痛いんですけど!!…なんでっ

《だから夢ではないと申したではないですか…、》



「……………」

(…うそっだろ?…えッマジで夢じゃない?!)

凜は痛む拳を撫でながら必死に頭を働かす。

(…でもこの痛さは尋常じゃない…ってことは、これは夢じゃないと認めざる負えないじゃんつ。)

「…………マジかつ、」

現実がわかった凜は肩をガツクリと落とし  
一気にテンションが落ちた。

《おいおい大丈夫かい嬢ちゃん?

…俺は硬いから痛かっただろっ?》

「はい、大丈夫です…。こちらこそ  
いきなり殴ってすみませんでした。」

(なんかもう…………、

何が喋るっがどうでもよくなってきた。)

凜はそう投げやりに

新たな声の持ち主を軽く流した。

《いや、いってことよッ！  
嬢ちゃん素直でいい子だな》

「ははっ…、有難うございます。」

そして凜は地面に腰をおろし  
うなだれるように頭を抱えた…。

「はあ……………」

## 一人

凜がうなだれたあとに  
自己紹介をした。

まずこのアマリリスに似赤い花の名前は  
【アリス】

そしてどこかおやっさん！って感じの樹は  
【ゴード】と言っらしい。

\*\*\*\*\*

「…はあ、じゃあここは私のいた世界じゃないのか」

《凜の話を聞くとそういうことすわね…、  
この世界には機械という物はないですから》

「やっぱりこの世界には機械はないんだね  
…じゃあ、当然これは使えないだろうなあ」

凜は ハッ！っと何かひらめいた表情をし

制服のポケットから携帯を取り出した…。  
そしてディスプレイを見る。

「はあ…。圏外だよ、」

《嬢ちゃんそれは 一体何なんだい?》

「んー…、これはねえ私の世界のもので  
遠くに離れた人とコミュニケーションをとる道具だよ」

《へえ…、それは便利なやつぢゃなあ…。》

「うん、でもここには電波を飛ばす機械がないから  
その機能を使うことはできないんだ」

凜は携帯の使い道を説明しながら  
何気なく指を動かし電話帳を開いた…。

……!?

「……嘘だろ!？」

電話帳を見た。

凜は見てはいけない物を見てしまったかのように表情が一変した…。

「何で…何で、ないんだ皆のデータがッ!！」

凜は冷や汗をかきながら

確認のため、メールボックスを開く

「…受信トレイが…ゼロ、」

(私はこれを見て頭が真っ白になった。  
だってこの現象は昔読んだ本に出てきた事だから。

その本の内容はこういうものだった  
主人公が穴に落ちて何故か異世界に  
そしてその主人公も携帯を持っていて後に絶望的な気持ちに陥った。

何故かは私の今の私と同じ状況で  
今まで自分と接点があったもののデータが全て消えていたのだ。

その状況は初めて見た時は何でこうなったかは  
分からなかったが…最終的にはその謎は解明された。

データが消えた訳は……もといた世界で、  
自分は存在しなかった事になってしまったから・)

凜の目に涙が溜まる……。

「あはは……、私もついに存在がなかった事になったのかあ。  
自分の存在なんて……とか思ってたけど、実際に  
いなかった事になるのは……キツイなッ、」

凜は全て頭の中を整理し終わったところには  
首がガツクリ落ちていた。  
そして悲しみと、後悔でいっぱいだったというかのような  
表情となった。

(私は欲が強すぎたんだ……、  
親友がいなかったら勝手に沈んで  
たとえ親友じゃなくても私を想ってくれる  
友人はたくさんいたのに……)

私は……鷹望みをして罰が当たったんだっ！)

「うつ…うつ…クスンツ…、」

凧の涙は止まる事はなく  
ポタポタと大地にしみていく…。

《いきなり泣いて、…どうしたんですの?!》

《じよっ…嬢ちゃん?!》

（ああ…。これで私は本当の一人になってしまったんだ。）

「うわあああつ……ツ」

（もう、誰も私の悩みを分かってくれなくてもいい  
だからッ!!一人にしないでよッ!!!!）

凧はこの言葉を心で叫んだあと  
いきなり体から力が抜け落ち…気を失った。

この時凧は知らなかった  
自分から白い光が出ていた事を…。

一人（後書き）

個人的にゴドのおやっさんキャラが大好きです。



## グレイス家の証

\*\*\*\*\*

「お〜い、お茶はまだかあ？」

今出来ませう。っと真面目そうな男は  
お茶を用意する…。

---

カチャンッ

そして

はいどうぞ、っと出来たお茶を  
少し投げやりに渡した。

「はあ…、貴方はまったく男だと言うのに  
昼間のテラスでお茶…。どこぞのお嬢様ですか？」

この街で一番大きなお屋敷に住む彼らは  
今日も平和に過ごしていた…。

「貴方も この裕書正しいグレイス家の護衛役なのですから  
少しは体を動かしに外に出て行かれてはどうですか？」

「…ズズツつはあゝ、裕書正しいグレイス家ねえ…。  
今じゃ名前だけだろ？当主もいねーのに何が護衛役だつての！」

「てか、グレイス家の血筋も途絶えたつてのに  
俺らこの屋敷にいる意味あんのかよっ？」

体のガツチリした護衛役は出されたお茶を飲みながら  
そう、だるそうにぼやいた…。

「意味ならちゃんとおあるでしょう、忘れたんですか？」

その言葉を聞いた護衛役は  
さらにだるそうになった。

「あゝ…はい、はい、またそれかっ

それなら嫌ってほど分かってるっーの!」

「でも、その意味って本当に起こるのかあ?

【たとえ血筋が途絶えてもグレイス家の証は途絶えはしない。】  
ってやつだろ? 嘘っぱ過ぎるッ!」

「…それはっ…私もそう思いますが、

もし、その言い伝えが本当だった時にこのお屋敷が  
廃れてたら困るでしょう?

それにどうせ私たちは暇なんですからいいじゃないですか、」

「…はあ、結局俺たちは暇だからここに残っているのかあ  
なんか寂しい人生だなっ」

「…そうですね。」

男達はしみじみしながらいつものように  
グレイス家の私有地の森を眺める…。

「この森も無駄に広いよなあ  
何かおもしれー事でも起きればいいのになっ」

そう護衛役が呟くと  
まるで図ったかのように森に変化が…。

「…！？ なっ何だ！！」

森の奥のが急に眩いくらいの光で覆われた。

「…ッ、すごい魔力ですね。確かあの辺は  
神殿の近くじゃないですか？ 出番ですよ…アルト。」

「チッ…。なに他人事みたいにつ  
お前も行くんだよ…レイン！！」

護衛役こと…アルトは  
執事のレインを連れ屋敷を飛び出して行った。

\*\*\*\*\*

森に馬が土を早々と蹴りあげる音が響き渡る…。

「あゝックソッ！」

「この森こんなジャングルみたいだったか!？」

「そうですね…、確か前見た時にはこの辺りはそこらへんによくある林程度だったと思いますよ。ですが…、これではまるで神殿付近の森と同じですね。あの森が広がったのでしょうか？」

「そんなこと知るか！」

「てか、神殿はまだつかないのかよ?」

神殿に近づくに連れて森はジャングルのように深くなって行く。

「ええ…とですね、もうすぐつくと思いますよ…」

「お前それ言っただけ何回目だコラ！」

「一向に着く気配ないじゃねーか!?!」

「はあ…、貴方は何でそんなに短気何ですか？  
それでは何時になっても女性に好かれませんか？」

「…そつそれはッ…って！

今それ関係ねーだろー！！

今のお前の発言で俺のナイーブな心が

傷ついてしまったじゃねーかっとうしてくれんだよー！！」

「はい、はい、すみませんでした。これからは決して  
貴方が女性に嫌われてるなんて無粋な事はもういいませんよ。」

「……ってっつゝ、おい！！」

なにもっと傷つけるセリフ言っちゃっててくれたの！？

お前謝る気ねーだろー！！」

「はい。バレてしまいましたか、

別に私は…、貴方のナイーブな心でしたっけ？

そんなのはどうでもいいんですよ。」

「………ああ何か視界がぼやけてきた。

グスンッ、」

「泣かないでください…、凄くウザいので。」

…それに、ほら神殿が見えて見ましたよ?」

「……はぁ可哀そうな俺!

って、マジかっ!?!…おおアレが神殿かあ!」

はつきりとは まだ確認できないが  
木々の隙間から神殿らしき建物が見える。

そしてやっと森を抜けた…。

男達は今まで薄暗い森にいたため  
突然の強い光に目がくらんだ…。

## グレイス家の証（後書き）

えっと、護衛役の名前がアルトで、  
執事の名前がレインです。



花に囲まれた少女

「うっ…眩しいッ」

アルトは腕で視界を防ぐ…  
そうしていると先に光になれたレインが  
驚愕しながら声を上げた。

「…こっこれは一体、」

「どうしたっレイン…何かあるの…か、…！？  
何だこれは！」

アルトもやっと光になれ  
目を開いた…。そしてまた彼も驚いた。

…男達の目の前には  
花が咲き乱れていた。

神殿の裏庭辺りが  
地面が見えないぐらい  
青白い花が覆い尽くす…。

背丈は60?ぐらいだ  
寝転べば体は花に隠れ見えなくなるだろう。

「おいっこの花は何だ  
見たことねーぞ!!」

「そうですね、私も見たことが  
ありませんね…。」

男達はそう言いながら  
暫く神殿の周りを歩き回る。

男達は二手に分かれて

神殿に不審な所がないか探していた。

そして花の咲き乱れる中にいたアルトが  
突大声を上げた…。

「おいレイン！  
こっち来てみるよ！！」

レインは言われたとおり  
花をかき分けアルトのいる方へ  
向かった…。

「全く、そんな大声あげて  
どうしたんです？」

「まあ…あれ見てみるよ」

アルトはアレの方向に  
指をさした…。

「……女の子ですね、」

「ああ…たぶんあの光はこの子が  
出したんじゃないか？」

女の子はこの世界では見たことがない  
服をまとっていて髪の色も珍しい黒色をしていた。

そしてその女の子の周りだけ  
濃い青色の花になっていた。

女の子を中心として  
濃い青から外側に行くにつれて  
白色になっている。

明らかにこの女の子が  
力を発した用に見える。

「どうするこの女の子？気絶してるぜ、  
此処にほっておくのか？食われるぞ」

この森は夜になると  
狼などの猛獣がうろつき始め  
危ないのだ。

「…はあ、何者が分からないのに  
連れて行くのは危険ですが…仕方ない、  
屋敷に連れて行きましょう。」

「結界でも 張っておけば大丈夫でしょう  
アルト彼女を抱いて運んでください」

「了解。  
…よつと」

男達は女の子を連れ  
また屋敷に帰って行った…。

## 謎の男達

\*\*\*\*\*

日差しが入り込み

鳥のさえずりが響き渡る……。

「……んツ……んく……ん？……んん！？」

凜は少し頭痛がする頭を

手で押さえながら現状把握をする。

……が、いまいち状況が掴めないようだ。

「……此処はどこだ？あれツ、

私確かジャングルにいたんじゃない、」

凜の目の前に広がるのは

どこかのヨーロッパ貴族の屋敷みたいな部屋だ。

しかも凜は居心地のよいベットのようだ。

凜は暫く呆然としていたが  
突然頭が働いた…・

「……………!!」

「えっと、…………私拉致された？えっ殺される!？  
それとも売られるとか…!？」

このままではヤバいと思った凜は急いで  
ベットから飛び起きた。

そして窓の方へ向かおうとした…が、  
何故か見えない壁みたいな物があって  
進めない。

…凜は顔色を変え  
一気にパニックに陥った。

「わああああ！ なにコレ進めないんですけど…!!」



ふざけんなッ クソッ出せコラ!」

…ドン・ドン

…ガン!…ガガ!!

凜は見えない壁を殴ったり、蹴ったり  
とにかくこの壁を壊そうと暴れている  
まるで怒り狂った猛獣のように…。

暫くそうドンチャンやっていると  
いきなり部屋の入り口が勢いよく開いた。

…バンッ!!

凜は音をした方を勢いよく  
見る、そして固まった。

部屋の入り口には

美男が2名息を切らしながら立っていた…。

(なっ…なにこの人たち

めちゃくちゃ美男何ですけど!!!(

凜は混乱する頭の中何故か

美男だつて事だけ素早く認識する…が、  
すぐに見とれている場合じゃないと思い

また駄出の行動をとる…

近くにあつた椅子を持ちあげた…。

「おッオイ、嬢ちゃん…ツ…危なッ!!」

ガン!!

凜は男がなんて言おうが無視し、  
とにかく椅子を振り回す。

ガン!!

——ドーン！

何回か繰り返してるうちに  
段々と私の息が上がって来る…。

凜の額には薄っすら汗がにじむ。

「…はあ、・はあ、んツ・はああ  
「

「嬢ちゃんもうその変にし…」「うるさい！黙れ、出せ」ラ…！」「

凜は美男のごつい方を  
睨む。

「うわッ…怖、」

ついでに腹黒そうな男も睨んだ。

「おや、私も睨まれてしまいましたね  
アルト貴方のせいですよ？」

「…!!何で俺のせいなんだよッ」

「ところでお嬢様、その結界は  
そんなものでは壊れませんか?」

「おいつレイン俺は無視かつコラ!!」  
(私はこのうるさい声を無視した。)

凜はそれを聞いて え? っという顔をする。

「私の意思でこの結界は外せます。  
もし、本当にこの場から出たいのなら  
大人しく出来ますか?」

…凜は暫く考えたあと  
持っていた椅子をゆっくり床に下ろした。  
そして強張った顔つきで、

「…出来る、」

と呟いた。

「そうですか、では結界を外しますよ？」

そう男が呟くと

微かに空気が揺れた。

「…はい、外しました。

さて、では自己紹介と行きますか？」

凜は思いもしなかった 自己紹介  
という言葉聞いて ハア？ という  
表情をとった。

（私はこいつ等の  
考えている事が分からない、）

（これから殺されるか、売られるかの私に  
何で自己紹介なんてするのだろうか？

…もしや！？あれか、あの…自分の殺した奴の名前は覚えておくっ  
とか言う意味分らない思考の持ち主なのか？

それとも、売るときに  
新しく名前考えるの面倒だから  
そのまま、私の名前を使うとか…。

そう暫く考えていると  
のこつい方が話しかけてした。

「どうしたんだい嬢ちゃん？  
いきなり固まったりして。」

凜はその声を聞いて我に返った  
としてこのまま考えていても仕方ないと  
意を決して口を開いた。

「…どうして自己紹介なんてするんですか？」

それを聞いた二人は（？）っという  
表情になった。

「これから私は殺されるか

売られるのでしょうか？なのになぜ  
自己紹介なんてするんですか？」

凜が言いたい事を言い終わると

二人は顔を見合わせ…それから、

笑いだした。

「アハハハハハ…ハハツうおえッ。ゲッホ！ゲッホ！」

「クツクツク、」

しかもごつい方は笑い過ぎてむせ始めた。

凜は訳が分からず怪訝な表情をする。

「あ、あの…？？」

「クク…、ああ、失礼しましたお嬢様、」

「私たちは別に貴女に

危害を加えるつもりは毛頭ないんですよ？」

「…え？」

「むしろ俺たちが嬢ちゃんが倒れているところを助けてやったんだぜ？」

「あの森は夜になると猛獣がでて危ないんですよ、そんな場所に女の子一人おいて行けますか？」

二人はそう言い私に優しい笑みを見せた。

(…ああ、この人たちいい人だ)

私はその綺麗な笑顔につい

ぽーとしてしまったが、

すぐに現実に戻った。

「…そうだったのですか、

助けて頂いて有難うございました。」

「当然のことをしたまでだッ

気にすんな！それより・ほら、自己紹介しようぜ！！」

「じゃあ、まず俺からなッ

俺の名はアルト・ガロードだッこのグレイス家の護衛役をしている。

あっ、呼び方はアルトでいいぞ！！よろしくなッ」



\*\*\*\*\*

アルトと言う名の人の外見は  
顔は少し頬の所に古傷があつてワイルドだが  
それ以上に何か美形だ。

髪の色は赤茶色で髪型はソフトモヒカンだ。  
身長は182、ぐらいだろうか。

\*\*\*\*\*

「私の名はレイン・フォルテと申します

このグレイス家の執事をしています。

呼び方は気軽にレインとお呼び下さい」

\*\*\*\*\*

レインと言う名前の人の外見は  
とにかく色白で美形だ。

髪の色は銀髪で髪型は長めのアシメだ。

身長は178ぐらいだろうか。

\*\*\*\*\*

(…えっと、ごつい方がアルトで

真面目そうな人がレインね、よしっ覚えた！

2人ともたぶん同じ年齢で25ぐらいだと思つ。)

「私の名前は白井 凜 (シライ リン)

凜って読んで下さい」

「凜かあ！」

よろしくなッあと敬語じゃなくていいぞー!!」

「凜様ですね。いい名前ですね

私にも敬語は必要ないのでそのつもりで、では凜様よろしくお願いします。」

こうして凜たちは

自己紹介を終えた…。

## 謎の男達（後書き）

主人公は実はヤンチャ時代があり  
その影響で言葉づかいが悪くなる時があります。

## 優しすぎる二人

\*\*\*\*\*

自己紹介も終わり

今は3人で渋いロココ調のテーブルに集まり  
ソファ―に腰をおろし、お茶を飲んでいた。

（テーブルを挟んで私の正面には  
2人がいる感じだ。）

「でっ、凧はどうして

あんな所に寝てたんだ？」

凧はその質問を聞いて少し  
心が痛んだ…。

そして凧は俯き紅茶の入った  
マグカップを見ながらこたえる。

「…じ、自分の感情をコントロールできなくなったから。」

それを聞いて二人は（意味が分からない）  
と言う表情をした。

だから凜は仕方なく

この世界に来るまでの事、

来た後の事を細かく説明した…。

\*\*\*\*\*

凜がの事情を話したあと

この部屋の空気が重くなってしまった。

「…そうだったんですか、…、ああ、私は駄目ですね

凜様を慰めてあげたいのにいい言葉が思いつきません」

そう言いながらレインは苦笑した。

レインは下手に言葉を発して

凜を傷つけてしまわないかと不安なのだ。

「それでも一つ言えることがあります」

レインはそう言い私に  
優しい笑みをみせた。

言われるのかと不安な凜の  
胸はせわしなく動く。

「なッ何？」

「フフッそれはですね、  
…私たちに甘えて下さい  
ねっアルト？」

「ああ、存分に甘えろ  
凜なら目に入れたって痛くねーよ！」

「……………は？」

「凜様は私たち以外に頼れる相手がいません  
ですので、私達を存分に頼って下さいと  
申しているのです。」

「家がないなら、此処を凜様の家にすればいい  
家族がないのなら私たちを家族と思えばいい  
…さあ、存分に甘えて下さい ニッコッ」

凜はそれを聞いて  
唇を噛み締めながら  
目に涙をためた…。

「うっ、…2人ともバカだよ…、」

「おいおい、せっかく俺たちいいこと言ってるのに  
何でバカ扱いなんだよ」

「グズツ、だって…だって、見ず知らずの変な女に  
そんな優しくして…グズツ大馬鹿だッ」

「…自分で変な女って…  
自覚あったのか…ッ痛って！！なにすんだよレイン！」

レインはアルトの足を蹴った。

そしてレインは今まで私と向かい合わせに座っていた席を立ち…私の隣りにすわった。

「黙りなさいアルト、…凜様？」

私たちはもう見ず知らずではないのですよ  
自己紹介したじゃありませんか

あの瞬間から凜様は私たちの大切な  
物の一部となったのですよ。」

そう言いとげたレインの目は

真っ直ぐでもう有無を言わせない感じだった。

「…本当に、私　レイン達に甘えていいの？」

凜は不安げに2人を見た。

そうすると2人はとっても優しい笑顔で  
返事をした。



「おおッ！当たり前だッ」

「ええ、遠慮はいりません」

凜はそれを聞いて余程嬉しかったのか隣りに座っていたレインに

「有難うッ！！」と言いながら抱きついた。

しかも涙を浮かべたとびつきりの笑顔で…。

(私の後ろで 俺にも抱きつけ！！って変態の声をした気がしたが私は全て無視した。)

「フフッ凜様は本当に愛らしい方ですね」

そう言いレインは抱きついた凜を抱きしめ返し、頭を撫でた。

この時凜はレインの胸に顔をうずめていたから分からなかったがレインの顔は少し赤かったらしい…。



優しすぎる二人（後書き）

地震まだ続いていますね、  
ホント心が痛いばかりです。  
皆さんも気を付けてくださいね  
油断は禁物です！！

## 待ち望まれた存在

\*\*\*\*\*

凜は泣きやむまで

レインに抱きついていたが

落ち着いて来たところで体を離れた。

「落ち着きましたか？」

「うん、ありがと。」

「そう言えば、今更だけど

此処の当主に私がお世話になる許可取らなくてもいいの？」

凜はつい二人の優しさに甘えてしまったが  
肝心の当主さんに許可頂いてないばかりか、  
挨拶もしていないことに気がついた。

「…ホント今頃だなあ、

別にいいんだよ許可なんて取らなくても」

「えっ…駄目でしょッ」

許可も取らずにお世話になる人なんて  
そんなのは、人としてどうかと思う。  
そう凜は心配した…。

「いえ、本当に許可なんて要らないんですよ、  
今この屋敷には当主はいないのでから」

「……えッ？」

「数年前まではいらっしやったのですが  
お歳で亡くなられたんですよ」

【ふうん、えつでもたとえそれで当主が亡くなられたとしても  
このお屋敷に当主がいない理由にはならないよね  
だって 普通子供とか養子が後継ぐし…。】

「…それだけじゃ当主が今いない理由にならないよ。」

「はい、確かにそうですね。ですがこのグレイス家は普通と違うん

です」

「…?」

「数年前の当主は結婚していましたが何故だか、子供が出来なかったのです。お互い健康でしたのに。まあ、此処で普通の家ならどうしても跡取りを残さないといけないので

養子をとることになるでしょう」

「しかし、それはこのグレイス家では出来ないのです…グレイス家の証があるものだけが当主になれるのです。大抵その証は血筋で受け継がれて行くものなのですが…。」

「えっ!じゃあこの家は血筋が残っていないんだから終わりじゃんっ何でレイン達は此処に残ってるの?」

そう言うとアルトが

どこか投げやりに呟いた。

「…待ってるんだよっ」

「…？」

「このグレイス家には言い伝えがあるんです。

【たとえ血筋が途絶えてもグレイス家の証は途絶えはしない。】  
と言っ言い伝えが」

「えッ！！血筋じゃなくても証って出るの！？」

「言い伝えではそうですね。」

「言い伝えでは…ってそんなよく分からない物の為に  
レイン達は此处で働いてるの！？」

「ああ、自分でも馬鹿げてると思ってるよ。」

「でも私たちは暇なのでいいんですよ。」

凜はこの言葉を聞いて  
愕然した表情になった、

(この人たち本当にバカだ…お人よしバカッ)

「二人とも本当にバカだね、

そんなんだと、いつか痛い目に会うよ」

「ハハッ否定は出来ねーなっ！」

「まあその時は、その時ですよ ニッコッ

…当主に会うことは合う事が出来ませんが

先代たちの肖像画がありますけど見ますか？」

「…先代たちの肖像画？」

わあっすっごい気になる見たい!!！」

「そんなの見てなにが楽しいんだ？」

オッサンばっかだぜ？」

「いいの！見たい。」



「そうですね、では私に着いて来てくださいなニヨッ

\*\*\*\*\*

凜たちは昼間の日が降り注ぐ廊下を歩く…。

「ねえ レインまだ着かないの？」

それにしてもこの屋敷は広すぎる  
歩いてても歩いてても着かないのだ。

「フッフもうち少しですよ…ほら、見えて来ました」

凜はどこだろう？キョロキョロしながら絵を探す。

そして廊下の壁にずらりと大きい肖像画が  
並べられているのが目に入った。

「わあ 凄い迫力！！」

凜は急いでその絵に

駆け足で近づく。

近づくとは肖像画は7枚あることが分かった、  
凜の手前から奥にかけて新しい画と古い画になっているようだ。

凜は美術鑑賞に来たように  
一枚一枚じっくりと見ていく…。

意外と皆さん顔が整っていて綺麗だ。

そうしてようやく最後の一枚に…、  
…何かこの一枚だけ異様なオーラが出ている。

「レイン、…この人って凄い人なの？」

「はい、それはもう凄い方ですよ様々な力の面で  
このお方は歴代の中で一番です」

「へえー、ヤツパリ凄い人だったんだねえ」

凜はそう言いながら何気なく  
その凄い人の目を見た。

すると凜の体に異変が…、

(…えっなに?!)

目を見た瞬間凜の左胸に

焼けるような痛みが走り

凜は眉間をグツ！と寄せた。

「…!?!…ツ、」

その痛みはどんどん強くなる。  
そして凜は廊下に倒れ込んだ、

ドサツ

それを見て2人は慌てだす

「…!!…。どうしたツ凜!?!」

凜はあまりの痛さに意識が持って行かれそうになり  
そして凜は苦しいよ、と必死にもがく…。

「…ンツ…はぁッ…痛いの!?!」

「どこが痛いのですかッ？」

廊下に凧の唸り声と、レインの厳しい声が響く…。

「…ムッ胸・ガッ…焼けるッ!!」

そう言いながら凧は自分の  
左胸を押さえた…。

「胸?...左胸ですか!？」

凧はもう話すのもしんどくなり  
一生懸命首を縦に振る

それを見てレインはアルトに支持を出した。

「アルトッ 水と布を!!」

「わっ分かった!!」

アルトは急いでこの場を後にした。

—— うッ…ンッん〜

凜はひたすら唸る

「凜様ッご無礼をお許してください」

…レインの表情は強張っている。…

レインは凜の

制服のボタンを外して行く…。

そしてついに胸が露わに…。

「…ッこれは…！」

凜の胸を見たレインが声を上げ  
息を飲む…。

そこに丁度

アルトも帰って来た。

「オイツ持って来たぜ！！…っつて

なに固まって…ん…コレって…!」

何か2人の様子が変わると

気配で分かっていたが…、それどころではなく

凜はついに、あまりの激痛で

意識を保てなくなったのか気を失った。

待ち望まれた存在（後書き）

気失うこと多すぎですね（苦笑）  
なんか、すみません。

## 二人の誓い

\*\*\*\*\*

「なあ これってグレイス家の証に似ているのは気のせいかな？」

アルトは顎に指を置きながら凜の胸を見る

「…気のせいではないと思いますよ、この薔薇と蜘蛛のマークは家だけですからね」

凜の胸はグレイス家の証の所が赤く焼けただれ痛々しく現れていた。

神妙な顔つきでレインは自分の着ていたジャケットを凜にかけた。そして気絶している彼女を抱き上げ体をゆっくり休める部屋へ移動する。

移動しながらも二人は話を続ける…。



「…って事は、凜が俺たちの待ち望んでいた次の当主ってことになるのか？」

「この証が出たかぎり、そうでしょうね」

二人は待ち望んだ当主が現れて嬉しいはずなのに何故が気分が乗らない顔をしている

「…まだ、こんな若い娘なのにこの世界は酷だろうなあ」

「そうですね、貴族と言うのは腐った人間が多いですからね」

グレイス家は貴族の中でも上流階級の中に入る大貴族の一つだ  
それなりに周りの目は厳しくなる

そんな中にこれから凧は  
入って行くことになるのだ。

「まあ どうあれ私たちが  
全力でサポートするしかありませんね」

「…ああ そうだな、」

2人は部屋に着き  
そつと凧をベットに下ろした。

そして二人はそつと凧の頭を撫で  
部屋を後にした…。

\*\*\*\*\*

---

チュンッ、チッ・チュンッ

凧の眠る部屋に鳥たちの  
元気そうな鳴き声が響く…。

「…ンッ、ンム…っはあ…朝かあ」

凜はぐずる様に寝返りをうつ。

すると、思いもしなかった痛みが左胸に走る。

「…いつ痛〜!!」

凜は突然の痛みで布団の中で  
ギューツとうずくまった…。

そして思っていた以上に声が大きかったのか

慌ててこちらに向かってくる  
足音が二つ…。

---

バンツ!

「凜!…!」

「凜様!!」

凜は胸を押さえながら  
髪を乱している二人を見上げた。

「……。」

そして凜は眉に力を入れ  
今にも笑いだしそうなところを必死に我慢している。

(二人とも凄く心配そうな顔を  
してくれるのはいいんだけど  
美男が台無しだよッ)

凜はつい、痛いのも忘れて  
笑ってしまった。

「…プッ」

「えッ？」  
「はぁ？」

凜が笑ったのを見て二人は  
また間抜けな顔をする…。

(…ヤバいもう耐えられない!!)

「プツ…ク、クツク。アハハハツ…ってツ痛タタツ!!」

凜は豪快に笑ったが、  
すぐに後悔する羽目になってしまった。

「人の顔見て笑うなんて  
失礼な奴だな…って、おい！大丈夫か？」

「ああ、凜様傷に触ります。大人しくしてください!!」

凜はそつとレインにベツトに  
倒された…。

「まったく貴女は怪我してるのに騒いで…、おバカさんですか？」

「ごめんなさい。…ってか、怪我!？」

えっ私、怪我するようになったことした覚えなんだけど!！」

凜はゆっくりと視線を落とす

痛む左胸を見るため

服の中を覗いた…。

「…!! 包帯してあるッ」

凜はそして思考が停止、

だんだん顔が赤く色づいていく…。

「…おッおい? どうした。」

「わああああッ 体見られた!!」

えッ! 恥ず!! しかも下着付けてないしッ」

もたえる凜を見て二人は  
頭を抱えた…。

「…お前、傷の心配どこいった?

「思考ずれてるぞ」

「凜様落ち着いてください。」

確かに私たちは貴女の体を見ました  
しかし、全く恥じる必要はないのです」

「いやッ…恥じるよ物凄く…！」

「私たちは貴女の下部です」

下部はただの空気です。空気は恥ずかしくない物でしょう？」

（…確かに空気は恥ずかしくないけど、）

「こんな存在感ありまくりな空気があるか…！」

「それに部下ってなに？」

私あなた達を友だと思っていたんだけど？」

凜は思いもしない事を言われ  
不機嫌になる…。

不機嫌な凜を見て  
二人は複雑そうな顔つきになった。

「俺たちも初めはそう思っていたんだけど  
事情が変わったんだよ、」

「事情？何それ…意味分かんない、」

「凜様、すこしご自分の包帯をずらし  
傷を確認してもらえませんか？」

凜はまた意味分らない事を言う  
レインに怒りをぶつけそうになったが

あまりにもレインのまなざしが真剣だったため  
大人しくそれにしたがうことにした。

……そして凜は自分の包帯をずらし傷を見た

「…なにこれ!？」



左胸には蜘蛛と薔薇の模様がはっきり現れていた。  
普通の傷跡だと思っていた凜は  
凄く狼狽した。

(…これじゃまるで、傷つていうよりも  
刺青を入れたばかりの肌じゃん。)

凜が目を見大きく開いて  
自分の胸を凝視していると  
レインが口を開いた。

「その凜様の傷は我がグレイス家の  
証なんですよ…。」

(…えッ!?)  
何で私にそんなものが?

てか、証って…えええ!!)

「…おわかり頂けましたか?  
そうです、貴女にその証が出た以上  
貴女がこのグレイス家の当主になるのです」

凜は目を見開いて

絶句した。

「嘘でしょ？、だって私普通の女子高生だよ

…そんな当主とか無理だよ！礼儀とか全然知らないしッ」

「女子高生と言うのがいまいち分かりませんが、

礼儀などは私たちが全力でサポートするので問題ないです。」

「…つまあ、凜に拒否権はねーけどな」

（…そんなあ、

でも、このまま何もせずこの家に

お世話になる訳にもいかないし。

ああッ！！仕方ない、宿代だと思えばいいかつ）

（たとえ文句言われたって

こんなお嬢様に向かない私を選んだ二人が悪いんだッ

どうなっても知らないんだからッ！！）

「はあ、分かった けど、私は

お嬢様ってタイプじゃないから覚悟しといてねッ」

腹をくくった凜を見て  
二人は可笑しそうに笑った。

## 二人の誓い（後書き）

だいぶ更新遅れました、ごめんなさい。

お気に入りにしてくださった方有難うございます

これからも暖かい目で見えていただけたら嬉しいです!!

## ドラディラス王国（前書き）

更新遅くなってすみませんでした。  
いつも見ていただいてる方ありがとうございます。

## ドラディラス王国

\*\*\*\*\*

あれから 凜はラフな服を用意してもらい着替え朝食を食べた。

そして今テラスでお茶会をしている  
昼のポカポカした気候がとても気持ちい。

そして凜は陽だまりの中、テラスで優雅に  
紅茶の入ったカップを口に運ぶ

【ああとてもいい気分だなあ…  
この視線さえな・け・れ・ば、】

凜は視線を上げ2人をにらむ。

「……………」

「……………」

【あぁ、すごく飲みづらい。】

「…ああもっツ！！何？」

凜が聞くと二人は  
神妙な顔をして頬を掻いた。

「いついやあ…なあ、女の子がスカートないなんて  
見慣れてないからな、変な感じなんだよっ」

「この国では余程のことがない限り  
女性がズボンを履くということはないんですよ」

「ええ〜、動きにくいじゃん！！  
走るときとかバサバサして邪魔だしっ」

「…お前、どんだけ騒ぐ気だよ  
第一女ってもんはお淑やかなんだよ」

「えええ〜 うそだあ！！  
だって私の世界じゃ男の人より  
活発な女子たくさんいるよっ」

「それはそれで興味深い話ですが、  
…では凜様も活発な女性の一人なのですね。」

【私はむしろお淑やかっという言葉は  
論外なぐらい活発？…やんちゃ？  
だと思っ。

今はしないが

昔あまりにもストレスがたまつて  
我慢できず喧嘩しに夜の町へ行つてたことがある

…家に帰つては兄と比べられ

しまいには私は家族から

はみ出された存在になつていたからなあ…、うんあれはキツかった。

】

「…うん、そういうことになるね。」

むしろお淑やかっという言葉は私にはない  
って考えといたほうがいいよ！



凜がそういうと二人は苦笑した。

「はあ、肝に銘じておきますね？」

「フっ…お前それ、自慢げにいうことか？」

「うん、いうことだねっ…それより  
当主になるにあたって情報頂戴よっ」

そう、凜はこの世界にきたはいいが  
この国の名前などぜんぜん知らないのだ。

「ああ、そうでしたね」

「お前が変な格好するから  
説明するの忘れてたじゃねーかっ」

【…ええー、私のせいなの？  
自分が悪いんじゃないっ】

「で、まず凜様は何をお知りになりたいですか？」

「ん、まずはこの国についてかな」

「はいわかりました。ではまず国の名前から…、この国の名前はドラディラス王国といます。そして都市が6つですかね。」

「まず一つ目の都市がアクール、海の恵みが多い都市です。  
2つ目が、ゴッデルンケ、鉱山があり宝石が有名な都市です。  
3つ目は、リーフレア、自然が多く作物も豊富な都市です。  
今私たちがいる都市はここです。」

「4つ目はファラード、活火山があり温泉などが有名ですかね。  
5つ目はシルフッド、谷にある都市で風がよく吹き風車が多くあります。  
6つ目はウィジイー、一年中雪が降る都市で 毛皮製品が有名です」

「どこもすばらしい土地ですので  
いつかは行ってみたいですね、っと  
レインは最後ににこやかに話した。」



## ドラディラス王国（後書き）

ごめんさい 長くなったので  
次のページでも話が続きます。

## 当主の力

そう話したレインに

凜は無邪気な子供のような笑顔で返した。

「うん！そうだね、でっその都市ってだれが治めてるの？」

「その都市の中で一番くらいの高い貴族ですよ。」

「へえ、…その貴族も大変だねえ」

凜がしみじみと話すとレインは  
にこやかにこつと言った。

「はい、これから忙しくなりますね凜様。」

「…えっ？」

「はぁ、お前馬鹿だろッ」

お前がいつその大変な貴族の中に

「グレイス家も入ってるんだよ。」

(……。)

「うえええッ！ なにそれッ

ここってそんな名高い貴族だったの?!」

「はい、グレイス家は誇り高い貴族ですので」

それを聞いた凜は

一気に血の気が引いた。

(…うそでしょ?)

「はあ まさかこんな凄い貴族だとは思わなかった。」

「なんか 勢いでこの当主になるッ! って  
言った私が馬鹿みたいじゃないかッ」

(あぁッー、普通こういう大事なことを成し遂げる人  
って言うのはもっと偉大で…、少なくとも  
こんな何もとりえもない私がすることではない。)

(…それともあれか？  
この世界の貴族のレベルが全体的に低いんじゃないか？  
なんの能力のなくとも問題ないよ、見たいいに。)

凜は引きつった笑顔を  
浮かべながら口を開いた。

「…ねえ その都市を治めている貴族って  
何も能力なくてもなれるの？」

「はあ？んなわけねーじゃんツ  
その貴族達ってのはその都市で  
一番優れていて、それぞれ凄い力を秘めているんだよ。」

「ファラードだったら炎の魔法が強く、アクールだったら水の魔法  
が強いんだ  
ちなみに、ここはリーフレアだからお前は植物の魔法が強いはず  
だ」

アルトは腕を組みながら  
お前にも思い当たる節があるだろ？とでも言っつかのように  
凜をまつすぐ射止めた。

思いもないことを言われて凜は  
頭をかしげ唸るように考えた。  
そして何か ハッ と思い出したかの用に  
表情を弾ませた。

「うん…、あっ！そういえば、私植物と話せるよ。  
んーでもこの世界では魔法が使えるわけだし  
植物と話せるのって珍しくないかぁ・・・。」

凜はせっかく見つけた  
得意技だったがそれが通用しないと考え  
また唸り、考えだした。

このとき凜は考えに集中しすぎて  
2人の様子は確認しなかった。

「……………」  
「……………」

その話を聞いた2人は  
ありえないことでも聞いてしまったかの  
ように目を見開いていた。



二人が固まってる間も  
うん、と考えていた凜だが  
ようやく回りが静かなのに気が付き  
様子がおかしい二人に目を向けた。

「ん…あれ？二人ともいきなり黙ってどうしたの？」

凜の声を聞いて我に返った  
アルトとレインはお互い顔を見合わせ、それから  
真剣な顔つきで凜を見た。

「凜様 あの…ご確認したいことが、」

あまりにも真剣な二人に  
凜は頭をかしげた。

「ん？どうしたの？」

「お前さっき植物と話したって言ったよな？」

「え?...あーうん、言った。  
でもあれってアルト達もできるでしょ?」

「いいえ、できませんよ」

「えっ!?!?できないの?何でっ!?!」

「できるわけないだろ?そんなこと怖いこと  
植物と人間は違う種族なんだから」

「うそだあ、だって私は出来たもんっ」

凜は少し興奮気味に話す。

「凜様落ち着いてください。」

「アルトが言っているのは一般論です。」

「?...一般論何それ、じゃあ例外もあるってこと?」

「そうです、このグレイス家は特別で

魔力と関係なく植物と話せる能力を持っているんです」

（ふうん、じゃあ私はグレイス家の当主なわけだし

植物と話せるのは当たり前だったのか、…ん？でも、それじゃあ何でアルトとレインはあんなに驚いたのだろうか。）

「ふうん、理由はわかったけど…じゃあ

何であんなにレイン達は固まっていたの？」

「それはですね、植物と話が出来るグレイス家ですがその能力を持って生まれてくるものは

一代目と二代目までだったのですよ」

「だからお前がその幻といわれた力を持ってるのに俺達は驚いたんだ、」

「…なるほど、でもそんな力あっても魔力がなかったら話にならないよ」

そう話した凜に

二人はえ？って言うような表情をした。

「もしかして凜様気づいてないんですか？」

「ん？何が」

「凜、お前凄い魔力持ってるぞ？」

「えっ…うそ、」

「うそじゃありませんよ、私達が凜様を見つけられたのは凜様がものすごい魔力を放出したからなんですから…。」

「ああ あれは凄かったな  
森が光に包まれてたんだから」

それを聞いた凜は顔は引きつり薄っすら背中に冷や汗を掻く…。

「ええつと…私 身に覚えがないんですけど、」

「おそらく急激な心情の変化で  
魔力など気にしていられなくなり、  
そしてすぐに気絶してしまったんでしょね。」

「ああ、だからかあ

叫んでたところまで記憶はあつたんだけどなあ」

凜はしみじみと

話した。そして空気も少し暗くなってしまったが  
アルトが突然声を上げた。

「なあ凜魔法は俺達が教えるから安心しろ、  
そんなことより先代は植物と話すだけじゃなく  
動かせる能力もあつたらしいぞっ  
何か試してみろよ！！」

それを聞いた凜は

戸惑った表情をしたが

すぐに好奇心一杯という顔付きになった。

「えっほんと!?  
じゃあ試してみるっ!」

凜はそう言い

テラスからちようど真ん中に  
ある赤い実がなっている木を見つめた。

(そこの立派な木さんっ

ちよっとその実を分けてくれない?)

凜が話しかけると

その木は ワサワサと体をゆすり始めた  
そして地面も揺れはじめる。

それを見た2人はあわて始めた

「おっおい凜お前何したっ!」  
「りっ凜様!?これはいつたい」

そうしているうちにも  
木のゆれは激しくなる

「いついや…木の実を分けて  
としか話してないんだけどっ  
怒ったのかなあ、」

木は地面から自分の根っこを引き抜き  
テラスへ歩き始めた

木を見た3人は  
顔は引きつり冷や汗が流れた

そして急いで  
テーブルの下へかくれた。

「うわあ！！おいつ凜何とかしろ  
こっちに木が向かってきたぞ！！」

「そっそんなこと言ったって！！」

「凜様 伏せて！」

勢いよくきた木は  
テラスに突進し止まった。

ドゥンッ・ドゥンッ、ドゥドゥンッ！

《ああまた主様に会えるなんて光荣だッ

さあ主様…どうぞ受け取ってください》

いきなり聞こえた

シワ枯れた声に凜は机の下で伏せていた顔を上げた

…がすぐに危険を感じ

またもとの状態に戻ってしまった。

「…えッ？…ってわあああ！！」

ゴロ、ゴロッ、ゴロ、ゴロ、

雨のように赤い実が

上から降りだしたのだッ

…しかも大量に、

「もっもっいいいよ！…木さんーもっ十分ですー！



もう落とすのやめてくださいー!!」

《なんだっ…もういいのですか主様、  
遠慮なんてしなくてもいいですよ?》

「えッ遠慮なんてしてませんから!!  
本当にもういいから」

《…そうですね、分かりました》

木はそれからおとなしくなった。

おとなしくなった木を確認し  
凜たちは恐る恐るテーブルから  
身を出した…。

そしてテラスを見た3人は  
息を呑んだ。

テラスには地面を多い尽くすほどの

赤い実が転がっていたのだ。

「うわあっ凄っこれ全部林檎!！」

「…林檎がこんなに、」

これじゃあ足の踏み場もないですね」

「…林檎パイがたくさん出来るな」

興奮する凧に比べ

アルトとレインはあまりの

赤い実（林檎）の量に途方にくれていた。

「林檎の木さん

こんなにたくさんありがとう」

《いや 喜んでもらえてうれしいよ

では、主様また用がありましたらいつでも

呼んでくださいね》

木はそう凧に伝えると

もといた場所に地響きを

させながら帰って行った。

\*\*\*\*\*

その日から林檎づくしの  
生活の日々が始まったのはいつまでもない。

## 当主の現状（前書き）

これからの物語は  
前の話から6ヶ月経った後のお話です。

## 当主の現状

あの林檎騒動からはや6ヶ月…。

凜は今日もなれない稽古に励んでいた。

\*\*\*\*\*

「じぎげんよう、今日はお天気がよくていいですね」

凜は引きつった

笑顔を浮かべながら

社交挨拶をする。

「凜様もつと笑顔でッ！」

(チツ、クソツもつと笑顔なんて出来るわけないじゃん

しかもこんなふざけた挨拶…ありえない)

凜の表情は不満を溜め込む

度にとても怖い笑みに変わっていく

「…、このくらい笑顔でよろしいでしょうか？ ニッ」

「おいッ凜…、そんな笑顔じゃ子供が泣くぞ？」

「チッ うつさいなあ」

凜は貼り付けていた笑顔を捨て  
アルトをにらんだ。

「…凜様！！ レイデイがそのような口のきき方ッ  
はしたないですよ。」

「だって私レイデイじゃないし、てか、もうこの稽古  
大体出来てるんだからしなくていいじゃん！！」

それを聞いたレインは  
呆れたようにため息を漏らした。

「…はあ、いつからこの様な口の利き方になって  
しまったのでしょうかね、凜様は  
初めのころはまだ上品とまで言いませんがそれなりの  
言葉使いはされていましたのに…、」

「…いや、初めっからコイツは機嫌が悪くなると  
こんなだったぜ？」

ほら、出会ったばっかの時  
椅子振り回して暴言吐いてたじゃんか、っと  
アルトはしみじみしながら話した。

「アルトうるさい、  
しょうがないじゃん私はお嬢様育ちじゃないんだから。  
それに言葉使いなんて公式の場さえ出来てれば問題ないじゃん  
私はこんな授業よりもっと剣術とか馬術とかしたいよッ」

凜は普通お嬢様は手を出さない  
馬術やら剣術をアルトから習っていた、

今ではそこらの男よりは強くなっている。

「またそのような剣術など馬術など言うのですか？  
そんなものは女性には必要ないのですよ」

「いやッ 私には必要あるね！」

凜は唯一外で体を動かせる稽古をとられまいと必死に講義する。

そしていつもの様に2人の言い争いは始まるのだ。

そしてしばらくしたところに

いつものごとく

アルトが呆れて凜とレインを止めに入るのだ。

「はあ、まあいいじゃねーかレイン

凜は女の前に当主なんだから。

当主は何があっても対応できる様に

強くなくちゃいけねー、その点に関しては家の

当主様は優れてると思うぜ？」

その話を聞いた凜は  
頬を赤らめ興奮する。



「おっやっぱリアルトちゃんはいいこと言っねえ」

その反応とは別にレインは  
複雑そうな表情をする

「確かにそうですが…、私は凜様がお怪我をなさらないかと  
心配でならないんですよ。」

「ハハッ お前は本当に親バカだな、  
大丈夫だよ、何のために俺が付いてるんだと思ってんだ」

「…しかし、」

「レイン心配してくれてありがとうでも 大丈夫だよ、  
危ないっと思うことは自分でも判断出来るし  
何より優秀な護衛が付いてるんだから！」

凜は元気よく

心配性なレインを納得させる

「…はあ、わかりました。」

しかし絶対に一人では行動しないでくださいね」

…そしてレインは凜の

押しの強さに負けてしまうのだった。

## 美しき狼

\*\*\*\*\*

今日も凜は午前の稽古を終え  
花あ溢れる庭のテラスで  
お昼のティータイムを楽しんでいた。

「ん〜ッやっぱりレインの入れるお茶はおいしいねッ」

口に入れた瞬間に広がる  
紅茶のいい香りにおもわず顔が綻ぶ。

その顔につられレインも  
笑顔になる

「フっ 恐縮でございます」

「それにしてもアルトがいないと  
静かでいいねえ」

今日は朝早くから  
買出しに行っているのだ。

「本当ですね」

2人の和みのムードに  
いつものごとく動物達が遊びにくる

チュンツ　チュン

ピキーンツ

青や赤黄色の鮮やかな鳥達に  
鹿や銀狼…。

森では敵対同士の者たちだが、  
このグレイス家の庭では  
皆争いをせずこの和やかな雰囲気を楽しむのだ。

そして大きくてきれいな白銀の毛の持ち主、銀狼が  
挨拶をするかの様に凜の足に尻尾を絡ませる。

「フフツ、くすぐつたいよハク、」

(…挨拶をしたただけだろう、この土地の主様に)

つい最近わかったことだが

凜は植物だけでなく動物とも会話することが出来るのだ

だが話が出来るといっても植物達とは違い  
力のある動物としか話せないのだ。

「ハク様、主人と仲良くされるのは良いですが  
間違えても食べないでくださいね？」

ハクの体は大きくポニーと同じぐらいの  
体格をしている、レインは心配なのだ

凜がいつかパクリと食べられてしまうのではないかと。

だかハクはその質問を  
鼻で笑った。

(フツ、我がそのようなことをするわけないだろう  
主様は私の守るべき方なのだから…、)

それを聞いた凜は頬を赤らめる・・・

【きゃあッ　ハク　カッコいい  
そんな騎士みたいなせりふ　もっッ惚れてしまっわッ!!--!】

そつもだえる凜の姿を見て  
動物の言葉がわからないレインは  
首をかしげる。

「凜様ハク様はなんと申されたのですか？」

「ん〜？エヘヘッ、私は守るべき方だから  
そんなことはしないだつてッ」

レインは変なテンションの凜に  
苦笑いを浮かべた。

「…そうですね、それは頼もしいですね、」

「うん、私はハクのこと信頼してるからね」

つと凜はハクの首に顔を埋めた

そしてハクは当たり前前だッとも言うつかの様に目を細めた…。

(…ああ 我は主様には忠実な僕だからな)

「クスッ、そういえばハク

こっちに来るときアルトに会わなかった？」

アルトは朝出かけたが

もうすぐ帰ってくるはずなのだ。

(アルト…、ああ あの頭の軽そうな奴が  
それなら水車の方で見かけなあ)

水車はこの屋敷のそう離れていない  
川のところにあっただははずだ

「そう、それならもう少しで帰ってくるかなあ、」

(…それはわからぬぞ)

「…えッ？何で」

(色々立て込んでいたからな)

「…ふうん、頑張るねえ」

(…ああ、)

凜はその話を聞いてまた  
女の子でもナンパしてるんだと思い  
さほど気にはとめなかった。

今日はいつもと違って

大変なことになっていたのに…、



## 赤と緑の客人

動物達のお茶会は終わり

ちよつど午後の稽古が終わるころだった…。

「りいりいりいりいんツ!」

屋敷の入り口の方から  
凄い声が響いてきた…。

「うっさッ!」

「本当ですね、」

2人は暫くアルトを無視していたが  
止むことのない声に降参し

毒づきながらも

アルトの方へ向かった。

凜は荒々しく  
ドアを開けた…。

---

バンッ

「…。」

凜はアルトを怒鳴り散らそうと思っていたが  
アルトを見た瞬間萎えた。

【…はあ 騒いでいた理由がわかったわ、  
あの二人に絡まれてた訳ね、】

「アルト…お遊戯会ならよそでやってくたさる?」

凜はアルトが騒いでいる理由はわかっていたが  
わざと呆れた目線を送った。

「…凜様と私はあなたの茶番に  
付き合ってる暇はないのですよ?」

私達がからかっている訳は  
アルトの格好にあった。

頭に赤い花をあしらった花冠  
腰には木の様なごつごつした太い蔦が  
ベルトの様に巻かれていた。

「違ッ、ふざけんなッ」

この状況が楽しそうに見えるか！」

「あら、楽しくなかったの？」

「ッ、楽しい訳あるかッ！！ってかこう言っときだけ  
お嬢様口調になるの止めるッ余計イラつくわッ！！」

「フフッ 上達したものでしょう？」

「……………」

さらにおちよくったら  
アルトは鬼のような形相に……。

「じょっ冗談だってば！！そんな怖い顔しないでよッ」

「アリス、ゴード 離してあげて」

私がそういうと

花の冠と木のベルトは光に包まれた。

そして光終わると

そこには2人の姿が…。

「久しぶりアリス、ゴード」

アリスは真っ赤なドレスに身を包み  
髪の毛も赤、

ゴードは麻で出来たような茶の  
動きやすい狩人みたいな服を着ていた。  
髪の色は緑だ。2人とも20代に見える

まあ

本当の年齢はとうにその  
歳を越えていると思うけど。

「本当、久しぶりだわ」

「お嬢ちゃん、少し背が伸びたんじゃないか？」

「エへへッ そうかなあ？」

3人は楽しそうに会話を進める  
しかし、それは長くは続かなかつたのだ。

凜はふと、自分後ろから  
寒気を感じた。

不思議に思い  
振り返るとそこには  
殺気をまとったレイン達がいた。

アルトは鞘から剣を抜き  
レインはナイフに手をかける…。

そして二人の声は低く鋭く響いた。

「お前らドコから来やがった!!」

「主人から離れていただけですか？」

それを聞いた凜は  
冷や汗を掻く…。

【ヤバツ　そういえば二人には  
話してなかったんだっただ！】

別にレインとアルトは

アリス達と会うのは初めてのことはないのだ。

レインとアルトは

アリス達と月1回ぐらいのペースで会っていたはずだ  
彼らがそれに気づいていたかは知らないけど

凜は月1回アリス達が鳥に運ばれてくると

部屋に飾られていた花たちと同じ場所に

生けるのだ、その時のアリス達の体はもちろん  
植物の体をしている。

…あんなに多い花の中から

アリス達を見つけるのは容易ではないだろう。

【あゝ、どうせアルト達は植物の声は分からないから

紹介は別にいいかあとか思ってたのが裏目にでちゃった】

「ちよつちよつと待った〜!!」

凜は冷や汗を浮かべながら

大きな声を出しレイン達を止めに入った。

「凜様危ないでしょう？お退きになってください」

「嫌だ、二人が剣を下ろすまで退くきはないよ」

凜はそういい

2人を真つ直ぐ見る

凜は2人が剣の矛先を下げるのを待ったが  
なかなか下ろさそうとしないので  
凜は痺れを切らした。

「この人達は私の友人、危険人物ではないの  
だから その剣を下ろして、これは命令よ」

そついうと二人は固い表情をしたが  
すぐに眉を細め剣を下ろした。

「はあ、命令かあ  
お前も言うようになったなあ」

「命令ですか…、それは仕方ありませんね」

それを聞いた凜はほっとした。



## 赤と緑の謎

---

あれから客間へと移動した。

私達は重々しい空気の中

アリスとゴード、そして凧たちが

お互い向かい合うようにソファーに腰を下ろしていた。

「…で、凧様この方達とはどのようなご関係で？」

「俺達ずっと凧のそばにいるけど

この人達、見たことねーぞ？」

二人は探るように

向かいの席に座るアリス達を見た。

アリス達はその目線に

クスリ と笑った。

「なっ、何が面白いんだよッ」

「ああ、失礼貴方がわたくし達と会うのが初めてだ。と惚けてらっしやるのが面白くてつい、笑ってしまいましたわッ」

クスクスと笑いながら  
アリスは話した。

「…？、その言い方ですとまるで私達が貴女と会うのは初めてではない。っという風に聞こえますね？」

レインは笑われて少し不機嫌そうだ。

「ああ、その通りだ、俺達が会うのは初めてじゃないぜッ俺達は最低でも月1回ぐらいのペースで会っていたはずだッ」

それを聞いたレイン達は  
顔を歪めた…。

「…そんなハズはッ」

「ッうつ嘘だ!!」

「嘘じゃないぜッ」

疑うなら一つ嬢ちゃんの部屋にいた者しか  
知らない話をしてやるうか、

ゴードはニヤリと口元を上げた。

レイン達はそんなはずはないと  
息を呑んだ。

「フッ…お前達、過保護すぎるよなあ  
嬢ちゃんがベットに入ったあと、  
ちゃんと寝てるか見に来るなんて」

それを聞いたレイン達は目を大きく開き  
驚いた…。

しかしそれ以上に驚いたものがいた。

「えええええッ！嘘ッ えつちよッ  
うわあッ私二人に寝顔見られてたの！？  
ああッ恥ズッ！！」

「今頃恥ずかしかつても遅いですわよ凜、  
おそらく、貴女がここにきた時からの習慣ですから」

そうアリスは、顔を押しさえ赤くし、悶えている  
凜にニコやかな笑みを向けながら告げた。

「…嘘でしょッ」

悶える凜にレイン達は  
申し訳なさそうに謝った。

「すまん凜ッ 俺達お前のこと  
自分の娘のように思えて可愛くてしょうがないんだッ」

「それに凜様の寝顔は癒されます…、」

「／／うわああッもう、なに何っ言っちゃってんの…！  
あゝあゝ、二人の気持ちはうれしいけど、…んゝやっぱ恥ずいッ」

凜は二人に大切にされていたことは分かっていたが、こんなにも自分のことを思っていてくれたことを知り、凄く嬉しかったが、そんななれない愛情を向けられ、くすぐつたいような、恥ずかしいような感覚になった。

そしていつの間にか話がずれてしまったので、話を戻そうとゴードは大きく咳払いをした。

「…ん、んツ、ところでレインさん達は俺達が誰か分かったか？」

そう聞かれレイン達は再びうん、と頭を傾げ考えた。

そしてあいまいな感じでレインが口を開いた。

「…我々が気づかないが、凜様は気づく…、もしかして貴方は植物でございますか？」

それを聞いたアリス達は

意味深な笑みを見せた…。

「嘘だろツ？こいつ等どこから見ても  
植物には見えねーじゃねーかツ」

アルトはゴードに近づき  
ジロジロと観察を始めた。

するとゴードはタイミングを見計らって  
植物の体に戻した。

——  
パアッ

部屋に光があふれた。

「ウツまぶっ！！」

そしてアルトが目を開くころには  
ゴードは消え、足元に木の枝が落ちていた。

「ハッハ、マジかつ」

アルトはもう真実を受け止めるしかなく、困った様に乾いた笑い声を上げた。

そしてレインは確信した。

「では、先ほどのアルトに巻きついていたのはお二方でいらっしやいますね？」

「ええ、そうよ、ようやく分かりましたのね」

レイン達は自分達があればほど警戒していたのが馬鹿馬鹿しく思い、気を落としたのであった。

そして彼らは自分達より早く凜と知り合っていて凜の暴走の力により今の力を手に入れたと話した。

これを知ってレイン達は凜の魔力の強さと自分達より早く凜と知り合っていたことに肩を落とした。





## 赤と緑の謎（後書き）

読んでくださってる方ありがとうございます。

評価、お気に入りが増えていて凄くうれしく思います！

これからも頑張っていきますのでよろしくお願いします。

## 悪魔の悪戯

\*\*\*\*\*

「でっとうしてわざわざ屋敷まで来たわけ？  
いつもなら体の一部だけよこすのに、」

いつもは枝や、花ーりん だけ鳥に運ばせて来るのに  
今日は珍しく本体で屋敷に来ているのだ。

「もしかして、非常事態なの？」

そう聞くとゴードが  
さすが嬢ちゃん分かってるねえと言い

アリスは深刻そうに  
口を開いた。

「最近神殿の方に人間が来るのです」

凜は意味が分からないと首をかしげる

「…人間？」

「はい、しかもシルフットの住民達ですわっ」

シルフットは私達がいるリーフレアの下にある都市で風の国だ。

「…？ 何でまたそんな遠いところから」

私が聞くと

アルトが口を開いた。

「そりゃあ、神頼みだろうよ」

「神頼み？」

私は聞きならない言葉に頭を傾げた。

「はい、あの神殿は昔何でも叶えてくれる

神様がいたと信じられていたんです。  
最近ではその信仰は途絶えていたはずなんですけどね」

「ふうん、で、その信仰も薄くなった神に願うしかない  
大変な願い事って何なわけ？」

「それは…はやり病だそうですね」

「はやり病？」

「はい、症状は高熱と酷い悪夢を見るようになると申しております。  
た。

そしてその病のあまりの苦しさに

『悪魔の悪戯』といわれているそうですね。」

「悪魔の悪戯ねえ、でも結局は病でしょ？」

「その当主でも対処できるんじゃないの？」

「それがなあ、その当主様よう、

町の者を助けようと努力しまくったんだけど  
同じ病にかかってしまっただけで今ではまったく  
動けないらしいぜっ」

ゴードが眉を細めながら話した。

「なにそれ、全然駄目じゃんッ」

私は呆れた声を上げた。

そして凜は今まで聞いた話を整理し  
大体自分に何が求められているかを察した。

「はあく、分かった、

アリス達は神殿にまで来る民が不憫でならないから  
私にどうにかしてほしいと頼みに来たわけね」

「はいそうでございますわっ」

「ん〜、正直面倒だけど まあ恩を売っておくのもいいかあ  
…いいよ、私が何とかしてあげる」

凜の言葉を聴いたレインとアルトは  
驚きの声を上げた。

「えッ凜、お前そんな大変そうな病  
直せるのかよッ!！」

「…凜さま大丈夫なのですか？」

「うんツきつと大丈夫だよ

何せ、ここはグレイス家だからねえ、」

凜は自信ありげにそう話した。

「レイン、シルフッドに一応手紙出しといて

近々そちらに参りますつてね、いきなり訪ねて  
敵扱いされるのも尺だからね…。」

「はい、かしこまりました」

「あと、アルトは私を

グレイス家の図書室に案内して」

「ああ 分かった」

そして凜たちは

アルトに案内され図書室へ足を進めた…。



## 隠し扉

---

コツツ、コツコツ…。

赤い絨毯の敷かれた長い廊下に  
無数の足音が響く…。

図書室に向かう道は奥に進めば進むほど  
窓からの光は木に遮られ  
薄暗い道となっていく

…図書室はこの屋敷で  
玄関から一番遠い場所にあるのだ。

そしてようやく

---

コツ、コツ、コツン。

図書室の扉の前に着いた。  
扉は大きく、木で出来ていて そこには



動物や木、草花の彫刻が施されていた。

「さあ 着いたぞここが図書室だ」

「うっうん、……」

凜はこの扉から漂う異様な  
オーラに戸惑いながらも扉に手をかけた…。

キィー…。

「……うわぁ、広ッ!!」

室内は30以上の本棚が並び  
2階まで本がびっしりと並んでいた。

そして

凜を初め次々と室内へ入る。

「本当ですわね…。」

「…良くこんなに本が集まったなあ、」

アリスとゴードはそう言い  
室内を探索始めた…。

入り口のところに立っているのは  
凜とアルトだけになった。

凜はその場で室内を見渡す…。

【えーっと、一番大事な本を置く場所といえば…、  
地下、屋根裏、壁、だよねッ  
きつとどこかに隠し扉があるはずだッ】

そして、凜はキョロキョロ動かしていた首を  
ある一転の場所で止めた。

そこは…2階へと続く階段の下にある壁だ。

この図書室の壁はすべてチヨコレートブラウンの板で覆われ、そこには図書室と同じような彫刻が施されている。

凜は違和感を感じた壁へと  
足を進めた…。

そして その扉の前まで来ると  
凜は壁に手をつき  
確かめるように壁の模様をなでた。

「おい凜、壁なんて撫でてどうしたんだ？」

アルトはいきなりおかしな行動を取った  
凜に首をかしげながらそう質問した。

すると凜はニヤリと不気味な笑みを漏らし  
嬉しそうにつぶやいた…。

「…見つけた。」

「つっ…、」

その笑みを見たアルトは  
あまりの不気味さに背筋に冷たい汗を流した。

そしてアルトは凜が指先で触れている  
彫刻に目を落とした。

「それは…蜘蛛か？」

そう、凜は他の壁にはない蜘蛛の  
彫刻がされていたところを触れていたのだ。

「うん、蜘蛛だよ　グレイス家の紋章にもある蜘蛛」

そう話すと凜は小指にはめている  
指輪を蜘蛛の体にくっ付けた…。

指輪は青い花、緑の葉っぱなどの  
模様がつけられていてとてもきれいだ。

もちろん花などは宝石で出来ている…。

i 2 2 4 2 4 — 2 7 9 4 <

>

この指輪はグレイス家が代々引き継いでいる。

そしてこの指輪は私がこの生活になれ

落ち着いたから、という理由で最近レインからもらったものだ。

まだこの指輪についてどんな能力があるか把握してないが

強すぎる当主の魔力暴走のストッパーや、

グレイス家にあるいろんな鍵の役割もするようだ。

…そして蜘蛛に指輪を当てた凜は

口を開いた。

「〜我は当主なる者なり〜」

すると…蜘蛛はワサワサと足を動かす

壁中を歩きまわった。

暫くするとその蜘蛛は壁の一番はじに

縮こまり、動きが止まった。

動きが止まるとともに壁は自然と

カチャリツと鳴り、ゆっくりと開いた。

そして凜は迷わず開いた壁の中に進もうとする…。

するとアルトが焦る、

「おッおい！ そんな怪しげなところを  
先陣きつていくなッ危ないだろう！」

「フフツ、大丈夫だよ、」

だが、凜は笑い  
心配するアルトをよそに  
好奇心で一杯のようすだった。

そして危機感のない凜にアルトは  
呆れた。

「はあ、お前のその自信はどこから来るんだよっ、」

「ちゃんとした計算から決まってるでしょ？」

「計算？」

「そう、ここの隠し部屋は  
当主の指輪と当主の魂がないと開かない」

「つまりこの部屋には当主以外は入れないと言う事になる  
そんなところにわざわざ自分の命を危険にさらすような  
仕掛けを置くとおもっ？」

「……なるほど、」

アルトは驚いた  
いつもは頭の弱い凧だが  
ちゃんとした計算をしていたことに。

「まあ危ないとしたら 血筋のものではない  
アルトだから気をつけてねッ」

アルトの顔が引きつる。

「じゃあ、行こうかッ！」

凧はそういい

隠し扉の暗闇の中に消えていった…。

…暗闇の中、ひんやりとした空気と  
カビ臭いにおいだけが存在感を放つ

「…凄くカビ臭いなっ」

アルトが眉をひそめる。

「ずっと放置してたんだから  
当たり前でしょ、」

凜はあたりを明るくしようと魔法を使う。

「…私の道を光で満たせ」

凜は手を胸から外に放つように  
手を動かした。



ポツ、ポ、ポポツ…、

すると手前から徐々に  
光の玉が現れ始めた。

「うわぁ、先は長いなぁ」

凜は視界が広がると落胆した。  
自分達の先には下へ下へと伸びる  
深い階段があったのだ。

凜は一息ため息をつき  
階段へと足を伸ばした…。

「はぁ、行くしかないかぁ」

---

---

暫く歩き、やっと  
行き止まりになった。

そして、凧たちの前には  
グレイス家の文様が彫られた  
扉が聳え立つ…。

「…ここだね、」

「…ああ、」

凧の鼓動は速く動く。

そして扉に手をかけた…。



## 植物図鑑（前書き）

く読む前にお知らせ

文字量が増えたため前のページに  
文字を増やしました。そこを見てからこちらを  
見るようにしてください

手を煩わせ本当にすみませんッ

## 植物図鑑

---

ギツ・ギイイイ

くぐもった音とともに  
ひんやりした空気が流れ出た…。

凜は部屋の中の様子を見る。

凜の表情は引きつる。

「……あとで、レインに片付けてもらおう……うん」

「……どっついつ意味だ？」

引きつっている凜を不思議に思い  
アルトも扉の中を覗く。

「うっ…これはひどいなあ」

「どっついつ…」

部屋の中はドコから入り込んだのか分からない  
植物が壁や、机に寄生していたのだ。

「まあ 突っ立っていてもしょうがないから  
とりあえず 目的を果たそうかッ」

そついい凜は部屋に足を踏み入れ  
5つぐらいある本棚を順々に見ていく

「それにしても…ん〜ッ見づらいなッ」

だが、ここにも植物が巻きつき  
なかなか探しにくい。

…植物と奮闘している凜を  
アルトは面白いものでも見ているかの様に  
口角を上げてみていた。

その瞳はドコまでも優しい。

「おい凜 そういえば何を探しているんだ？」

「んー？凶鑑だよ、…うわぁ、黒い花咲いてるよ」

凜は一生懸命手を動かしながら答える。

「凶鑑？ そんなの上の階にあったんじゃねーか？」

「うん、普通の凶鑑ならあっただろうね でも、私の探しているのはグレイス家秘伝の凶鑑ッ」

「秘伝の凶鑑？」

話を聞いたアルトは  
首を捻る

「そ、私の予想では薬草について書いてある凶鑑だよ」

アルトはなるほどと思った。

「そういつことか、でも…」れじゃあ探しにくいよなあ」

改めて目的を知ってからこの部屋を見ると  
途方もない気持ちになった。

いわばここは小さな植物園状態だからだ。

そして暫く奮闘していた凜だが  
諦めたかの様に声を上げた…。

「あゝもうツッ！ 凄くめんどくさいッ

どうなるか分からないけどもう、力使ってやる!!」

凜は今まで植物を動かすを使わないうでいた  
それはこの部屋が狭く、危険がある可能性があったからだ

でも、面倒臭がりな凜にはもう限界だった。

「アルトッ 危ないからこの部屋を出てて!!」

凜は植物と心を交わす者だから  
危険なことは起こらないと思うが、  
アルトはどうなるか分からないのだ。

「えッ?! お前まさかッ… わっわッちょっと待て!!」



凜がこれから何をするか読み取ったアルトは  
急いで部屋を出ていった。

---

バタンツ

アルトの退出を見届けた凜は  
ふう、と一息を着いたそして意を決して  
口を開いた。

「ここにいる全ての植物達よ、  
我がこの部屋を使いやすいように場所を空けよ」

凜がそう言うと部屋の植物達は  
ガサガサと動き始めた。

机にいた物は天井へ  
本棚にいた物は床の端に動いた。

---

サワサワツ、ガサガサ、…ガサンツ。

全てが動き終わるころには  
部屋はとも見やすいものとなっていた。

しかし、困ったことが一つ、  
今まで静かだった室内がうるさくなったのだ。

植物達が私に話しかけてくる…。

いま思えばなぜ先ほどはだれも話してなかったのか  
不思議に思う。

(ふぁあッ 長く寝すぎましたわッ。

先ほどは挨拶もせず、失礼しました新しい当主様)

(長い間訪問者がいなかったためか

私たち反応が鈍くなっていましたわッ)

凜は聞こえた声の方へ向こうと思ったが  
首をかしげキョロキョロと部屋を見渡す。

「…えッ？あぁ、気にしなくていいよ…ところで  
声の主はどこにいるのかな？」

植物はもうごっちゃんに絡まりあっているの  
誰が話しかけているのかわからない。

凜がそう聞くと植物は

まあっ失礼しましたわッ

とつぶやき体を揺すり始めた

「ああ 部屋の角にいたのかッ

それにしても混んでるねえここは」

凜はその植物の方へ近づき

どう絡まっているか確認するため

植物を掻き分け始めた。

ガサガサッ

（あははっ くすぐったいよ主様ッ）

（止めて下せえッ）

（キャッッ 止めてくださいませッ）

凜は触れている植物が  
騒ぎ始めたので

あわてて手を引っ込めた

「わっごめんッ」

（あはは、はッはあ、いいえ主様気にしないでください）

「それにしてもこれは酷いね」

凜はどう生えているか掻き分けて見たが  
生えているところが狭くギユウギユウだったのだ。

「今は忙しくて出来ないけど

帰ってきたら君達がちゃんと過しやすい

環境にしてあげるねッ」

凜がそう話すと部屋の植物達は

余程嬉しかったのかサワサワと体をゆすった。

（まあっやさしい主様ですわッ

私たち貴女様のためなら何でもしますわッ）

「ほんと？ありがとッ…じゃあ早速だけお願いしよつかな？」

（はいッ何なりと！）

「この部屋のどこかに薬草とか載ってる

図鑑があると思うんだけどどこにあるか知らない？」

（…図鑑ですか？）

植物はうんー、と唸る

そうして考えていると部屋の奥の方から  
声が出た。

（主様、それでしたらここにありますよッ）

声のほうを見ると

一つの植物が揺れていた。

「本当?!…これねッ ありがとう助かったわッ」

凜は植物にお礼を言うと  
早速本を開いた。

---

パサリッ

「おおツさすが魔法がある国だね」

凜は本を開いて感動した。

図鑑には時間魔法でもかけられているのか  
新鮮状態で植物が張られていたのだ

「これは分かりやすくていい、…ああありがと」

凜はあまりにも熱中するので  
周りの植物達は凜が疲れないように椅子を  
差し出したのだった。

「ええつと高熱と酷い悪夢に効くのは…あああった  
(タワタワ) ねえあっこれなら森で見たことがあるっ  
でっこれを根っこから全てを煎じて飲むわけね」

凜は突然浮かんだ疑問に首をかしげる

こんな手に入りやすい薬草があるのに  
何で対処が遅れたんだろ？」と。

「そういえばこの国で薬草が売られているところを見ないなあ  
医者は何を使って病を治しているんだろ？」

凜は放置したままのアルトに  
聞いて見ようと思った。

そして凜は出口へと向かった。

「じゃあありがとう、また来るね」

——  
そういい凜は部屋を出ていった。

## 旅立ち

あれから凧はすぐに森へ行き  
薬草を大量に摘んだ

それから持ち運びしやすいように  
全てすり鉢で粉状のものにした。

そして全ての準備が整ったころ  
凧たちは馬車に乗りシルフッドへと  
旅立ったのだった。

\*\*\*\*\*

---

ガラガラ、ガラッ

馬車の走る音がのどかな  
道に響く……。

だがそれも2日を過ぎれば  
代わり映えのしない景色に飽きて来るものだ。



「あゝッ 暇！ しかも暑いッ」

凧はそういいながらスカートのスそをたくし上げた。

この旅の間凧は着慣れてない  
ドレスを着ないといけないのだ  
スカートは長く動きにくいし、この夏の時期には  
蒸れるのだ。

「あゝ凧様、はしたないですよ  
早くスそを下ろしてくださいッ」

レインは凧の思い切った行動に  
冷や汗をかく。

「別にいいじゃん、外からは見えないんだし。」

むしろ、私がドレスを脱がないで我慢してるんだから  
ありがたく思っべきだよッ…ね、ハク？」

凜はそういい隣でふせの寝をしている  
ハクをなでた。

(我は、主様がよければそれでいい…)

ハクは凜が撫でている手を尻尾で  
絡ませながらそう答えた。

「流石ハクッ！いいこと言うねッ  
レイン、ハクは私の好きにしていいって！」

それを聞いたレインは頭を抱えた…。

「ハク様甘やかさないください、…というより  
何故ハク様がここに居るのかいまだに疑問でござりますッ」

車内にはハク、レイン、凜が乗っている  
アルトは外で馬車の操縦をしているのだ。

「だからいざという時のために着いて来て貰ったって  
前にも話したでしょっ？」

…いざと言う時のため、  
この「悪魔の悪戯」の根源を立つためには  
山に入らないといけないことが分かったのだ。

秘伝の図鑑には「悪魔の悪戯」についても記してあった。

「悪魔の悪戯」… ガーラという植物が出す毒による症状。  
普通は森奥にひっそりと生息するが、まれに  
川のそばで大量発生することがあり、川底に根をはり、  
毒素を撒き散らすと記されている。

凜は今回の騒動はこれが原因だと考えた。  
川は私達が生活用水に使っている場所なのだ。

そして凜はこの病の根源を立つため

森に入り、樹を退かそうと考えたのだ。

「森に入るのはいつものことだったけど

それは自分の領地だったから安全だったこと。でも

今回は違う土地だ何が襲ってくるか分からないんだよ?」

「だから森に詳しいハクをつれていくんだよ

ハクなら鼻は効くし、強いからねッ」

そう凜が言うと

レインは納得がいかないという様に  
首を傾げた。

「…ハク様がいる理屈は分かりますが

何故凜様がわざわざ危険をさらす様なことを

しないとといけないのですか?」

レインは娘の様に可愛がっている凜を

危険な目に会うことが不服でしょうがないのだ。

「それは私の役目だからだよ、確かに

力技でそのガーラの樹を消すことが出来るけど

せつかく私には植物を動かす力があるんだから  
有効活用したいじゃんツ」

「それに植物からの信頼を  
失うわけにはいかないからねツ」

そう凜はレインを真っ直ぐ見て笑顔で答えた。

レインは考えを曲げなそうな凜の硬い意志を感じ  
仕方なく納得することにした。

「はあ、まったく無茶はしないでくださいよ？」

とレインは眉を八の字に曲げながら  
苦笑をした。

「わかってるよ、」

そして話終わると凜は昼の心地よい  
風に眠気を誘われ目を閉じた…。



## 秘密のハーブティー

\*\*\*\*\*

日が落ちたころ凜は  
寒気を感じ目を覚ました…。

車内は暗闇に一つランプが  
ゆらゆらとゆれていた。

「…ん、ん〜ッ って寒いッ!」

—————  
パサリ、

凜が勢い良く起き上がると  
肩から布が落ちた。

…良く見るとその布はブランケットで  
レインが掛けてくれたものだとなった。

レインの気遣いにお礼をしようと  
落としたブランケットから顔を上げると  
レインは申し訳なさそうにしていた。

「すみませんそれだけでは寒かったですよね、  
しかし今はそれだけしかなく…もう少ししたら  
シルフッドに着きますそれまでご辛抱くださいッ」

その様子を見て凜は慌てる、

「えッ、あッあ、全然気にしてないからいいよ  
それに寝てたから体温下がってただけだから  
今に暖かくなるよッ気にしないで!」

「…ですが、」

「、それにほらッ!」

っと凜はハクに抱きついた

ハクの毛はサラサラで温かくて気持ちいのだ。

また ハクも凜に触って貰って嬉しそうに  
目を細めた。

「こづすればあったかいでしょッ ニコッ」

主人に不憫な思いをさせて本当に



申し訳ない気持ちで一杯だったレインだが、

あまりにも必死に大丈夫だと主張する凜が可愛く思えてきてレインはクスツと笑った。

「クスツ　凜様は優しいですね、」

「…？、えッそんなことないよ、」

今まで暗い表情をしていたレインがいきなり明るくなり、唐突に凜は優しいと意味の分からないことを言うので凜は首をかしげたが、まあ　レインが笑っているならいいかと思った。

「あつそういえば、外にはアルトがいるんだよね？  
…ちゃんと寒さ対策してるのかなあ、」

凜は車内でも寒いのに外にいるあるとは大丈夫なのだろうか心配になった。

「…あいつの気遣いをするなんて凜様は本当に優しいですね、…あいつなら心配要りませんよ  
丈夫ですから」

凜はいくらそう言われたって暗くて寒い中に一人でいる  
アルトが心配でしょうがなかった。

何かアルトが元気になるものはないかと  
凜は考え始めたそして…、

「あッ、そういえばいいものがあるじゃんッ」

そついい隣の席においておいた  
バスケットの中をあさり始めた。

その動作をレインは  
首をかしげながら見ている

「…あ、あった。フフ、これがあれば間違いなしッ」

そついいバスケットから取り出した物は  
水筒だった。これは凜が内緒でもってきたものだ

「…それはなんですか凜様、」

「ん〜これ？これはねえ、私特製ハーブティーだよ」

このハーブティーはホットで  
体が温まる成分が多く入っている。

「…ハーブティーですか、いつの間にそんなものを」

レインはいつも凜のそばにいるはずなのに  
凜がお茶を作っている姿を見たことがなく、  
不思議におもった、

「まあ細かいことは良いからみんなで  
お茶会しましょッ」

そついい凜はお菓子や果物を  
バスケットから取り出し始めた。

「…そのバスケットを持っていたのは知っていましたが  
まさか、中身がお茶セットだとは思いませんでしたよ、」

レインは流石凜様だなあと  
笑みを漏らした…、

そして、準備が整うと  
お茶セット一式を布で包み  
凜は馬車のドアに手をかけた。

「じゃっ、ちょっとまってね、」

「えッ？あぁッ！凜様お待ち…バタンッ」

走行中なのに出て行こうとする凜を慌てて  
止めようとしたレインだったが  
それより早く出て行ってしまった。

車内に残されたレインは大きな  
ため息を吐くこととなった。

ビューッ

外は思っていた以上に寒く  
吐く息が白くなった。

しかも 風の国というだけあって  
風が強い、ドレスのすそがバサバサと音を立てる。

凜は一生懸命馬車につかまり  
うまく、アルトのいる運転席へと  
飛び移った…。

「…よっと、うわぁ寒そッ！」

アルトはフード付きの  
ローブを着ていたが風に強く吹きつけられ  
辛そうだった。

「んッ?…えッ凜!?’

いきなり聞こえた声に  
アルトは何だろうと疑問に思い声のした

方へと顔を向けた。

しかし、声を出した相手が凜だとは思っていないく、凄く狼狽した。

「お、おっお前、何でいるんだよ!!  
危ないだろッ!」

「まあっ、そんなに怖いお顔をされたら  
嫌ですわッ 笑顔が一番ですよ?」

そついい凜はアルトの鼻を  
ちよん、ちよん、突つつき  
必死に怒るアルトを  
ふざけた態度で跳ね返した。

その行動に呆気をとられたアルトは  
怒る気力を削がれてしまった。

「はあく、お前って奴は、…そこは寒いだろ  
ここに来いよッ」

そついいアルトはローブを少し開き  
凧を自分の股の間に座らせ  
後ろから抱きしめるように支えた。

「フフ、暖かいね？」

凧はアルトを見上げながら  
ニツコリと微笑んだ。

今まで暗闇の中一人でいたアルトには  
凧の笑顔を見れたことは凄く嬉しかった。

凧の体温が胸から伝わり暖かいが、  
それ以上に心も暖かくなった。

「フツ　ああ暖かいな、」

「あのね私お茶持ってきたんだ、  
一緒に食べよ？」

そついい凧はアルトのローブの中で  
ゴソゴソと手を動かした。

それを不思議そうにアルトは見守った。

そして準備が終わったのか

凜はお茶の入ったカップをアルトに渡した。

「よいしょっ、はいどーぞ、」

カップを受け取ったアルトは

そのお茶が紅茶とは違う香りだと気づき首をかしげた。

「ん？匂いが違うなあ…これは何だ？」

「それはねえ、私特製ハーブティーだよ  
体があつたまるように作ったんだよ」

凜は得意げに人差し指を刺しながら話した。

「ほお、それはいいなあ…じゃあ、さっそく」



そついいアルトはお茶を口に運んだ

お茶のは春の陽だまりの様に  
ゆつくり優しく暖かさが広まる。  
そんなお茶だった。

そのお茶が美味しくてアルトは  
ゴクゴクと飲んだ

「美味しい？」

凜が笑顔でアルトに聞く。

「…ああ美味しいよ、すごく美味しい」

そう答えると今度はいたずらっ子のような  
笑いを見せた。

「それはよかった、…そのお茶の中にはねえ  
アリスとゴードが入ってるんだよ ニコッ」

それを聞いた瞬間アルトは  
お茶を吹きだした。

ブツ

凜は思っていた以上に反応が良く、  
驚いた。

「うわッ ……冗談だったのに、」

「ゴツホツゴツホツ、ツーはあ、お前なあ  
言っつていい冗談と悪い冗談つてのがあるだろーよ！」

アルトは咳き込みながら  
苦しそうに凜に講義した。

「はあゝ、マジゴツタわッ」

「アハハッごめんごめんッ  
これあげるから許してよ、」

そう凜はアルトの機嫌を取るために  
美味しそうなケーキをアルトに差し出した。

不機嫌だったアルトだが、  
凜のケーキを見て簡単に釣られてしまった。

「ッ、しかたねーな許してやるよ!」

…凜とアルトのお茶会は  
騒がしいものだったが、お互い楽しむことができた。

そして暫く凜はアルトに抱えられた状態で  
外の景色を見ていた…、あたりは暗闇で景色は見えないが  
アルトの体温から抜け出すのが名残惜しかったのだ。

そして今、ようやく暗闇の中に  
光がポツポツと見え始めたのだ。

「凜あれが風の国シルフツドの都だッ  
もうすぐ街の中に入るからお前は車内に戻れ、」

「うん、わかった。」

凜はおとなしく車内に入っていった…。



## 風の都シルフッド

街に入ってからすぐに  
シルフッドの最も位が高いシーラン家の者が  
迎えに来た…。

---

そして今はシーラン家で準備することがあると  
言われ、屋敷の前で待たされている。

凧たちの目の前には  
大きな屋敷が立っている。

大きさは凧の屋敷と変わらないが  
流石風の都というだけあって屋根には風車が回っていた。

「わあ…、風車大きいですわね」

凧は口元は引きつっているが  
お嬢様になりきろうと微笑み頑張っている。

「はい、流石風の都ですね」

凜たちは珍しい風車の光景に  
目を奪われていた…。

凜たちが顔を上に上げていると

キイイー、と扉が開く音とともに  
遠くから声がかかった。

「クス、そんなに風車がめずらしいかい？」

声がした方へと顔を向けると  
そこにはそこには笑顔を向けている  
男の顔があった。

彼は背が高くすらつとしていて  
体は弱そうに見えたが、頭を見ると金髪で左の髪を  
編みこみしっていてチャラそうに見えた。

「どうも、グレイス家の皆さん始めまして  
シーラン家当主のアラン・シーランです」

「…当主？、失礼ですが当主様は  
病で苦しんでいるとお聞きしたのですが、」

凜は思いもしない人の登場に  
首をかしげた。

「ああ、確かに私は病にかかっているよ、  
でも、調子のいい時にはこうして普通の生活を  
送れるんだよ。」

まあ その後の苦しみがつらいんだけどねッ  
と彼は軽い出来事のように話した。

「そうでしたか、私どもも早くこの病を  
直せるように最善を尽くさせていただきますわ、  
…では紹介が遅くなってしまいましたか、」

「わたくしの名はリン・グレイス  
グレイス家の当主をさせていただいてますわ。  
これからシーラン家とはよい関係を築いていきたいと  
考えていますのでよろしくお願いします」

と最後にリンはニッコリと笑った。

「ほう、君が新しいグレイス家の当主かあ  
思っていたよりずいぶんとわかいね  
年はいくつだい？」

「…17でございます。」

「17かあ、若いなあこの上流貴族の中で  
一番年が小さいねッいやあ 実に可愛いよ」

「可愛いだなんていやですわッ  
照れてしまいますッ」

凜は一応恥らって見せるが  
内心は毒ついているのだ。

（ああ、おもった通りの女好きの男だ。  
…作り笑いで内面隠して  
都合のいい奴だな）

「いや、本当のことを言っただよ ニッコッ  
さあ 風の都の夜は寒い、屋敷の中へ案内しよう」



そういアランは凧の腰に手をあて  
優しくエスコートした。

エスコートする彼の顔は  
さわやかで凧でなければ骨抜きにされて  
いただろう。

「ニコッお気遣い感謝しますわ」  
(ニコッ腰触るな変態ッ)

そう凧は笑顔で返したが  
声は冷めて聞こえた…。

屋敷の中に案内されてからすぐに  
ディナーとなった。

食事の席は花やロウソク、綺麗な装飾をされた  
テーブルや椅子できらびやかな雰囲気にもまれていた。

スッ

そして目の前にはどんと  
豪華な料理が並べられていく…。

彩りも綺麗で、美味しそうな匂いが  
部屋中に広まる。

誰もが食欲を誘うそんな料理だが  
凜には一つ心配ごとがあった。

「まあ 素敵なお料理ですわッ  
ですが一つ気になっていることがありますのッ」

「んッ？なんだい」

「この料理に使用した水はドコの水を使っていますか？」

水、今回の騒動の根源だ

「ああ、そのことなら安心していいよ

君に手紙をもらった日から水は  
アクールから取り寄せているんだ」

水の豊かなアクール、  
シルフッドとは隣だ  
近くて仕入れやすいのだろう…。

「そうですねそれは世良かったですわ、  
こんな美味しそうなお料理を口に出来ないと  
もったいないですものねッ」

凜はそう愛想笑いをする

そして同じようにアランも  
ニッコリと愛想笑いをした。

「ああ、そうだね  
さてディナーの準備も終わったことだし  
食べましょうか、ニッコリ」

「…はい、ニッコリ」

「では、シルフッドとリーフレアの幸福を願い

乾杯！」

「『乾杯』」

---

ティンッ

部屋に透き通った音が響いた。

\*\*\*\*\*

食事が終わり

悪魔の悪戯騒動を

解決する方法を話し合う。

「…これが手紙に書いた病を治す薬でございます」

凜は素晴らしい紙に包まれた粉を見せた

この薬効果は期待できるが、凜には不安なことが一つあった。

…それは、この世界には植物を使って病を治す、という習慣があまり根付いていないのだ。

この世界の人達は病にかかったら 全部魔法で治す  
これが当たり前のようだ

だから凜はこんな得体の知らない 白い粉を見せて  
口にしろッ！と言っても駄目なんじゃないかと考えるのだ。

「ほう、これが例の薬かあ

この薬を飲めば苦しみが消えるわけだね？」

アランは興味深そうに  
指を顎にかけ薬を見つめた。

そんなアランを凜は複雑そうな顔で  
様子を伺っていた

「はいそうでございます。…しかし、アラン様は怖くないのですか  
？」

そして思い切って聞いてみることにしたのだ  
こんな見ず知らずの女が持ってきた奇妙な薬を  
飲もうと思った訳を…。

「ん？ああ 確かにこの薬が毒なんじゃないか、  
とか考えると怖いねッ でもどうせ死ぬなら  
ほんの少しの光を信じて

みるのも良いかも知れないと思ったのさッ」

それに君は毒を入れるなんて事はしないだろ？ッと笑ってアランは話した。

凜はその話をきいてアランは本当に必死なんだとおもった。

「ええ、私はそんな外道のするようなことはしませんわッ  
…アラン様のお考えのことは分かりました。」

、ではッ と凜はレインとアルトに持たせていた大量の薬をアランに渡した。

「これだけあれば足りると思いますわッ  
多くの民が救えることを願って下ります」

「…大切にに使わせて貰うよ、」

そういったアランの言葉は  
凄く心がこもっていたように聞こえた。



風之都シルフッド（後書き）

すみませんッ

リアルが忙しく遅れてしまいました



## 悪戯心（前書き）

第22話にお話を少しプラスさせていただきました  
面倒だと思いますがそちらから読んでくださいッ  
すみませんでした。

## 悪戯心

大体話がまとまり

凜はほっとした気持ちでお茶を飲んでいた。

レイン達は凜の隣に座っているが

私の使者としていたためどこか硬い表情をしていた。  
主人同士の話し合いの場で気が抜けないのだろう。

そんな二人を不憫に思い

凜はあと話がなければ

早くこの場を去りたいと思っていた。

そんなときアランが口を開いた。

「…ふう、僕はもう薬も飲んだし本当は

この話の場を終わらせても良いんだけど」

「僕は君に興味がないわかってしまっただけね

…僕と君、2人だけで話したいんだけど良いかなあ？」

そうアランは意味深な笑みを浮かべながら凜を見つめた。

そんなアランに凜は  
苦笑した。

そんな様子のアランを見てレインとアルトは  
眉間にしわを寄せた。

そしてレインが口を開く…、

「失礼ながら我が主人は未婚前の若い娘でございます  
男性と二人きりというのは遠慮させていただきたい」

「おや 君は私が女性が嫌がることを  
するとおもうのかね？」

アランがレインに威圧をかけるように  
話しかけた。

「…それは 心外だね」

まるで怒ってるようにも取れる雰囲気  
レインは内心焦る

「いえ、決してそのようなことは、」

凜は暫く2人の様子を伺っていたが  
どうも、アランが諦めないようなので  
口を開いた…。

（はあ、本当は出来るだけ関わりたく  
なかったのだけど…。）

（フツ、まあ胡散臭いへらへら笑っている男を  
懲らしめるのもいいかあ）

「レインもういいわ、」

…アラン様わたくしもちょうど  
貴方とお話が見たかったんですの」

レインは目を大きく開いた。

「レイン、アルト下がりなさい

わたくしは大丈夫ですわッ

…クス、もしアラン様が不埒なことをしてきたら

わたくし自ら、手を出させていただきますわ ニッコッ」

そんなことを言い出す

凜にレインとアルトは余計に不安になった。

凜の目は闘争心に燃えていたからだ。

（ああ不安です、あの悪戯する子供のような笑み

何が起こるやら…。アラン様が危ない気がします）

（悪い笑みだなオイ、…凜が手を出したら

アラン様も痛めに会っただろうなあ）

二人はお互い凜が何をするのが気になり

乗り気ではなかったが、しぶしぶ凜の言うことを聞くことにしたのだ。

「分かりました、では私どもは扉の外で

控えて降りますので、何かありましたら

いつでもお呼びください、」

そついいレインとアルト  
は部屋から出て行った。

その様子を見ていたアランは  
口を開いた。

「いつまでいるつもりだ  
デーーお前も下がれ」

えッ？と凜はアランの見ている方向を見ると  
そこにはアランより遙かに若いだろう少年がいた

(いったい、いつからそこに?)

その少年は綺麗な顔立ちで  
髪の色はこげ茶色だった。

この少年もまた女性にもてそうな  
感じだが一つだけただけなところがあった。

それは無表情なところだ

そんな少年を凜は複雑な表情で見つめた。

「…申し訳ありませんでした」

そういい少年も部屋を出て行った。

---

キイーパタン、

「いやごめんね、

あの子ちよっと変わっているんだ」

アランは苦笑した。

「いえ、彼にも何か事情があるのでしょう  
わたくしは気にしませんわッ」

そう言うとアランは少し驚いたようだが

すぐに笑った。

「ニコッ、ああそう言ってくれると助かるよ  
…さて邪魔者もいなくなったことだし  
お互い腹を割って話し会おうじゃないかッ  
親ぼくを深めるためにねッ」

ん〜と座りながら  
アルトが背伸びをする…。

そしてよしっと  
意気込みをした。

「じゃあまず、その 胡散臭い お嬢様言葉を  
禁止にしようかな ニコッ」

「…!!」

凜は驚いた 自分の口調に疑問をもたれていたことに  
確かに、凜の言葉使いはお世辞にもうまいとは言えない  
だが、余程注意して聞いていなければ分からないはずだ

(…フッ チャラいくせにッ  
するどいなッ)

「フッ わかった でも…。こっちからも



お願いさせてもらっね」

「その 胡散臭い 笑顔消してもらおうかな、  
見てるとイライラする」

凜はそう仕返しとばかりに  
黒い笑みで言っつてのけた。

アランのニコニコしていた表情は  
一瞬固まったがすぐに笑い出した。

今度は口をあけて…、

「あはははッ

いやあ〜君にはこの笑顔が効かないのか  
驚いたなあ…しかも僕にその態度  
本当に面白い。」

「私はそこらへんのただのお嬢様とは  
違っんでね、」

「うん、そのようだねッ僕は基本  
名前を呼ばないんだけど、君の名前は  
呼ばせて貰っよ…凜ちゃんッ」

アランは色っぽく

凜の名前をささやいた。

まるで恋人に言うかの様に

「…ッ／＼／」

凜の顔は赤くなる

(…ドキッ　うわぁ女慣れしすぎでしょ  
不覚にもドツキってしちゃったよっ)

「クスッその反応、男を知らないんだね」

「／＼／うっうるさい」

凜は凶星だったため

さらに顔が赤くなってしまった。

その反応を見てなんだか機嫌がよくなる  
アラン…。

「また赤くなつた 本当に可愛いなあ  
…ねえ？ 僕のお嫁さんにならない？  
僕は今まで結婚なんて興味なかったけど  
凜ちゃんとならいいなあって思うんだ」

アランは凜に熱い視線を向けながら  
凜の方へと歩み寄る…。

(ノノノこいつマジ頭やばいッ  
ってかこっち来るなあ！！！)

「アラン冗談きついよッ？」

凜は近づいてくる  
アランに逃げ腰になる。

凜は楽勝でアランをいじめられる気で  
いたのだが予想が外れてしまった。

「ああ 僕の名を呼ぶ声いいねえ  
ゾクゾクする」

そして止まりそうにないアランに  
ついに凧は逃げ出した。…が、足が動かない

(えッ何で?)

凧は足元を見た…すると

凧の足には小さな風の渦が巻きついていたので

「わッ何コレッ!…ッ取れない  
ん…ックソッ!」

確実に近づいてくるアラン  
そしてついにッ

—————  
ギョッ

「フフッ 捕まえた」

耳元にかかる吐息。

「…ゾクッ!」

背中に感じる熱…。

「凧、君が欲しい」

「／／／あッ、」

真っ赤になっていた凜だが  
ついに我慢の限界に…。

「ん〜！放せつ変態！！」

—————  
ガッ！！

「…痛っ」

凜は自分を後抱きしめていた  
アランに肘鉄を食らわせた。

そして束縛が取れる…。

「はぁ、はぁ、ふざけんな

こっちはお前に抱かれて喜ぶような  
軽い女じゃないんだよ！！」

「今回の事件のことはちゃんと解決してやる  
だから今後私に近づくなッ！！」

分かったなっ！！

と最後に凜が叫ぶ

バンッ！

そして扉を閉める

大きな音とともに

凜は部屋を出て行った。

部屋に残されたはアランは  
小娘に殴られたのに上機嫌で

笑っていたらしい。

悪戯心（後書き）

やっと恋愛らしくなってきたので  
書いていて楽しいですッ

夜の街で（前書き）

20日まで予定があり更新が遅くなっていますが  
どうか暖かい目で見守ってくださいっ



## 夜の街で

\*\*\*

闇に包まれたシルフッドの街を  
一人の女性が走り回っていた…。

うゝ ちらツ ― 待て!!

皆の物ツ逃がすんじゃないぞ!!

(はぁ、はぁ、クソツ!しくじったかツ!!)

女はドレスの両端を手で掴み、必死に逃げていた  
だが、その姿はどこかぎこちない…。

暗闇の中、はぁはぁと言う荒い息遣いと  
足音が街に響きわたっていた。

(ツ…、そもそも この任務は俺の役目じゃないだろう  
何を考えているんだ兄上はツ!!)

女は不満と苛立ちを感じながら  
走り続けた…。

---

王室というのに相応しいキラびやかな部屋に

誰もが引き受けられるだろう美しい男と

騎士の服装をまとっている  
勇ましく 優しい雰囲気を漂わしている男がいた。

美しい男は書斎机で書類に目を通している。

それを騎士は少し不機嫌そうな表情で  
見ていた…。

「…陛下、今日は何の用でしょうか？」

「、何だその不貞腐れた態度は、  
…そんなに私と会うのが嫌なのか？」

陛下は机に頬杖をしながら苦笑いをした。

「いえ、私は陛下と会うのが嫌なのではなく  
陛下が持つてくる縁談が嫌なのですよッ」

「フツ、…お前 私が何の用事で読んだか  
分かっていたのに、 今日は何の用事でしょうか？  
って聞いたんだなッ」

「あれは私の そうでなければいいな、 っという  
希望を含めて言っただけです…。」

「はあく、お前は本当に昔から往生際が悪いなッ  
お前も一応王家の一族なんだから  
結婚して世継ぎを残すのは分かっていることだろう?」

「それともなんだ、お前は男が好きとか  
そういう部類の奴らの一人なのか?」

その言葉を聞いた騎士は余程  
気に食わなかったのか大きな声を出した、

「ッそんな訳ないだろう!!俺はあの媚びてくる女性が苦手なんだ  
人のことを何も知らないくせに::慕っていますなんて言われても  
嬉しくないだろう::。俺は兄さんとは違って女性は慎重に選ぶタイ  
プなんだッ!」

陛下（兄さん）は不適な笑みを漏らす::。

「::エルは私をそんな風に思っていたのかい?  
それは侵害だなあ、私だってハーレムの相手は  
ちゃんと考えて選んでいるんだよ?」

まあその選ぶ基準は ひ・み・つ だけどねッ  
と陛下はクスリと笑った。

騎士<sup>エルス</sup>は頭を手で押さえ

呆れた表情をする。

「…兄上、俺は王になる気はない。

次の陛下は兄上が早く世継ぎを作りその方にさせてください  
俺は今の騎士の仕事のほうがあっているんだ」

「だから…、この縁談の話はもう終わりです。

俺はこれから用があるので失礼させていただきます」

エルスは部屋を出て行くこととする…。

「おっおい待てッ！…確かにその話のために呼んだが  
今日は別件もあるんだよっ」

帰っていいこととする

エルスを陛下は急いで止めた、

「…別件？」

エルスは難しい表情をする。

「ああ、これは騎士の仕事だな」

「…最近リーフレアのグレイス家に当主が戻ったらしい」

陛下は腕組みをしながら  
話す。

「…それは本当ですか？、

確かグレイス家の当主は7年前に死んで

それ以来落ちぶれたと聞いたことがありますが。」

しかもあそこは特別でグレイス家の証がなければ

当主になれないと色々面倒だったはずですよね？つと

エルスは頭を傾げる…。

「ああ、だからエル、お前に確かめに行って欲しいんだ。」

グレイス家は王家に使える大きな貴族の一つ

どんな奴が当主が知る必要があるのだ

「…はい、分かりました」

「それともう一つ

最近シルフッドで不穏な動きがあるらしい」

「不穏な動き？」

「（悪魔の悪戯）と呼ばれる病がはやってきているみたいだ。

それは植物の毒が原因らしいんだが、

普通あの変の土地では育たないらしい」

陛下の表情はかたい…。

「…誰かが、手引きしたということですか？」

「…分からない、だからお前が調査に行ってくれ」

「はい」

「シルフットは今やはり病で民達の気は苛立っている  
だから十分に気をつけるようにッ  
…ああ、そういえばいいものがある  
それをお前にやろう、きつとお前の旅に役立つだろう」

そう陛下は不適な笑みを見せた

「…ありがとうございます  
では早速準備に取り掛かろうと思います。  
失礼しますッ」

---

（はあ、はあはあ…、兄上の良い物は  
ろくなものではないなッ）

（何で俺が女装なんかッ…、  
騎士の団員の中に適役がいただろうに…）

女はそう思いながら捕まらないように  
必死に走っていたが…非常事態が起きた。



(…嘘だろ、…道がないッ!…)

色々小路地を走ってきたがついに  
袋小路にはまってしまったのだ

後ろからは男達が向かってくる  
足音が聞こえる

(…しかたない、)

女は懐から短剣を取り出した

(隙を作って逃げるしかないなッ)

女は短を持ち構える

そしてもうすぐで男達が来るッ!!  
というところで…騒ぎが起こった。

— うわぁッ

— 何だこの白い化け物はッ!…!

(白い化け物？　いったい何が起きているんだ？)

女は息をととの得ながら

新たに来るだろう者に備え気を引きしめた…。

## 美しい淑女

「はあくあ、 疲れたあ」

凜はアランの部屋を騒々しく出た後  
お行儀が悪いとレインに説教をされたのだった。

「、あれは / / / アランが悪いと思うッ!!」

凜は用意された寝室のベッドで一人  
わっつとか言いながら悶える

「ッ、明日からは絶対アランに近づかないようにしなきゃッ  
… それにしても女好きだとは思っていたけど  
あれは酷すぎる、日本のナンパ男なんて比べ物に  
ならないじゃないかッ」

いきなり求婚だなんてぶっ飛びすぎだろッ  
と凜は頭を抱えた…。

---

今の時刻は夜中…、凜は先ほどの出来事が忘れられず、寝付けないのだ。

「あーあ、面倒なことになったなあ」

凜は少し落ち着きを取り戻し  
ベットに背を沈め  
豪華な天井を見つめていた…。

そんなとき寝室の窓から

---

コンコンッ・コン・コン…。

というノックするような音が部屋に響いた

ここは4階、普通人が上ってくるのは

考えにくい場所だ。

「ここめっちゃ高いところにある部屋なんだけど…」

凜は顔を強張らせながら  
鳴り止まない窓に近づいた…。

凜は恐る恐る  
ノックの相手を覗き込んだ

「!!、…はああッなんでもうっ驚かさないでよ!」

凜はノックしていた相手を知り  
一気に緊張の糸が途切れた。

その相手とは…、

---

ワサワサッ…ワサッササ

蔦植物だッ

「はい、何でしょうか蔦さん？」

凜は植物に耳を肩向ける

(…女・の子が…襲われてるッ…助けてッ)

(街の小路地で…早く…早く…ッ)

「ええッ！ それやばいじゃん  
分かったちよつとまって」

凜は蔦が来た理由を知り慌てた  
今はランジェリーを着ている状態

服はいつもレインが朝持つてくる  
…だから服はコレしかない

凜は焦り、部屋にあるクローゼットを開けた

「ん〜なんかいいのないかなあ」

凜は凄い勢いで服を探す…。

そして…。

「…、…、なんでこんなものがッ  
ええいッ迷ってる場合かッ!」

凜は意を決してその服を…着た。

「…凄く動きにくい  
てか私のほうが怖いかもッ」

凜は鏡を見ながら苦笑する

…鏡には一人のオペラ座の怪人が。

「まあ顔を見えないしいいかッ」

凜はマントをバサツと鳴らせ  
蔦の待っている窓へ…。

「準備できたよ、レイン達に見つかると面倒だから  
地面まで下ろしてくれるかな？」

凜がそう言うと

蔦はコクンとうなずき 凜を抱き上げた

そしてゆっくりと地面に下ろした。

「…ありがとッ よしっじゃあいくかッ」

凜は屋敷の裏にある馬小屋へと足を進めた



馬小屋にはたくさん馬達が  
背筋をピシッと伸ばし高貴な雰囲気  
を漂わせている。

凜は自分の屋敷の馬に近づくと……。

(…ん？この匂い、凜様ですか？)

凜の匂いに気がついた馬が話しかける

「うん、こんな格好でも

気づいてくれて嬉しいよ ライト」

凜はライトという名の馬に近づき  
自分の額とライトの額をくっつけた。

(凜様は相変わらずお転婆さんですね？  
こんな夜中に危ないじゃないですか)

ライトという馬はしっかりした性格で  
正直レインとかぶる。

「私だってこんな夜に外に出るなんて思わなかったよ、

ただ、急用でね。悪いんだけどライト 力を貸してくれない?」

凜はそういいながら

ライトの体を優しく撫でた。

(はあ、凜様をこんな夜にお一人にするのも不安ですのでいいですよ)

「わあありがとう、あッでもライト、この街の地図分かる?」

そう聞くとライトは当たり前だといわんばかりに尻尾をフサッと振り下ろした。

「フフッそれは良かった、じゃあ早速背中に乗せてね?」

凜は お嬢様には似つかない掛け声で

軽々と馬の背に跨った…。

(…で?どちらに行けばよろしいでしょう?か?)

「ん〜なんか小路地のところで

女の子が襲われてるみたいなんだけど…。」

（それは大変ですね、ですが、）

（小路地ですか…漠然としてますね、っでも、まああそこでしょうかね、

凜様落ちないようにしっかりとつかまっけていてくださいね）

「うんッ！大丈夫だよ」

ライトはそういうと夜の街へと走り出した…。

---

ヒツメが街のタイルを蹴る音が辺りに響く…。

凜はライにしっかりと捕まりながらピューッと指笛を吹いた。

…新たな助っ人を呼ぶために。

そしてあまり時間もたたないうちに助っ人は凜たちの前に姿を現した。

(何だ主、呼んだか?)

その助っ人というのは 白い狼、ハクだ。

ハクはライトと並んで走る…。

「うん、悪いんだけど女の子探してるんだ  
ハクも探してくれない?」

(ああいいが、…その女って言うのは  
あれじゃないか?)

つとハクはずっと先の前方に目を向けた

「え?」

凜は動物の様に目はよくない  
むしろ暗闇でいつもの倍見えなくなっている  
今はかろうじて、街の明かりで  
辺りが見えるって感じだ。

そして凜は暫くハクの向いた方向に

視線を向けていた…。

そして男達に追われる女の子の姿が確認できた。

「…!!っ、あれに間違いない  
ハク先に行つて助けてあげてッ！」

(…わかった、)

そういいハクは女の子の方に  
颯爽と駆けていった。

「じゃあ 私達も後追つよ!!」

ライト お願いッ」

(はい、分かりました)

凜は急いで  
女の子を追った…。

## 秘密の夜

ハクが先に行った後、すぐに  
男共の叫び声が路地に響きわたった。

「うわゝあ、酷い叫び声ッ  
ハク何したんだろう?」

凜は男共の叫び声を聞いて  
顔を引きつらせた…。

(さあ?でも殺しはしないでしょうね、  
…凜様、ハクが行った道はいずれ  
行き止まりになるでしょう。)

(逃げていた女性もそこで  
足止めされていると思います。  
私どもはその道の反対側から助けに行きましょう)

「反対側？」

（はい、ちょうど女性が背にしているとと思われる壁側ですね、高い壁ですが私の上で立てば上れると思いますよ）

「わかった。じゃあ そうしよう」

凜の許可が出ると  
ライトは軽やかに走り出した…。

そして、時間もかからないうちに  
問題の壁にたどり着いた。

---

この壁の向こう側にいるわけかあ  
と凜は壁を見上げた…。

凜はゆっくりと  
馬の上に立つ…。

これは信頼している馬でないと  
出来ないことだ。

(凜様、気をつけてください)

「分かってる…よ」と

凜はぐいっと  
壁の上へのぼった、

---

下を見ると  
美女が一人。

…上目遣いでめちゃくちゃ  
可愛い…が、ナイフを向けられた。



……。

そりゃ、こんな怪しい格好してれば  
向けられるわなあ…、と

凜はナイフを見てしみじみ思った。

「ちょっと事情があつてこんな格好になつてるけど  
怪しい奴じゃないんだ、…いや、怪しいけど  
んゝツまあ君に危害を加えるつもりはないツ」

凜は怪しい仮面の中から

真っ直ぐとした視線を美女に送つた…。

「簡単に言うと、君を助けにきた…信じてくれるかい？」

美女と視線が交わる…。

そして、美女は口を開いた。

「…信じます、」

男にも、女の声にも聞き取れる  
中性的な声だった。

凜はその言葉を聞いて  
ほっとした。

「ニコ、よかった・・・。  
では、お手をどうぞお嬢様ッ」

凜はどちらかというと女にモテルタイプの人種だ。

凜がそういうとなぜか美女は顔をしかめた。

凜はその表情が気になったが、  
時間がないためかまわなかった…。

「…気をつけて、」

凜は美女の手を取り  
壁の上に引き上げた…。

美女は、以外にも壁に足をかけ  
軽々とのぼった。

もしかしたら

私と同じやんちゃな子なのかもなあ  
と凜は思った。

――

「下にある馬、見える？」

あそこにゆっくり足を下ろすんだ、

美女はえっ？というかの様に  
顔を上げた。

「大丈夫、あの馬は大人しいよ  
…出来そう？」

美女は改めて下にいる馬を見た  
そして…静かにうなずいた。

「よしッ、じゃあ気おつけて  
ゆっくり降りるんだよ？」

そういうと美女は  
言われたとおりゆっくりと馬の  
上に立ち、のる事ができた。

「…次は私だね、ちょっと下がっててね」

凜はそういうと  
軽やかに馬の上に降りた。

そしてた手綱を握る、

「しっかりと私の腰につかまってね？」

凜が言うと

美女はおずおずと腰に腕をまわした。

すると驚いたように声を上げた。

「……ッ、貴女は女性ですか!？」

いきなりのごとで凜も凄く驚いた。

「うっうん…そうだよ？」

すると美女は勢い良く頭を下げた

「！！！！！！」

「すみませんでしたッ！！」

「えッ、そんな気にしないで

私が男っばい事してるのが悪いんだからッ」

ねッ？と慰めるが

美女は頭をなかなか上げない…。

「いえ、それもありますか、

…私、男なんですッ」

凜は固まる。

美女が…男？

…、

「えッ！男！！」

「はいつ、すみません  
女性に助けていただくなんて…  
もう、なんて言ったらいいかッ」

「いやッ…別に気にしないでッ  
たぶん男でも助けてたから」

凜はあまりに頭を下げる

美女…いや、イケメンに苦笑する

「まず、こんな危ないところにいるても仕方ないから  
どこか遠くまで行きましょう。」

凜はすっかりつかまっててと云う…が。

「いいえッ私が前に行きます  
女性の後ろに乗るなんて…出来ませんッ」

男はそういつて

凜と場所を変わるうとするが、

「…はいッしゅっぱーッ…！」

凜は無視して馬を  
走らせた…。

## 出会い

凜が無理やり馬を走らせ、  
だいぶ路地から離れたあと  
凜は川沿いに馬を止めた。

そして凜は静かに後ろを向き  
いたずらっ子のような笑顔を男に向けた。

「…さて、お嬢様 ドロに送ればよろしいでしょうか ニッコ」

それを聞いた男は顔が引きつる…。

「はあ。もうそのことは触れないでください  
私もこの格好には不満があるんです」

それを聞いて凜はさらに  
クスクスと笑った…。



「えっそうなの？てつきり  
女装が趣味なのかと…、」

「そんなことは決してありませんッ」

凜が言い切る前に男は訂正を入れた

よっぽつどこの格好が気に食わないのだろう。

「フフっ、わかってるよ  
ちよつとからかっただけ」

「見たところ、兵士とかその辺の方でしょう？  
しかも位が高い方かな？」

凜はさっきの馬の乗り方や  
路地に追い込まれたときの戦う人の目を見て  
そう確信していた。

また話し方や身のこなし方から見て  
兵士のランクも上ではないかと考えた。

それを聞いて男は驚いたかの様に  
目を大きく開いた…。

「ッ…、」

そして暫くの沈黙の後

バツの悪そうな顔をして男は口を開いた。

「はあ…、そこまで分かっていたとは、」

「私の名はラディ・エルス  
事情により、ラディは偽名です。」

男はラディは偽名と  
正直に話した…。

「フっ、偽名だと言わなければバレないのに  
正直者なんだね、エルスさんは」

「そんなことないですよ、ただ貴女には  
嘘をつきたくなかったです」

とエルスは微笑んだ。

「もしよければ、貴女の

名前も教えていただけますか？クスッ、あとお顔も」

その質問に凜は戸惑った。

凜は貴族の中でも上のランクでそう

やすやすと自分の名前を教えることができないのだ。

教えれば危険が増える。

出来れば、顔も見せたくないが、

相手に失礼に当たると考え顔だけは見せる

ことにした。

凜は暫く考え口を開き、仮面をとった。

---

パサリ、…仮面が外れた。

「…凜、とだけ教えておく

私も事情があつて苗字は教えられないの」

「…凜、ですかいい名前ですね

ああ、仮面を取ると完全に女性に見えますねッ」

そうニコやかにエルスは言った

そして凜もそれに答えるように笑顔で返した

「…ニコツありがとう」

だが、内心はありがとう などとは  
あまり考えていなく

違う暗い記憶が頭をよぎっていた

名前は必ず親の愛情が入っているという、

…しかし、凜にはその意味がうまく理解できないのだ

私はいったいいつから  
愛情という者がわからなくなってしまったのだろうか。

こう言う考えが凜の頭の中でぐるぐると  
駆けめぐっていた…。

自然と凜の表情は硬くなった。  
それを見てエルスは心配そうに見つめる。

「凜さんどうかしましたか？」

「えっ？」

凜はいきなり声をかけられて  
うまく反応ができなかった。

「…何か辛そうな表情をされていたので  
何かあったのかと、」

以外に鋭い指摘に驚きながらも  
凜はすぐに冷静を取り戻し  
自分を繕った。

「…ああ、きつと眠いからかな」

言い訳に行った言葉だったが、  
確かに夜は刻々と過ぎていく。

早く帰らないと

レイン達に迷惑をかけてしまうことに  
凜は気がついた…。

「眠いから、ああこれは…引き止めてしまっすすみませんでした。」

エルスもそのことに気がついたのか  
凜にあわてて誤った。

「いえ、私が勝手にしたことですから気にしないで  
下さい、…だけど、さすがに帰らせてもらおうかなあ  
家には厳しい人がいるので、」

凜は苦笑しながら話した。

「クスツ…そうですか、」

それを見たエルスも

彼女の少し困っているような嬉しそうな表情を見てわらった。

「あつ、そうだ エルスさんも馬を

つれて来ているんでしょう？

「そこまで送りましょうか。」

「はい、馬はこの町の入り口のところで待たせてあります

ですが、そこまで凜さんのご好意に甘えるわけにはいかないのでいいです、凜さんも急いでいることですし…。」

エルスは丁寧に断ろうとした。

「いや、私には乗せてくれる動物が二匹いるので大丈夫っ

この馬だっって一人で家に帰ってこれるし

「乗り捨てても問題ないよ」

ね」と凜はライトの首筋をやさしくなでた。

そしてライトもそれに答えるかのように

凜の手に首をこすりつけた。

「だからどつぞ、気にしないで乗って?」

そういつて凧は馬から下りた。

---

スタッ

「ライト、この人諦めが悪いから先に走り出しちゃって、私が見えなくなるくらい」

凧はそう言い放つと軽くライトの首を合図するように叩いた。

---

パンッ

「ちょっと、待って…うわぁッ…っ止まれ!」  
「ッ何で手綱引いても言っこと聞かないんだこの馬はッ!」



それと同時に

エルスの動揺の声が上がったが  
凜は気にしなかった…。

そして凜は、エルスの後姿を見送ったあと  
すぐにハクを呼んで

アランのいる屋敷へと戻っていった。

## 叫び

ハクに乗せてもらった後  
凧は無事レインに怒られることなく  
屋敷へと入ることが出来た。

\*\*\*

「ふあああああ〜あっ…と。」

朝の清々しい陽気の中  
なんとも情けない声が響く…。

「凧様！！お行儀が悪いですよッ  
それでもレディーですかッ！」

凧たちは今、悪魔の悪戯 を解消するべく  
馬車で森へ向かっている。

「んッー、だってあまり眠れなかったんだからしょうがないじゃんッ」

凜はレインの説教をあまり気にもせず待ったりとあくびで大きく広がった口に手をあて最後に（むふうッ）と息を吐くのであった。

「眠くても、レディーは我慢しおしとやかにしているものですよ、はあく、今アラン様がないのが救いですね。こんな姿他人には見せられません!!」

そう、いま森に向かっているのはグレイス家のものだけなのだ

凜の植物を従わせる力はあまり人には見せてはいけないものだから

…屋敷を出るときアランを凜から放すのに手間取ったことはいうまでもない。

「ん、レインの言うとおり！  
ここには身内しかいないんだから  
私は自由にしたっていいんだよッ」

そついい凜は馬車の窓枠にひじをかけ  
外の風景を暇そつに眺めた……。

それを見たレインはもう  
説教をすることが疲れたのか  
何も言わなくなった……。

…そして暫く凜は代わり映えのない  
森の風景に目を配ばっていると

いきなり馬車が止まった。

車内で凜とレインはどうしたのか、と  
お互い首を捻らせた。

そつしてるうちに  
馬車の扉が開いた…。

「おいッここから先は馬車では行けねー  
道がねーんだっ」

アルトはだるそうに  
そういった。

凜はその道のない様子を確かめるため  
馬車から降りた…。

「うわぁ…、コレは無理だねえ」

凜が見た道は木々で狭くなっており  
馬車ではとてもじゃないが、いけそうになかった。

「仕方ないですね、馬車の馬を放し  
一対一で馬に乗りますしょう。凜様は  
申し訳ないのですがハク様の背中へ、お願いします」

「ん、わかった。ハク、お願いね？」

凜がそういい  
軽やかにハクの背中かへ飛び乗った。

「ん〜ハクの背中が馬と違って  
モフモフで気持ちいいえ」

(…そうか、我も主の温もりが気持ちいぞ)

そう嬉しそうに

ハクは尻尾で凜の背中を撫でた。

「／／／いやあ〜ツ、なんか照れる。」

赤くなった頬を手で隠し  
悶えた…。

そう二人で騒いでいると  
呆れたようにアルトが声を上げた。

凜は動物と会話して楽しんでいるようだが  
周りから見たら、動物に一人で放しかけ、笑い、悶える  
変人にしかみえないのだ。

「おい凜ッ、変人にしか見えないから止める。  
…、コッチの準備はもう出来たから

出発する。気をつけて俺の後についてこいよ。」

「…わかった。気をつける、けどその呆れた目で私を見るな、傷つくだろ！」

凜はそういいながらアルトの馬の後ろに着いていった。

---

暫く走ると

明らかに森に異変があった。

目的地に近づけば近づくほど  
周りの木々が変色し  
かれているのだ。

これは私達にも影響があるんじゃないかと  
凜は考え、3人に結界を張った。

「ハク大丈夫？」

( ああ、森の死んだ匂いは気になるが  
害になるものは、今のところない )

「 …… 森の死んだ匂い、ねえ 」

凜はそれを聞いて心が痛んだ、  
この森を救うことは出来ないのだろうか…と。

そう考えているうちに  
先頭を走っていたアルトが足を止めた。

「 …… ここが、目的地のようだ 」

アルトにそういわれ  
凜は辺りを見渡した。

「 …… 何コレ、 」

その目的地の光景は  
悲惨なものだった。

植物達が魔法の呪縛にかかり



苦しみ嘆いているのだ…。

(…ああ、苦しい、苦しい苦しい…！)

(誰か、誰か、助けてくれ…！)

(アア、アア…)

凜は植物達の伝えてくる念に  
頭が痛くなった。

「…ッ、クソ！」

「凜様!？」

「…大丈夫、レイン達は  
ここから動かないで、結界をこの場所に固定し  
強度を高めるから」

凜はそう言うと  
高度な魔法を使うため  
目を閉じ、集中した。

「…悪を払う光よ、我の名の下に力を差し出せ」

パアアッ

大量の光とともに  
レイン達の周りに強力な結界が張られた。

そして凜は静かにハクの背から下りた。

「こつから先は私しか、耐えられない世界みたい  
だからレイン達はここで大人しくしててね」

「おっおい凜、それどういうことだよ！」

「この結界の外は悪の力が強く  
魔力の弱いものは飲み込まれてしまっんだ、」

「…それは、私の力でも駄目、と言うことですか？」

確かにレインの魔力も強く  
この悪の力でも絶えられるかもしれない  
…でも、大切な人達に危ない橋を渡らせるつもりは  
凜にはないのだ。

「うん、…だからここで待ってて」

そう言うとレインとアルトは

眉間にしわを寄せた…、

何も出来ない自分を責めるように。

「…私には帰る場所が必要なの、

その暖かい場所を壊さないでね？」  
「コッ」

凜はそう言うと

光の結界の外へと歩いて行った…。

## 約束

……。

ガサツ、ガサ…ガササツ。

凜は一面草の枯れた茶色い世界を歩く、

茶色だけの世界

命の無い世界…

凜の心まで荒んで行きそつだ。

凜は川沿いを歩く…、

周りにはガーラと思われる植物が

生息している。

川辺に生えているって言うのに

葉はしおれ、元気が無いのだ。

凜は怒りで、声が震えた…。

「…一体誰がこんなことを、  
酷すぎるッ」

凜はガーラが生息している中心へと移動すると  
呪縛を取るため魔方陣を描いた。

それは複雑で大きなものだった。  
凜は呪縛の開放だけでなく、浄化する魔法も  
魔方陣に織り込んだからだ。

そして最後に、…自分の手のひらに短剣で傷をつけた。

「…ッ！」

「この地の悪よ、森は我の管理下…すぐに消え去れ…！」

この言葉とともに  
凜の手から血がポタポタ…、と魔方陣の上に流れた。

フアアアア…。

大量の光があふれるとともに

凜は自分の中の魔力が減っていくのを感じた。

呪縛を取るのとは分かるが、そもそも  
死んだ森を蘇らせるのは、ただ事じゃない

もう、神の領域なのだ。

そして魔方陣は薄くなり  
光とともに消えていった。

凜はガクリと膝を地面に着いた。

「ハア、ハア…ハア。流石にきつい・わ」

凜の周りには、元の森とは行かないが  
若々しい木々が生えていた。

倒れた木から新しい芽や

地面には短い草が生えていた。

凜は、ゴロンと地面に寝転んだ

あんなに重々しい雰囲気を漂わせていた  
世界だったのに、空は何事も無く青く晴天だった。

「ハハツ、私がこんなに疲れてやった大仕事だけど  
世界と言う大きなものから見れば  
小さな出来事だったんだらうなあ」

凜は空を見ながら、自分の過去を重ねて見ていた。

私が元の世界で消えたことになっても  
それは世界に何の影響も無い

…私を本当にかげがいの無い存在だと  
思ってくれていた人には別だらうけど。

生憎私にはいない。

コレが喜ばしいことなのか、悲しいことなのか。

凜はそう考えていると

遠くからレイン達の慌てた声が聞こえてきた。

「凜様くっツ!!」

「りーんツ!!」

あまりの必死さが伝わる声に  
凜はクスリと笑った。

「だいじょーぶツ、生きてるよぉ!!」

凜はのん気に手を振る…。

「…ツ、はぁ、はぁ、凜様っ何をのん気そうにツ!!」

「…はぁッ、…誰が、こんな派手にヤレツて言ったッ？  
お前は馬鹿かツ!!」



二人の顔は呆れているような、怒っているような  
そんな表情だった。

凜はその二人を見て困ったように  
目線をずらす…。

「いやあっ…ついでにやれる事はしちゃおうかと…、」

「ついでに!?!、コレがついでのレベルですか!!  
死んだ森を生き返らせるなんて神の領域ですよッ」

「そうだッ、普通の人がやったら  
魔力が無くなり死ぬ可能性があるんだぞ!!」

「…私ならなんか、出来そうな気がしたもので…」

凜は言い訳をするが

二人はさらに鬼のような顔になるので  
凜は冷や汗をかきながら

誤ることにした。

「いやッ、ちよっとした出来心だったんです

以後、気をつけますので…許してください!」

凜は寝転がっていた体を起こし  
頭を下げた。

すると怒りっぱなしの二人が黙った…。

凜は不思議に思い地面を見ていた視線を  
恐る恐る二人に向けた…。

「…はあ、俺達がどれほど心配したと思ってるんだッ  
お前は、俺達が命を差し出しても守りたいと思う存在…。」

「なのに、お前は俺達を連れて行くこともせず  
一人で突っ走る…胸が焼ける思いだったわ、」

さっきとは全然違う  
悲しそうな表情に凜はうるたえた。

「ッ…」  
「…」

「凜様、私達は初めに言いましたよね？」

…私達に甘えてくださいと、」

「私達はつらそうな貴女を見るのが一番、辛いのです  
だからもう、このような…一人前を歩くのは止めてください」

「…約束できますか？」

凜は今まで向けられたことのない感情に戸惑った。  
今まで本気で、自分のことを心配してくれる人など  
周りにいなかったからだ。

…凜はこのとき初めて気がついた。  
もう私一人の命じゃないのだと。

前は自分が死んだって、気にする人はいない、  
死んでも大丈夫だろうと頭の片隅にいつもあった、

だけど、凜には出来てしまった。

凜が死ぬことによって人生に影響が出てしまう人達が…。

【私もついに、勝手に死ねない人間になったんだなあ】

凜は胸に湧き上がるような熱い感覚に  
泣きそうになった…。

「…レイン、アルト、私は死なないッ  
約束するよ。」

凜は素晴らしい笑顔を見せた。

## 樹の長

説教も終わり、ひと段落したところ…異変が起きた。

ガーラの森の方から異様な魔力が漂い始めたのだ。  
それに気づいた アルトとレインは凜を背中に隠した。

「…凜様お下がりくださいッ」

そうしているうちにも  
魔力はどんどん強くなる…。

目を凝らして森の奥を見ていると  
…どうやら何者かがこちらに向かってきているようだった。

…緊迫した空気が流れる。

---

ガサツ…ガササ。

暗い影が光を浴び  
姿を現した。

「「「?!」」」

凜たちはその何者かを見て  
驚愕した。

「…、アハハツそんなに警戒しないでよ  
僕 危害を加えるつもりは無いんだからさッ」

なんと異様な魔力を漂わせてきた  
者の正体は…少年だった。

…歳は12、というところだろうか。

いかにも怪しそうな少年にアルトは

低い声を出す。

「お前は、何者だッ」

そう聞かれた少年は鼻で笑った。

「フツ、下等な君に教える気は無いね、  
僕は対等な者としか話したくない主義なんだ。」

アルトは凄い形相となり  
口元が引きつった…。

「ほづ、いい度胸じゃねーかこのクソがガキッ!」

今にも殴りかかりそうな  
アルトをレインが止める。

「止めなさいアルト、相手の挑発に乗ってはいけません」

凜はずいぶんプライドが高い少年だなあ、  
貴族の子供なのだろうか？と首をかしげ、顎を触った。

「…では、グレイス家当主のわたくしには  
彼方と話す、身分はあるかしら？」

凜は少年に少し不気味な笑みを漏らしながら話した。

すると少年は、しな定めをするかの用に  
凜の体を上へ下へと視線を変えた。

「ふん、グレイス家の先祖帰りか…んー  
まだ未熟のようだけど…  
いいよっ 君とはちゃんと話してあげる。」

そう、少年は偉そうに話した。

「では早速、…彼方はどなたなのでしょう？」

「ああ、僕の名は森の長、リーフだ。

この姿は仮で、本当は何百年と生きる巨木だ」

平然と話リーフに



凜は絶句した…。

「…何百年と生きる…巨木、」

「そう、僕は君達より何百年も先輩なわけ  
そしてこの辺の木々は僕がおさめている」

凜はそれを聞いてハツとした。

この少年が出てきたのはさっきの騒動のことだろうと…。

「…今回の騒動、おそらく人間の仕業と考えております  
グレイス家植物を守る者として、対処が遅くなり  
申し訳ありませんでした。」

人間と植物の間の関係を守るグレイ家には  
今回の騒動の責任を取ることになるだろう。

凜はリーフに深々と頭を下げた。

その様子を見たリーフは  
暫く黙り込み、…そして口を開いた。

「今回の騒動は確かに対処が遅かったことは事実だね」

「…すみませんでした。」

「…だけど、初めてにしてはいいんじゃないかな？  
これだけの大仕事を完璧に片付け、さらに失った命も  
蘇らせた…森の連中からは君の評価は高いよ。」

凜は褒められたけど

それを素直に喜んでいいか分からなかった。

結局植物達を苦しめたのには変わらないから。

「…。」

「僕は何百年という時間をグレイス家と共に歩いてきた  
その中で君は、一番初代に近い、魔力、心意気を持っている  
だから自信をもって、…期待してるよ 凜。」

「…はい、ありがとうございます。」

今後とも私の力及ぶ限り努力させていただきます、」

凜は未熟な自分に期待して貰ったことに  
深々と頭を下げ、お礼を言った。

その様子を微笑みながら見ていたリーフは  
さっきまで苦しんでいたガーラに目を向けた…。

「さてと、ガーラも動くことが出来るようになったし  
僕は、ガーラを連れて元住んでいたところに帰るとするよ」

そっぴいリーフは

ガーラの木のほうに歩き出した。

しかしそれを凜が呼び止める。

「あッ！ ちょっとお持ち下さい！！！」

「ん、なんだい？」

「わたくし、ガーラの皆さんに  
謝罪してないです。どうか時間をください！！！」

それを聞いたリーフは驚いたかのように  
目を大きく開いた…。

そしてすぐに、微笑んだ

「まったく、君は律儀だね。」

前のグレイス家の当主はそんなに腰低くなかったよ、  
当主は堂々としてるぐらいがちょうどいいのだけど…まあ  
これも悪くないかあ…」

「時間は好きなだけ上げようさあ、いくがよい。」

許可を出されたりんはお礼をいい  
ガラの木々の元へと足を急がせた。

そして…、

「ガラの皆さん今回は  
わたくしの管理不足、誠に申し訳ありませんでした!!  
今後このようなことにならないよう、力を尽くしますので  
わたくしにもう一度チャンスをください!!」

凜はみんなに聞こえるように大きな声で  
また、深々と頭を下げた…。

「あッあ!! 当主様 お止めください!!」

「当主様ツ 頭を上げてください!! あんたは何も悪くねーん  
だ!!」

「当主様は私達を呪縛から解放し、今まで以上に私達に力を与えて

くださつた！

「こんな優しい当主様他にいませんわッ！！」

凜はあんな苦しい思いをさせてしまったのだから

怒られ、憎まれると思っていた…が、予想外のみんなの  
反応に驚いた…。

（当主様止めないで下さい！！私達には貴女が必要なんです！！）

（今回のことは、俺達当主様に感謝してるんだっ

どうか、これからも俺達を守って欲しい。）

（必要なら、私達はいつでも当主様に協力しますわッ！！）

凜はみんなに優しい言葉をもらい

泣きたくなった。

「…皆さん、…ありがとうございます。」

未熟者ですが、グレイス家の名において一生懸命

働かせていただきます。」

そして凜は最後にまた深々と頭を下げた。

「…お話は終わったみたいだね、」

リーフが知らぬ間に凧の真横に立っていた。

「はい、お時間ありがとうございました。」

「いや、いいんだ。…あッそうだ、

君にこれを上げよう」

リーフはそういい

ポケットからなにやら光るものを取り出した。

「…腕輪だよ、…これをつけていれば

まず殺される、いや殺すことが出来ないはずだよ」

そういいながらリーフは

赤、青、緑、黄、水色、黄緑

の石がはめ込まれた腕輪を

凧の左腕にはめた。

「この腕輪は私以外 外すことが出来ない

だから腕を切り落とされることでもなければ

奪われることはないよ…。」

凧はお守りにつけて貰った

腕輪を見つめ…そしてお礼を言った。

「ありがとうございます。大切にさせていただきます」

「もし、僕に用があればその石に触れながら  
僕の名前を呼ぶといい、僕と話すことが出来るから…。  
じゃあ、僕はもういくとするよ・またね可愛い当主さん、」

そついいリーフは眩い光を放ち  
たくさんのがーラと共に一瞬で消えていった。

そして屋敷に戻るとうるさい奴が…。

「り〜〜〜ん!」

ギョッ

「ああ私のかわいい妻よ、怪我はしてないかい？」

「してないから離せ〜!! 苦しいわッ!」

---

ガッ!

凜はそういいアランの腰辺りに  
肘鉄を入れた…。だが、離れない。

「痛っ! クスツ… 私のお嫁さんは気が強い、だが  
それもそえられる」

アランはそう甘い声で凜に囁いた。

「ひいつ 変態!」

「フフ、怯える君もまた可愛い…。」

こんな調子でアランがぐいぐい口説きに来る中  
少年の高くも低くも無い声が聞こえた。

「失礼します、旦那様」

---

ドガッ!!



その声と共に  
凜の体が軽くなった。

…アランの徒者がアランを手刀で落としたのだ。

「旦那様が失礼しました。

帰りの馬車は用意できています

旦那様が目覚める前に早くお帰りください。」

「ありがとうございます、そうさせていただきますわ」

そついい凜たちは急いで馬車を端足せたのだった。

---

後にシルフッドでは、凜を癒しの女神と讃え  
られた。

樹の長（後書き）

悪魔の悪戯編、終わりました。  
次はいよいよ恋が動き出します。

## 探し人

---

ここは王宮、

「何？グレイス家の当主に会えなかった？」

「はい、メイドに聞いたところ少し遠くに仕事をしにいったとかで、留守でした。」

それを聞いて王は ふむ、とあごを撫でた。

「それは仕方ないなあ。…あ、そういえばお前悪魔の悪戯はどうなった？」

「はい、犯人はすでにシルフッドから逃げ出し行くへは分からなかったです。」

悪魔の悪戯の原因のガーラも姿を消していました。」

「ほう、犯人は逃げると思っていたが、ガーラまで姿を消したか、それは、面白いな。」

王はどこか楽しそうに話す。

「植物が勝手に動くわけではない、誰かが手引きしたのだろうな  
名乗り出れば、褒美をやるものを、謙虚な奴だ…。」

「そうですね、」

「我はそいつが見て見たくなった。…探し出せ」

「はい、了解しました。」

「で、町の被害はどうなった。  
治癒魔法が効かないのだろうか？」

「はい、それが…、グレイス家から送られた、  
植物を使った薬で町のは皆元気になったようです。」

「植物を使った薬！？、そんなもので治ったのか！」

王は聞きなれないことに凄く驚きを見せた。

「はい、シルフッドの住人は皆それを飲んだ用です。」

「…薬かあ、フツ。 그레이ス家の当主、実に興味深い。実際に我も会って見たい…おっそうだ、近々行なわれる祭りに招待状を出そう。そうすれば当主も断れなかるう」

王は不適な笑みを漏らした。

---

王への報告も終わり、  
エルスは騎士の練習場へ向かい  
訓練生の練習風景をぼーと、小屋の中から見ている。

「…あの時会った彼女は今何をしているだろうか？」

【シルフッドで会った彼女は可憐で、危なっかしいく、守ってあげ  
たくなる

そんな可愛い人だった。】

彼女のことを考えるエルスは頬が緩み  
自然と笑顔になる。

【それに、あんな変な格好していたからかも知れないが、  
俺に媚びたりしてこなかった…、そんな経験は初めてだ。】

エルスは夜会った彼女が頭から離れなくなっていた。  
エルスはため息をつく…。

「はあ、もう一度会うことは出来ないだろうか…。」

探し人（後書き）

凜ちゃん、標的になりまくってます。  
頑張れ！！

## お祭り

凜はいつもの様に書齋で

町の声を書類にまとめる仕事をしていた。

そこにはたいした悩みもなく、凜はいい事だと和んでいた。

「いや、平和ってすばらしいッ!」

んゝと背伸びをしていると  
書齋に難しい顔をしたレインが入ってきた。

「失礼します。」

「ん?どうしたのそんな難しい顔して。」

凜はその不自然な表情に疑問をもった。



「はい、実は王宮から手紙が届いたのです」

「ふうん…で？」

「お祭りの招待状です。」

それを聞いて凧は顔をしかめる。

「祭りの招待状？、えっ、祭りって自由参加じゃないの？  
そんな強制されて行くものじゃないよね。祭りって」

「はい、普通はそうなのですが、  
どうやら、陛下は凧様に会いたいみたいです。」

陛下が私に会いたい？！  
凧はそれを聞いて驚いた。

そして…ああ、そういえばと納得する

「…この世界に着てから、挨拶一度もいってなかったもんねえ」

凜は王にグレイス家の当主になりました、と言っ  
手紙を出していたが、実際に行くのは難しく  
挨拶に行っていないのだ。

「…そうですね、行くのが筋でしょうね、  
…しかし問題が。」

レインは深刻そうに顔をしかめた。

「…問題？」

「はい、実はこの祭りは【花祭】と言い大まかに言っ  
お嬢様方が王宮の騎士と仲良くなって  
ついでに、国の平和も願ってしまおう  
という祭りなので  
使者は王宮に入れないのです。」

「うわあ、なにその勝手な祭り、…しかもレイン達がいなくて事は  
私一人で陛下と会わないといけないじゃん」

凜はうわあ……どうしよう。と頭を抱える。

「陛下のことなら何とかかなりますでしょう。  
…しかし、一番私どもが心配なことは  
お祭りの5日間凧様を他人に預けるといことです」

凧は失笑した。

「知らない人と5日間かあ…あははっ確かにそれ死ぬる」

凧は5日もおしとやかにお嬢様を演じることを  
想像すると吐き気がしたのだ。

「陛下も人が悪い、こんな逃げられない手を使うなんて…、  
はあ…、もうここは腹を括るしかないだろうなあ」

凧はため息を漏らしながら  
髪の毛をクシャクシャとかきむしった。

「…で、その祭りとやらは  
いつなの？」

「それが…一週間後でございます。  
この街から王宮まで馬車で3日ほどかかりますので  
少し早めに仕度を済ませないといけませんね」

「…はあ、重いドレス、お嬢様方のつまらない会話…  
想像するだけでも行きたくなくなるわあ、」

「…お辛いでしょうけど、我慢してください  
私どもも陛下の命となれば仕方ないのです」

レインは複雑そうな表情をする。

「分かってるよ…陛下の命だもんね、」

と、凜は皮肉たっぷりで言い放った。

「はあ、…出来るだけ努力するよ  
あ、レイン達がない代わりと言つのはあれだけど  
出来ればライト（馬）を王宮に  
待機させたいんだけど出来そう？」

出来ることならハクを連れて行きたいのだが  
見つかったときの、パニックが想像できるため駄目なのだ。

「…ライトですか、」

レインは顎を触り考えるしぐさを見せる。  
そして暫くし口を開いた。

「王宮の騎士の中に確か知り合いがいたと思います。  
…その人に頼んで見ましよう」

「うん、お願い」

---

「では、話がまとまったようですので、早速  
凜様。マナーレッスンを始めましようか」

凜はあからさまに顔をしかめたが  
レインから逃げられないのは分かっていたため潔く諦めた。

## 仮面

人混みの中凜の馬車は先導され優雅に進んでいく。

黄色い歓声…花火の音…空から降る色とりどりの花たち。

「はぁ…ついに来てしまったよ王宮。しかも  
ドレス重いし…萎える。」

凜は頭を抱え深くため息をついた。

今日の凜のドレスは淡い緑色で、  
新緑を思わせる、そして、白い花のモチーフが  
ところどころにあり さわやかなドレスだ。

もちろんリーフからもらった腕輪、  
グレイス家の指輪もしている。

「凜様シャキツとしてください。」

…いいですか凜様、くれぐれも暴れたりしませんように」

レインが声を潜めて話した。

「はいはい、分かってるよそんなこと。

ただあまりの派手さに気がめいつてるだけ」

「国の1大イベントですから、これくらい当たり前です  
…そんなことより、これからの予定を言いますよ。」

レインはチラリと外へ目を向け

外の様子を見た後、すぐに予定表を取り出した。

「えーと、まず王宮に着いてから  
先導係により、中庭へと案内されます。

案内された後、陛下が演説されます。そして終わった後  
王宮の騎士との対面式です。…ここで、5日間のパーティナーが決  
まります。

パーティナーは2〜5人です。

パーティナーが決まった後、親ぼくを深めるため  
残りの時間はパーティナーとの自由行動となります。

そして夜はディナーパーティをし1日目の終わりとなります。  
おそらく、凜様はこのディナーの時陛下との顔合わせとなるでし

「よう」

「そして2日目から本格的に祭りの始まりとなります。

2日目は朝の食事が終わった後すぐに

王宮の裏山にある教会に向かいます。この教会は  
酷い山奥にあり、さらに魔物もでる危険な山となっています。

その教会は遠いので途中のお屋敷で夜を過ごし

3日目の夕方に着くことになるでしょう。

夕食はお互いを称えあう、ディナーパーティーとなります。」

「そして4日目の朝教会を出て王宮に向かいかえります。

この時は護衛も増え、帰りやすくなるでしょう。」

「そして最後の5日目はもつとも

お互いを分かち合えたチームに陛下からの表彰があります。

…以上で祭りの予定確認終了です。」

「細かいところは、パートナーに聞いてください。」

「はあ…、何でわざわざ危険をおかしに

行かないといけないのかねえ。理解に苦しむわ、」

凜は祭りの内容を改めて聞き



さらにテンションを落とす。

「これも、民のためですよ。教会に行き祈りをささげられたチームの数が多いほどいい年になるといわれているイベントなんですから。」

「はいはい、分かっていますよ

グレイス家の名に恥じぬよう

一生懸命勤めさせていただきますよッ！」

凜は最後のほうを嫌味っぽく言い放った。

「はい、是非そうしてください

期待してますよ凜様ッ…おや、どうやら

王宮に着いたようですね。…凜様言ってるっしやいませ…！」

凜たちは色々と話しているうちに  
どうやら王宮についたようだ。

馬車はゆっくり止まり  
扉が開いた…。

「行って参りますわッ」

凜は偽りの自分をまとい  
戦場へと足を踏み入れた…。

仮面（後書き）

さてさて、女の戦いが始まるか？！

## 騎士のお勤め

今日は【花祭】の前日、  
明日祭りに出場する騎士たちは大忙しだ。

(おい、そのテーブルこっちに持ってきてくれー!!)

(違うッ!!これはココじゃ無いだろッ!!)

(わあああああッ  
ガシャンッ!!)

エルスもまたその忙しい騎士の一人であった。  
エルスは騎士の中でも最も強いクラスの  
総団長となっている。

嫌でも出ないといけなのだ。

「はあ、いよいよ明日か」

エルスは中庭で力仕事をする  
団員を見ながら呟いた。

すると突然

肩に衝撃が走った…。

—————  
バシッ！！

「…痛ッ、」

エルスは顔を歪ませながら  
肩を叩いたであろう人物に目を向けた。

「…よッエルス、そんな暗い顔していると女が逃げるぞッ！」

そこには総副団長　ディラド・ヒース　いた。

「っヒース！、お前は馬鹿力なんだから加減しろッ」

「いやあ、あまりに総団長様が  
情けないツラしてるもんでついッ」

ガハハハッと下品に笑うデカマツチヨ。  
ヒースは背がエルスより高く  
筋肉がものすごくついている。

しかも、ここ最近日差しが強かったせいか  
肌は黒くより、迫力が増している。

髪の色は燃えるような赤色だ。

「…情けないツラって、そんな酷い顔してたか俺？」

「ああ、してたな。てか毎年のことだが、  
お前のその悩みは贅沢だぞ！！…令嬢に言い寄られて困るなんて  
世の中の男を敵に回してるぞ！！」

そう言うヒースに  
エルスは不貞腐れた様に言い放った。

「お前が、実際俺の立場になつてみたらいいさ  
お嬢様方は決して俺を見て言い寄ってるんじゃない  
地位目当てでよってきているんだ。そんなの…嬉しいか？」

「…、」

ヒースは本当に悲しそうにするエルスを見てやるせない気持ちになる。

本当はヒースも分かっているんだ  
エルスの悲しみを…。

でも、自分がどうこう出来る問題ではないのだ。

「さあな、持てないよりいいかもしれないが、  
まあ…今年はそのような悩むこと無いだろ？  
身代わりがいるんだからよッ、」

「ああ、気の毒だがな。  
しかし俺が出なければならぬ  
事実には変わらないだろ？」

「お前、そんなに嫌なのか…おっ  
ならぬ案がある」

ヒースはひらめいたとばかりに  
弾んだ声を出した。

「…ん、どんな案だ？」

「なあに、簡単なことさ、ただの変装じゃなく  
女が自ら逃げていくそんな、恐ろしいメイクをすればいい!!」

エルスはそれを聞いてなるほどな、  
っと呟いた。

「まあ、それでも話しかけてくる変わり者の令嬢がいたら  
俺も旅に着いてってやるから安心しなッ!!」

「フツ、ああ期待しておっつ」

こうしてエルスの不安は  
少し軽くなったのだ…。



## 騎士のお勤め（後書き）

唯一の親友の前では男らしい話し方のエルスでした。

## 私の騎士

---

王宮の前には多くの馬車が並び  
色とりどりのドレスがあふれている…。

「長旅お疲れ様でした。リン・グレイス様ですね？」

中年の執事が凜を出迎えた。

「はい、そうですわ ニッコッ」

凜は柔らかく微笑む。

「では、グレイス様会場はこちらとなります  
足元に気を付けてお歩きください」

「…お気遣い感謝いたしますわ、」

---

中庭には白いバラを中心に色とりどりの  
花が咲き乱れていた。

（キャツ、キャツ…あの指輪はグレイス家の当主様よ！！）

（わぁ〜流石当主様、お美しいですわッ）

（ガーラー族を助けたという…当主様、優しそうですッ）

もちろん草花の声は聞こえて来るもので…。

凜は回りにはれないように花に向かい微笑んだ。

（きゃぁ〜！！当主様がコツチを見て微笑まれたわッ）

（なんてお可愛いらしいのでしょうッ！！）

凜はアイドルにでもなったと  
錯覚しそうだ、内心苦笑していた。

そして凜は草花から目を離し  
花より色鮮やかなお嬢様方に目を向けた…。

…何人が凜に気づき

コソコソと話をしている令嬢がいる。

が、凜は無視した。

お嬢様方は見たところ300人は余裕でいそうで  
凜はこれなら、端で大人しくしていれば  
目立つことも無いだろうと…木の木陰の方へと移動した。

【ここまでくれば、お嬢様方も絡んでこないでしょッ】と

凜は思いながら他人ごとの様に  
祭りに参加しているお嬢様方を観察していた。

すると一人のお嬢様に目が行く。

一番きらびやかなドレスに身を包んだ  
お嬢様を中心に人だかりが出来ていた。

特に指にしている《赤い宝石の指輪》はすごい。

【うわぁ、派手！ きつといいとこのお嬢様で  
みんなお近づきになりたいと、媚売っているんだろっなぁ…】

凜は扇子を取り出し優雅にあおぐ。

暫くすると 突然大きな拍手と黄色い歓声が  
中庭に響きわたった。

どうやら陛下のお出ましのようだ。

【フッ、なんか前の世界みたいで懐かしいなぁ】

凜はアイドルグループに群がる友人を思い出し  
懐かしいような、悲しいような…そんな気持ちとなった。

「今日は天候にも恵まれ、祭りの始めとしては最高の日となった。  
…淑女の皆、決して無理の無い限り頑張っていたきたい。  
我も淑女の皆が良い騎士と出会うことを願っている…では  
祭りを開催したいと思う。皆健闘を祈る。」

陛下の姿は遠くて見えなかったが  
おそらくまだ若いだろうなあと凜は声で判断した。

そして陛下がさった後、  
ラッパの音と共に騎士たちの入場となった。

【んっ、ざつと500つとところかあ】

お嬢様方はわれ先と  
かっこいい人を求め騎士たちの方へと走っていった。

それを凜は大変だなあと  
思いながらゆっくりと足を進めていた。

そして人だかりに近づくと  
その黄色い歓声は大きくなり  
耳が痛くなる…。

凜は早くここを出たいなあと重いながら  
つろつろと歩く。

すると…聞いたことがある名前が  
会場を騒がせてること気がついた。

「っエルス様は私のものなんだからッ!!」

「いやッ！エルス様は私としか組みませんわッ」

「きゃあッッ!!エルス様ッッ!!どこですのっ」

【エルス!?!…えッ今エルスって言った?】

凜は聞き間違えかと思ツたが何度も  
同じ名前が呼ばれていた。

【ほー、騎士だからいるだろうと思っただけど  
凄い人気なんだろうなあ…クスッ　ハーレムじゃんッ】

凜はお嬢様に群がられてるエルスを想像し  
クスリ、と笑ってしまった。

凜はエルスに群がるお嬢様の固まりを横目に  
いい騎士はいないかと会場を見渡した…。

【ん〜、あんまり人気のなさそうで、強そうな人  
どこかにいないかなあ…。】

そしてまたうるうると  
動き回る。

「んー、どれも微妙だなあ…。」

突然凜の背後から声がかかった

「失礼、お嬢様もう騎士はお決まりになりましたか？  
…もしよければ私と、」

「おい、抜け駆けはよくねーぞツ！！」

そしてどんどんその人数は増えていく。  
どうやらなかなか決まらない凜は目を付けられたようだ。



凜は困ったなあ…と思いながら  
辺りを見渡す。

【こいつ等顔はいいけど、絶対弱そうだし  
…はあ、どうしよう。】

しかし、凜は突然 ある方向へ顔を向けた  
…何かに引きよられるように。

【…。】

顔を向けた先には…木陰にポツンと騎士がいた。  
その男は前髪で右半分顔を隠すような髪型だった。

【んー顔怪我でもしてるのかなあ…。まあ物静かそうだし  
あの人にしようかな。】

凜は基本自分の身は自分で守れるので  
騎士がいなくてもどうにかなるだろう。

凜はあの人にしようと決心し、  
周りにいる騎士たちに向かって話した。

「皆様申し訳ありませんがわたくし

もう騎士様を決めましたの、では失礼しますわニコッ」

凜は啞然とする騎士を残し

逃げるように 木陰にいる騎士の方へ歩いていった。

## 再会

コッ、コッ…コッン、

凜は目を付けた騎士の前で、止まった。  
騎士は寝ているのか、目をつむっていた。

「…すみません、」

凜は声をかける。

基本騎士はお嬢様から依頼を受ければ断ることが出来ない。

「すみませんっ」

…騎士に何度も呼びかけるが返事がない。  
凜は無視する騎士にイライラし始めた。

【チッ クソっ！何でこいつは無視知るんだよッ  
…フッ、そっちがその気なら…】

そして不適な笑みと共に

さらに騎士に近づいた…それはもう、…耳元まで。

凜は大きく息を吸う。

スーウ

「…起きろおおおおお!!」

「うつわあああッ!」

男は木に体を預けていたが、派手に転んだ。

「あら、大丈夫ですか？」

彼方があまりにもわたくしを無視するものですから  
つい、意地悪してしまいましたわ…ニコッ」

凜は全ての言葉を

ニコニコしながら言い放った。

男は凜を見て目を見開き驚いていたが、  
落ち着くと、立ち上がりしっかりと凜を見据えた。  
その表情は驚きと嬉しさが混ざっているようだった。

「これは失礼しました、まさか私のような醜いものにお嬢様が話かけてくださるとは思いもよらなかったもので…、」

「フフツ、わたくし世間から見れば変わり者、…らしいですわッ」

凜はお嬢様を優雅に演じる。

「…変わり者、クスツ確かにそうかも知れませんか…」

騎士の目は優しく凜を見ていた。  
まるで恋人を見るかの用に。

…しかし鈍感な凜は  
気づかないまま会話を続ける。

「まあ酷い、彼方ならそんな事ない、って言うてくださると  
思いましたのに。」

「すみません」

騎士は笑いながら誤った。

そして話にはひと段落したところ  
凜は話を切り出した。

---

「あの、もしよければ、わたくしの  
騎士をお願いできないでしょうか？」

「クスツ彼方なら大歓迎ですよ、  
まだお礼もしていなかったですし」

「…お礼？」

凜は見に覚えの無いことに  
首を捻らせた。

「ええ、お礼です。…そういえば自己紹介がまだでしたね」

騎士はニッコリと笑った。

「私の名は《エルス・ファルト・ドラディラス》です。  
あの時は偽名でしたが、これは本当の名前ですよ…リン。」

凜は混乱した。

【…ええッ！！今エルスって言った？！しかも名前に  
王族のドラディラスが入ってるんだけど…、】

「…混乱しますよね、だからあの時本当の名前は言わなかったです  
あと、この顔は特殊メイクですよ。驚いたでしょう？」

混乱している凜をなだめるように  
エルスは優しく理由を話した。

。

凜は落ち着きを取り戻すのに

だいぶ時間が掛かったが、完全に冷静に戻った。

「…本当にエルス、ですか？」

冷静な凜は用心のため  
お嬢様をくずさない…。

「ええ、本当に私はあの時会ったエルスですよ。  
ですので、その難しい話し方も必要ありませんよ ニッコッ  
まだ信用できないのでしたら、私に質問して見てください」

「…ッ、では確認のために質問させてもらいますわッ  
わたくしがエルスとお会いした時、エルスは何色の服を  
着ていましたか？」

凜は確か可愛らしいピンクのドレスを着ていたはずだ、  
と考える。

だが、  
凜の質問にエルスは固まってしまった。

「…………、それ言わないといけませんか？」

その表情には羞恥心が含まれて



内心凜は、この騎士がエルスだと確信した。

…が、せっかくなのでエルスの困った顔をもっと見ようと意地悪をする。

「…はい、確認のためお願いしますわっ」

凜は深刻そうにそう言い放った。  
心の中では大笑いだ。

「…分かりました。っ、私があの時来ていた服はピンク色で、ドレスでした…。」

エルスの顔は真っ赤だった。

そんなエルスを見てついに  
凜は笑いをこらえることが出来なくなった。

「…ッ、フッ」

「フッ？」

それを不審そうに見るエルス。

「…フツ、アハハ アハハツ…エルスっ面白いッ!!」

お腹を抱えて大笑いする凜に  
エルスは不機嫌になった。

「リン、…私をからかいましたね？」

「フフツ、ごめんっあまりにも

真剣に言うものだから…許して？」

リンはまだ少し笑いの余韻を残したまま謝った。

「嫌ですッ 許しません

私はリンのおかげで大変傷つきました。

なので、 後でたっぷりとお返しして差し上げますよ、ニッコッ」

エルスは妖美な笑みを漏らしながら  
即答した…。

凜はその笑みを見て  
身の危険を感じた…。

【…なんか、私ヤバイことしたかも…、】

内心冷や汗、ダラダランの凜は何とか  
平常心を保ち 笑顔でごまかした…。

。

「あっそういえば、エルスのせいでいつの間にか  
お嬢様言葉じゃなくなってるじゃん!!」

「クスッ、私はその話かたの方が好きですけどね？」

「えッ本当?…じゃあエルスの前だけでも  
このままでいこうかなっ」

正直お嬢様演じるのがだるかった凜は  
素直に口調を変えた…。

「じゃあさッ！エルスも口調変えようよ  
そんな堅苦しいのなんて疲れるだけだよ!!」

「ええそうですね、でも私はこの話し方をするのが多く

こっちの方がなれているんです。だから変えるとしても  
一人称を（俺）にするのがやっとですかね…。」

そっついエルスは苦笑した。

## 逆襲（前書き）

今日から5日まで用事がありますので

メッセージの返信は5日まで出来ませんのでよろしくお願いします。

6日にはちゃんと更新できるので

見ていただけたら嬉しく思います。

## 逆襲

…。

「ああ、そういえば凜貴女の自己紹介がまだですよ？」

凜もそれを聞いてそうだったと思い出す。

「えっと、私の名はリン・グレイスです。グレイス家の当主やります。」

それを聞いたエルスは驚いた。

「えっ、リンってグレイス家当主だったんですかっ!？」

「うん そうだよ あの時は言わなくてごめんね？」

「いえ、それはお互い様です…。はあしかし、彼方がグレイス家当主とは…。」

あまりにも信じられないというような表情をするエルスに凜は眉を細めた。

「なに？私がグレイス家当主なのが不満なの？」

そう言うとエルスは はっ！とし、顔を上げた…。

「いついやッ！違います。…ただ、あのシルフッドの英雄とまで賞されることをした御人かと思うとなんか、感動しただけです。」

「…英雄だなんて、そんな大したことはしてないよ  
グレイス家としてただ役目を果ただけ。」

凜は少し表情が変わったが  
エルスは気づかなかったようだ…。

「いや、その若さで、しかも女性が  
役目を果たすのは凄いです。」

「そう言ってくれれば助かるよ。」

---

話に区切りが付き

凜は中庭へと目を向けた。

中庭は今までお嬢様方であふれていたのに  
いつの間にか残っているのはわずかとなった。  
皆、親ぼく会へと移ったのだろう…。

「あ、そういえば騎士もう一人

選ばないといけなかったんだっけ…選んでないやッ」

凜はもう一人を選んでないことを思い出し  
うぐん、と悩みだした。

「ああ、それでしたら。俺の知り合いを頼みましょうか」

「その人はエルスの信頼できる人なの？」

「…出来れば私はお嬢様を演じたくないんだけど。」

凜は5日も一緒に過ごすチーム内では

ありのままの自分を出したいと思っている。

「クスッ、凜はこのままのほうが凜らしいですからね？」

「…心配しなくても大丈夫ですよ。彼は俺の唯一の親友ですから」  
「コッ」



「わあ〜ツ親友かあ、その人と会うの楽しみだなあ!!!」

凜は本当に楽しみだと

目を輝かせた…。

そんな凜をみていたエルスは  
雰囲気我突然変わった…。

それは危険な香り…。

無防備な凜は気づかない。

「フフツ いい奴ですけど…、あまり仲良くしないで下さいね？」

とエルスは凜に笑顔を向けたまま笑うが、  
最後の方の声が少し低くかった…。

凜はなにやら怪しい雰囲気  
つい、どもってしまっ…。

「ん…、なんで？」

優しい笑顔だったエルスは  
今、目には熱がこもっている…。

「妬けるから…ですかね」

この言葉が冗談だと分かっているも  
動揺してしまうのは仕方ないと凜は思った。

凜の頬は思わず赤くなる…。

「／／エルスツそう言うのは…」

本当に好きな人にだけいうものだよ？」

凜の声は少し上ずってしまった…。

凜がそう言うとエルスは

クスリ、と笑いそして熱い視線を送ったまま  
凜の傍へ…近づいた。

凜は身の危険を感じ下がるうとした…が、

「…ッ、」

下がる前にエルスに腕をつかまれ  
引き寄せられ腕の中へと閉じ込められてしまった。

凜は近くで感じるエルスのぬくもりに  
つい、意識してしまっ。

凜は離れようと  
必死でもがく…が、離れない。

「それくらい分かっていますよ？  
…だから、貴女にいったんです」

エルスは凜の耳元で  
低く・甘くささやいた…。

ゾクッ！

「／／／…んっ」

恋愛経験のない凜はパニックに陥っていた。

凜はどうしていいか分からず…エルスの腕の中で固まってしまった。

エルスは顔を真っ赤にしている凜に満足したのか  
クスリ、と笑い壊れ物を扱うようにそつと腕を解いた、

「クスッ 凜そんなにかたくならないで、  
冗談です、」

それを聞いた凜は

さらに顔を真っ赤にさせた…。

「っもう…！ 心臓に悪いから止めてよッ…！」

「フフッ さっきの仕返しですよ」

えっ…！と凜は驚いた

さっきエルスにした意地悪は、私がこんな目にあっただけで酷いものだったのかと…。

「ッ、ごめん…！そんなに傷ついているとは思わなくて…」

もう言わないねッ…！」

「いえ、言っていただけでもけっこうですよ？

…耐性が着いたかもしれませぬ。」

意地悪そうにエルスは笑った…。

それを凜は頭がもげそうなくらい必死に断った。

「い、いやっいいよ、遠慮しておく…！」

「…そうですか？、それは残念です ニコッ」

凜はこのとき思った  
エルスは腹黒だと…。

## 逆襲（後書き）

凜とエルスのいちやいちやを書いていたら  
ストーリーがあまり進まなかったです。（笑）

## 冷たいランチ

---

お昼時なのか中庭では  
騎士たちがランチの話題で盛り上がっていた。

そしてそれを察したエルスは  
凜をランチへと誘う…。

「そつえばリン、お腹すきませんか？」

「ん？…そつえば空いたかも。  
ああ…もうこんな時間だったんだねエルスとの  
お喋りが楽しくてつい時間を忘れてたわ」

流石無自覚。とでも言おうか  
凜は自分に気のある異性の前で  
無邪気に甘い言葉を吐き、クスクスと笑った。

案の定エルスは眩しい物でも見たかのように  
目を細め微笑んだ…。

「クスッ俺も凄く楽しかったですよ、」

「本当に？…よかったあ。」

あつ、でもランチ私どこがいい店とか分からないやつ」

「ああそれなら俺、いい店知ってますよ？」

「えっ、エルスが進める店？なんか凄く興味ある！！」

「そんな期待しないで下さいね。」

親友が行きつけのお店なんです…たぶん今も  
その店にいると思いますよ？」

「へーもっているんだ早いね、お腹空きやすいのかな？」

お昼といっても今の時刻はちょうど正午ぐらいだ。



凜の疑問にエルスは苦笑する

「…いや、アイツはサボリですよ、  
おそらくお酒でも飲んでるんじゃないですかね。」

仕事もしないでしょうがない奴でしょう?と  
エルスは呆れた様に言った…。

「クスツ エルスも大変なんだね、  
…でも、その親友の気持ちも分かるかもっ」

凜は学校に通っていた時  
よくサボることがあった…。

「本当ですか?…リンも悪い子さんだったんですね?」

エルスは柔らかく笑った…。

「さあ…どうでしょう?」

凜はその笑みにお返しとばかりに  
悪戯っ子のような笑顔を見せた…。

---

「ああ、また話し込んだじゃったね、  
時間がだいぶたつちやった。」

「クスツ、本当ですね。」

「…あ、そうだ、そのお店って  
城から遠い場所にある？」

「いえ、そんなに遠くありませんよ、でも今回は  
馬車で行きましょう。そのほうが俺も彼方を守りやすい」

今は祭で色んな人が街にあふれている。  
それなりに危険も多くなるのだ。

「ん、分かった」

「では、早速行きましょうか？」

そして二人は馬車に乗り

お店へと向かった…。

…カラン・カラン

「いらいしゃいませ、2名様ですね  
お席へのご案内させていただきます。」

燕尾服を着た男がそう話す。

「いや、いい 中にもう知り合いが待っているんだ」

「そうですか、失礼しました。  
では、ごゆるりと…。」

店はクラシックな洋館風で  
床には豪華な絨毯。天井にはシャンデリアがあった。

うわぁ グレイス家も凄いけどここも負けてないなあ  
と凜は思った…。

「では、行きましようか…ちょっと失礼、」

エルスはそう言うと

凜の腰にそつと手を添えた。

「えっ？…ちよっ、」

凜は動揺の声を上げたが、

エルスは無視して先へと進んだ…。

「さあ、あいつは何処にいるんでしょうね？」

…。

店の中を歩いていたが

突然 エルスの足が止まった。

エルスは前方を貼り付けた笑顔で見ている

どうしたんだらう？と凜も

前方へと目を向けた…。

「…うわあ。」

前方には派手な赤髪の男と  
それを囲うように華やかな女性がいた。

(ねえ？ヒースう こっちみてえ)

(いやよッ ヒースうはい、あくん。)

「ん？ あくん、ガハハツいいねえ？可愛い子ばかりだッ」

この男がいるところだけまるでキャバクラだ。

呆れて男を見ていたが ふ、とエルスに目を向けると

…凜は背筋に冷や汗が流れた…。

エルスの口元は引きつっていた。

「…エ、エルス？」

なんだかエルスの周りの温度が  
どンドン下がっているような…。

エルスは聞こえていないのか

凜の問いかけを無視し、

前の男へ話しかけた…。

「おい、ヒース。こんなところで何してるんだ？」

… 仕事中のはずだか？」

その声は低く

店の雑音が止まったかの様に  
その声だけが良く響いた…。

今まで騒いでいた  
女達の声は止み、みんな怯えていた。

「…悪いですが、お嬢さん方席を外してくれますか？」

( ) ( ) (ひッ…は、はいッ!!) ( ) ( )

エルスの声により  
女達は逃げる様に席を外した…。

それを見て凜も思う…、

【わ、私も逃げたい!!】

凜は試しに腰に回っている  
エルスの手を剥いて見ようとするが…取れない。

---

グイッ

「…ッッ」

取れないどころか、さらに  
距離が近くなってしまう…。

【なツ…なんで?!】

凜はたまらずエルスへと目を向けるが  
エルスは何事もなかったかのように  
前の男だけ見ていた…。

「ヒース、黙っていないで答えなさい。」

ヒースの顔は真っ青だ。

「ちょ、ちょっとした息抜きだろ?」

「…昨日も準備後の練習サボったよな?  
そして今日もサボった。…それが、ちょっとした息抜き?」

エルスの言葉を聞いたヒースは  
え?っ何で知ってんの?という表情となった。  
が、ヒースはエルスに言い返した。

「えッ…と、おっおう、そうだ。それも  
ちょっとした息抜きだッ」

「お前：1週間に3回はサボってるよな？  
それもちよつとした息抜きか？」

ヒースは：固まった。  
顔を真っ青にして：固まった。

どうやら、思考停止したみたいだ。  
：それを見て、エルスは はあ。とため息をついた、

そして凜を見るなり  
今までが嘘だったかのように、優しい笑顔を向けた。

「：はあ、さてリン 待たせましたって  
すみませんでした。遅くなりましたがランチにしましょう ニコ  
っ」

突然のエルスの変わり様に  
凜はえ？、とつい間抜けな声が出てしまったのであった。





## 守るもの

---

「リン…食事は口に合いましたか？」

「…えッ？ああ、うん すっ 凄く美味しいよ？」

凜は凄くどもりながら答えた…。

何故、こんなことになっているかと言うと

凜たちがテーブルで食事をしている横で

ヒースが床で正座をしているからだ…。

凜はそれが気になってしょうがない…。

そして我慢できなくなり

凜はエルスへ声をかけた。

「あ、あのエルス？」

「はい、何でしょう？ニコッ」

凜が声をかけた途端にエルスは笑顔に。

そして

いやあくそんな笑顔を向けられても…と  
凜は内心思う。

「あッあの、もう許してあげてもいいんじゃない？  
…下にいられると 気になる」

「ああ、リンがそういうのなら」

「おい、ヒースお前もテーブルに着け  
今回のことは許してやる。」

この言葉を聴いてヒースは  
パアアと笑顔になった。

「えッ！マジで！！」

「ただしッこれからやる仕事を  
完璧にするんだなッ」

「…これからやる仕事？」

ヒースはそういいながらエルスの席の隣へと腰をかけた。

「ああ、祭の仕事だ」

「えっ！？お前その顔で騎士を頼まれたのか？  
…また物好きな令嬢もいたもんだなあ」

そうヒースが話した直後  
凜から不穏な空気が流れ出す…。

「クスッ それは私に言ってるの？」

凜は黒い笑みでヒースに言い放った。

「い、いや違う…って  
まさか、お前がこいを選んだのか？」

「うん、そうだけど？」

「うんって…こいつ喋り方、…本当にお嬢様か？」

「フツエルの親友だから気を使わなかったんだけど…こっちのほうが宜しかったのかしら？」

「ヒース様の好きなほうでいいですわよ？」

わたくしどちらでも出来ますので ニッコリ

凜の笑みが黒すぎたのか  
ヒースの顔は引きつってしまった。

「いついや、是非さっきの方の喋り方で  
お願いします…。」

「そう？遠慮しなくてもいいんだけど…まあ、いつか」

「あつ、ちなみにエルスを選んだわけは  
人気なさそうで、強そうな騎士にしようと  
思ったからだよ？正直私、顔なんてどうでもいいの」

それを聞いたヒースは驚き  
エルスは嬉しそうに微笑んだ…。

「顔はどうでもいい、か 珍しいなお前ってか  
さつきから気になってたんだが、  
お前達名前で呼び合ってるし何か仲良くないか？」

「ああ…それは、この前のシルフッドの任務のとき  
助けて貰ったんだ。しかも…夜にリン一人で」

「ほう、お前を助けるなんてすげーなッ  
しかも、夜に一人…。常識はずれの令嬢だな」

「クスッ そこがまた彼女の魅力ですよ。  
…だから、今回はしっかり彼女に目を光らせ  
守らないと…ですよ？」

ヒースは凜に好意を持つエルスを見て  
絶句した…。

「…あのエルスが、女に好意を持つてる?!」

ぼそつと言ったつもりだが  
エルスに聞こえてしまったようだ。

「ヒース何か言いましたか？」

「いっや 何でもねえ、…ああそういえば  
嬢ちゃんに自己紹介まだしてなかったなあ」

「俺の名前はディラド・ヒースだ  
総副団長をしている。よろしくなッ!!」

えっこんな奴が総副団長！？と凜は  
耳を疑ったが…気にしないことにした。

「私の名前はリン・グレイス  
グレイス家の当主をしています。よろしく」

「ッえ!?!…お前がグレイス家の当主なのか？」  
ああまたエルスと同じリアクションだ、と凜は  
心の中でため息をついた…。

「そうだけど、何か文句ある？」

「いや、別にねーけど、お前歳いくつだ？」

「ん？17だけど？」

それを言うと

ヒースだけでなく、エルスまで驚いた。

「「17ツ!？」」

「ああ そういえばこの歳で当主やるのって珍しいらしいね。  
…でも、安心して？そこらへんの男よりは普通に強いから」

凜は驚いてる2人を無視して  
話題を変える…。

「ところで、2人は何歳なの？」

「えッ…ああ、俺達はどっちも21ですよ？」

「わあ、結構若いんだねッ」

「いやッお前ほどじゃねーけどなッ」



会話も、食事も進み

いつの間にか城へ戻る時刻となっていた。

「さて、もうそろそろ城にもどらないとですね。」

「うわあ、ついに来たか

陛下との対面がっ」

「クスッ そんなに嫌ですか陛下に会うのが、」

「嫌ッ!!」

「即答かよッ お前なあ

一応一国のお偉いさんなんだから敬えよ、」

「だって、陛下に会って事は  
形式の礼儀とかしなきゃいけないし  
いろいろと疲れるじゃん!!」

「クスッ 大丈夫ですよ、おそらく陛下は  
ラフな面会をするでしょうから。」

「んゝ それならいいんだけどねえ。」

「俺達もなんなら付き添いますよ、」

不安そうな凜にエルスは

そう微笑みながら優しい声をかけた。

そのエルスの裏で

苦虫をかんだような顔をしている

奴がいるけど気にしない…。

「本当！？ うれしいッ

ありがとエルス。何か頑張れそうな気がしてきたよっ」

そっぴ 凜はエルスに飛びっきりの

笑顔を見せたのだった。

そして話が終わった後3人は仲良く？

馬車に乗り城へと向かったのだった。



## 煌びやかな夜

---

レットカーペットが  
色鮮やかなドレスを引き立たせる。

夜のパーティーはとても艶やかだ…。  
お嬢様方はそれぞれ昼とは違うドレスに着替え  
隣には騎士達がいる。

そして凜も例外ではない…。

「リンとても良く似合っていますよ ニッコ」

リンのドレスは濃いエメラルドグリーンの  
大人っぽいけど可愛いドレスだった。

9—2794<

そのドレスは凜の白い肌と

> i 2 8 2 5

今は染めて輝かしいほど黄色い髪を引き立てていた。

「クスッ お世辞でもうれしいわっ」

凜は社交的な笑顔をエルスに向けた…。

それを見てヒースは苦笑いする。

「お前 本当に17歳か？」

服装だけでこんな変わるなんて…詐欺だなっ」

そんなことを言うヒースに  
凜は黒い笑みを捧げた…。

「ヒース様、何か言いましたか？」

「っ…いつ、いや何でもありません」

「…そうですか？、まあいいですわ

…それより、わたくし今凄いい図らだと思いませんか？」

「顔に酷い傷を負った男達といるなんて…。」

そう、今凜は顔に傷を負ったヒースとエルスに守られているのだ…。

初めはエルスだけ特殊メイクをしていたのだが今はヒースもメイクをしている…。

なので

案の定、他の令嬢から変な目で見られている。

「…確かになあ、だけど仕方ねーだろ？」

俺達顔いいからすぐに女寄ってきて大変なんだよ。」

「クスツもてる男は大変ですね？」

凜はしらけた目で

ヒースに言ったが自分に酔いしれるヒースはまったく気づかなかったようだ…。

---

凜はあまり賑やかなところには行かず会場の隅でワインを口に使っていた…。

凜は17だが前から酒を飲んでいてワインを一杯飲んだぐらいじゃ全然酔わない。

…まあ流石に、5杯はきついだらうけど。

「…リン、お酒飲んでも大丈夫なんですか？」

エルスが心配そうにリンを見る。

「大丈夫ですわよ？…ワイン一杯ぐらいじゃ全然酔いませんのよ、わたくし ニコっ」

そんな会話をしながら

ひそかに会場を見守っていたが

ついに平和が破られる時が来たようだ…。

前方から派手な真っ赤なドレスに身を包んだお嬢様が凜に近づいていく…。

凜は誰だろうと

目を光らせる…すると見覚えのあるものが。

【ッ…あの 大きな赤い宝石の指輪は…！】

真っ赤な女が来た瞬間

薔薇の香りが辺りに漂った。

「ごきげんよう、グレイス様」

真っ赤な女は  
優雅に微笑む…。

「ごきげんよう…」

凜は名前が分からずつまずいたが、  
すぐに赤い女は自分の名前言った。

「クスツ…キャディーよ」

「失礼しましたわ、ごきげんようキャディー様  
お初に掛かります ニコッ」

凜はニコツと微笑み  
ドレスのすそを持ち優雅に  
挨拶をした…。

「フフツ そんな畏まらなくていいのよ？  
わたしは…貴女とお友達になりに来たんですから」

凜は内心 うわあ…いらなッ とか思っているが  
絶対顔に出さなかった。



「まあ、本当ですの？嬉しいですわッ」

「クスッ…貴女ならそう言ってくださると思ってましたわッ  
…これはわたくしと貴女がお友達になった記念の品ですわ  
どうぞ受け取って？」

…と、渡させたのは小さな箱。  
中身は…赤い指輪。

「まあ…いいのですの？  
…こんな高そうなもの、大切にさせていただきますわッ」

「喜んでもらえてよかったわッ…では、わたくしは  
これから用事がありますので失礼しますわ ニッコッ」

そうキャディーは言い  
颯爽と凧から離れていった…。

凧はそれを暫く見送り  
そして…指輪を持ち、バルコニーへと行った。

…そこには誰もいなく凧は  
肩の力を抜く。

「二人とも私の近くに来てっ」

凜は2人を近くに呼び

外部から自分達の行動が見えないよう

結界を張った…。

「おっお前魔法使えたのか?!」

凜が魔法を使ったのに

驚くヒース…。

「当たり前でしょッ 民の上に立つ領主やってるんだから。

そこらのお嬢様と一緒にしないでくれる?」

凜はふんッ、と言い放った。

そしていつも冷静なエルスは

冷静に凜に質問する…。

「…ところでリン、結界まで張ってどうかしましたか?」

「いや別に大したこと無いんだけど

一応ね?」

凜はそう話しながら先ほどもらった

指輪を手にとった…。

それに目を向けた2人は  
眉間にシワを寄せた…。

「こっこれはッ！」

「わっお、さすが。キャディー嬢  
やることがぶっ飛んでるねえー？」

凜が見せた指輪には  
良く調べなきや発見できないような  
悪い魔法が掛かっていた…。

しかもその魔法は  
呪いの一種だ…。

「はあ、あの人はこれをどれだけの  
人に渡したのかなあ、たちが悪い」

「それにしても お前良く  
この魔法に気づいたなあ、」

「えっ、これだけ魔力発してるんだから分かるでしょ？」

凜は平然とそういった。

「いや、これはそんな簡単に分かるような魔法じゃありませんよ…おそらく魔力の強い者にしか…」

「へえー考えたこと無いから 魔力の強いとか分からないや」

「でも、2人にも見えるって事は2人も魔力強いって事だよな？」

「ええ、俺は魔法苦手であまり使いませんが魔力は多くありますね、」

「俺は魔法も使えるし魔力も多くあるぞッ」

まあ2人とも上のクラスの騎士なんだから強くて当たり前かぁ…と凜はしみじみ思った。



赤い指輪

「リンもうそろそろ 会場へ戻りましょうか？  
陛下の演説が始まりますよ。」

それを聞いて凜は顔をしかめる

「ええ〜っ嫌ッ。もう少し

ここで、お菓子 食べてまったりしたいよッ」

「お前は餓鬼かッ！

普通のお嬢様はお菓子より

金・名誉・地位を欲しがるもんだろ！！」

「そんなもん入るかッ！それに餓鬼じゃないしッ！！」

「…っつ、そんなもんって、

金・名誉・地位があれば何でも出来るんだぜっ？」

「確かにね、でも金・名誉・地位なんてものに  
必死にしがみつく奴にいい人生なんて無いと思うけど？  
…もつとも、いい人生の判断の仕方は人それぞれだけど、」

凜は実際に金・名誉・地位に必死にしがみつく  
両親の姿を見てきた…。

自分の気に食わない会社は  
裏の手で潰し、金を巻き上げ

自分達の地位・権力をを棚に上げ  
人々を見下していた…。

それは人間の欲にまみれた汚い姿だった…。

2人はこんな少女が  
黒い部分を知っていることに驚いた。

「…おつお前 歳サバ読んでるんじゃないか！？  
本当は婆さんなんだろっ！…っって痛ッ！！」

「えっ、誰が婆さんだっけ??」

凜は黒い笑みを向けながら

ヒースの足を思いつき蹴った。

それをみてエルスは  
クスクスと笑った…。

「クスツ、リンそんな怒らないで上げてください  
ヒースの言い方は確かに悪かったです、  
悪気があったわけじゃないんですよ?」

「こんな若い少女のリンが  
人間の汚い部分を知ってるのが珍しかったです。  
リンの歳でそのことを分かってる人は  
そうそう無いでしょうから、」

それを聞いて凜は あッ、と思った。  
普通はこんな汚い事は知らないのか、

凜は なんだか分からない感情が心の中に渦巻き  
…笑いたくなくなった。



「…、友達がよく愚痴をこぼしてたんだよ。」

凜は、泣きそうなそんな、笑顔を見せた。

…2人はそんな凜に気づいたが  
あえて触れはしなかった。

「…そうですか、」

気まずい空気が流れる。

凜はそんな空気が気まずくて  
声をあげる。

「はぁ、…しょうがないから

陛下の話でも聞きに行こうかな。 二〇」

そんな凜の気持ちを理解した

2人は苦笑しながら凜の後ろに着いていった。

会場に戻ると

そこにはもう陛下がいて話はもう終盤を迎えていた。

そして…。

「 ……諸君では、楽しい時間を、乾杯。」

陛下のこの言葉と共に

会場は歓声に包まれ、また

騒がしいパーティーの始まりとなった。

「まあ、終わってしまいましたわね、」

ガヤガヤする中凛は白々しく

言葉を吐く…。

「ほー。よく言うぜ

確信犯がっ」

凛の言った言葉をヒースは

鼻で笑った。

「何のことか分かりませんわね。」

凜はニヤリと笑う。

「この悪女めッ!」

こんな風に楽しく会話をしていると  
凜の背後から咳払いが聞こえてきた…。

ツッコホン、

凜は、その声に驚いたが  
すぐに仮面を貼り付け優雅に  
後ろへ振り向いた。

「まあ失礼、何か御用ですか?」

振り向くとそこには小太りの  
燕尾服を着た中年男性がいた…。

「お話中失礼しました、陛下がお呼びでいます。」

凜はついに来たかと、  
心の中で毒づく。

「部屋までご案内いたします」

「ええ、お願いしますわッ ニッ」

凜は陛下からの呼び出し

だというのに、緊張もせず優雅に  
男性の後ろについて行った…。

## 会談

凜は今、煌びやかな扉の前に立たされている。  
凜の顔引き締まり…それはもう完璧なお嬢様だ。

そんな凜を不安そうにエルスとヒースが  
凜の後ろから見守る…。

【はあ、陛下ってどんな人なんだろう。

…まあ早く私に飽きてくれればいいんだけど、

凜は貼り付けた表情の中

こんなことを考えていた…。

そして、燕尾服の男の合図により

…扉が開かれた。

キイイーツ

眩しい光でつい目を細めてしまったが  
すぐに目を開きリンは凜と背を伸ばした。

そして目の前の机に  
陛下の姿があった。

……。

【うわぁ…、女遊びヤバそうだなぁ、】

これが陛下の第一印象だった。

陛下は一言で言うと派手で

髪は輝かしい金色。顔は白く

瞳は青い…。とにかく

いかにもプリンスって感じなのだ。

年齢は32ぐらいだろうか…。

「お初にお目にかかります陛下、

この度は挨拶が遅くなりましたことを

深くお詫び申し上げますわ。」

凜は深々と頭を下げた…

「別によい、姫君もっと気を楽しめるがいい」

陛下はニコツと首をかしげ

可愛らしく笑った…。

【ひっ、姫君!?

そんな臭い台詞をさらっと…流石だ…】

姫君!?! 凜はその言葉に絶句しそうになったが、  
どうにかシラを切る事が出来た。

「っ…はい、ありがとうございます。」

陛下は立ち上がり、近くにあるソファアへと  
足を運び、凜もそこへ案内された…。

今、陛下と凜は向かい合わせに  
ソファアに座っている。

【うわぁ、陛下の魔力がビシビシ伝わってくるんだけど  
…魔力で診断されるなんて気持ち悪い。】

凜は陛下の綺麗なお顔を見ながら  
心の中で毒づく…。もちろん笑顔を絶やさず。

「陛下 改めて自己紹介させていただきますわッ

わたくしの名はリン・グレイス リーフレアの領主をしています  
わ  
」

「ああ、噂はいろいろと聞いている  
」

「まあ、！本当ですか？…どんな噂かしら、お恥ずかしい。  
」

凜はまるで本当に恥ずかしがってるかの様に  
頬を赤く染め…。名演技を見せる。

「いや、そんな変な噂ではないさ、

むしろ姫君の噂は良い噂ばかりだ。ニコッ  
」

陛下は女なら誰でも頬を染めてしまうような  
そんな笑顔を振りまいた…。

だが、凜は違う。その言葉をさらりと  
受け流したのだった。

「ふふっ 良い噂だなんて…

皆さんわたくしを買いかぶりすぎですわッ  
」



「クスッ…謙虚な姫君だ。」

貴女はシルフッドで広まった病気を治し、  
こう言われているのではないか、《癒しの女神様》とな。」

凜も怪訝ながらこの噂については  
知っていた…。

「ッわたくしは ただ自分の出来ることをし

苦しんでいる人を助ける…当たり前のことをしたままですわっ  
陛下も苦しんでいる人がいたら同じ事をなさるでしょう？」

凜がそう答えると陛下は一瞬驚いたような表情をしたが  
すぐに、嬉しそうな笑みを漏らした…。

「ああそうだな、姫君は貴族の鏡だな。」

「貴族の鏡だなんて…、そんなこと無いですわッ  
わたくしはまだまだ学ぶことがありますもの、」

否定しつつも

凜はそりゃ、あんなバカ共と  
一緒にされては困ると考える。

「いや、最近の貴族どもは金、権力、地位、ばかりに目が行き弱い立場のために何かするということを考えない、むしろ弱い立場の者を蔑んでいる…、そんな中姫君のような考えを持っている方は素晴らしい人材なのだッ」

「…遅くなってしまったが我は姫君に今回のお礼をしたい  
我は何をすればよい、何でも申してみよっ」

凜はこの陛下の問いに頭を捻らせた…。

正直報酬はいただきたいところだ…、だが  
陛下からの報酬はホイホイ簡単に受け取るものではないのだと。

【…私が陛下から報酬をもらった、（好意を懐かれた）と  
他の貴族に知られたらきつと嫉妬を買い  
面倒なことになるだろうなあ…。】

それに…凜は心の中で最高に悪い笑みを  
こぼしながら思い出す…。

【それに、報酬はもうシルフッドから頂いてるんだよね。  
…金よりも い・い・物っ  
それは…信頼とアラン（シルフッド領主）への貸しっ  
ふふっアランにはこれから色々として貰わないとね？】

「お礼だなんて要りませんわッ！…わたくしは  
当たり前のことを当たり前にしただけですしッ  
…それに、お礼ならもうシルフッドの皆様から  
十分すぎるぐらいいただきました。」

「…そうか、しかし王宮としても  
お礼をせねば何かと大変でなあ。」

王宮も他国にせこせことしている国と  
思われるのが嫌なのだ。

陛下はふくむ、と腕をくみ考える。  
そして、

「おおそうだ、 姫君はまだガーラの木を助けた  
報酬をもらっていないではないかッ！！」

凜は陛下の発言に冷や汗を流した…。

【…えッ？…なんで知ってるの？】



探り合い（前書き）

すいません、訂正します。

人：「」

心の中の言葉…（）

人外…《》

詠唱魔法…【】

これから徐々に訂正していきたいと思います。

## 探り合い

( なっ何で陛下が知ってんの?! )

確かにアランには悪魔の悪戯の原因はガーラだと話した  
しかしその木の始末方法は教えていなのだ。  
しかもだいたい人間は木を殺して始末したと考えるだろう。

凜は心では動揺しながらも  
表情を表に出さないようしている…。

( …ガーラのことについてはレインとアルトしか知らないはず、  
だってあの場には私達しかいなかったのだから…。  
… 2人が陛下に話したとも考えにくいしッ )

( と、なると…陛下はガーラが消えた  
と言う情報を持っていることになる。  
だが、その情報だけではガーラがその  
後どうなったか分からないわけだ、 )

少なくとも陛下の頭の中ではこの3つの方法は考えているだろう。  
ガーラを魔法で転送させたか、抹消して殺したか  
またはその他の方法と言うことになる。

(クソツ…っそこで、はったりを言っ  
て私から何か情報を得ようとしているのか!!)

なんて…なんてツ男なんだコイツは!!

普段だらしく見せているのは仮の姿って事じゃないかッ

凜は陛下に怒りを覚えた…。

そして今から始まるうとしている

陛下の探りは危険なものだと確信した。

(この私の植物を服従させる力は知られると  
悪用される可能性が高い…。)

凜は考える。

(今後のことを考えると陛下という見方がいる方が  
私の安全確保のためにもいいんだけど…、さて、この陛下は  
信頼できるような人物なのだろうか?)

…民のことを考え、民のために命を使う…

(…よしッ決めた!!陛下が私を試そうとしているならば私も陛下を試させて貰おうじゃないか!!)

凜は意を決して口を開いた。

「陛下?わたくしガールを助けてはいませんわ、だってわたくしガールを抹消したんですもの。」

凜は無難な抹消を選んだ。

凜は微笑みながらそう言った。

それを見て陛下は眉間にシワをよせた。

「ほう、抹消したとな?

…方法を聞いてもよろしいか?」

そして陛下の目は先ほどとは違って変わって鋭いものになっていた。

「ええ、もちろんですわ

…抹消方法は普通に魔法を使いましたのよ?」



「…魔法？本当に魔法を使ったのか？  
あの場には魔法を使った  
形跡がまったく無かったのだがなあ、」

陛下は圧力をかけるように凜に  
話しかける…。

しかしこれも凜は動じない。

(クスツ、…これもはったりだなッ)

魔法の形跡は残りやすいが、必ず残るということは無い  
まあ大規模な魔法を使ったとなればべつだ…。

「それはおかしいですわね、わたくしは確かに魔法を使いましたの  
に。」

…ああ、もしかしたら魔力が弱かったのかも知れませんわねッ」

凜と陛下は暫く見詰め合う…しかも笑顔で

しかし、2人の周りの空気はとても寒い。  
陛下の家臣たちの顔も真っ青だ…。

そして先に折れたのは陛下だった。

「…フツ、まあ今回のことはいいだろう

明日は早い、姫君ゆっくりと体を休ませよ。」

「…お気遣い感謝いたしますわ ニコッ」

「褒美の事だがもうグレイス家の方に

送ってある。売るなり捨てるなり勝手にしろ ニヤリ」

(チツ、ここに呼んだのは完全に私を試すためだったのかッ

ああッ！腹立たしい。)

これはもう、喧嘩を売られたのも同然だった、

「ええ、お言葉に甘え勝手にさせていただきますわッ」

そして凜はその喧嘩を当たり前に様に買ったのだった。

「…では、陛下今日は楽しかったですわッ

これからも陛下とは長いお付き合いを

させて頂きたいのでこれからもよろしくお願いしますわッ」

そして…失礼しますと一言いい、凜は頭を下げ  
陛下に背を向け扉に歩き出した…。

そして数歩、歩いたとき…物凄い魔力が凜に遅い掛かってきたのだ。  
後ろではエルスとヒースの叫び声がッ

「「危ないッ！！」」

凜はクソッ…と思いながらその魔力に  
似合う防御魔法をしてしまった。

しかも、急いだため、詠唱をしなかった。

無事防いだ凜に陛下は鼻で笑い

「フツ、詠唱無しか、

これだけの魔力があれば形跡が残ると思うがな？」

凜は顔を陛下に向けないで

そのまま無言で、扉に向かい部屋を出ていった。



探り合い（後書き）

次回の更新は8月29日です。

怒り

キーンイツ バタン！！

凜はただならぬ空気をかもし出す。  
目つきは鋭く声は低い。

「早く私を部屋へ案内してくださる？」

「はッはいッ！！」

使者は怯えるように返事をし  
早足で凜を部屋に案内した。

「グッグレイス様のおッお部屋はこっこっでございます。  
でっでは失礼しますッ！！」

「ええ、ご苦労様。」

バタンツ！！と慌しい音を立て  
使者は逃げていった。

……。

凜は完全に使者が離れたのを確認すると

ダンツ！！

壁を殴った、

「チツ あのクソ王子がッ！！」

凜は最後の陛下の言った  
言葉が気に食わない。

「最後の最後で私を試しやがったなッ！！  
しかもあの人をバカにしたような笑みッ！！」

「あ、あッ！！殴りたい、今すぐ！！」

凜は一頻り愚痴を言うと

無駄に派手なベツトにダイブした、

バフッ！

凜はふう……。と息を吐き目を閉じる。

「あれが一国の…王。…気に食わない」

あれがどうしてモテルのか凜には  
理解しがたい現実だった。

相手を油断させ、罨を張り呼び寄せる  
王としては凄いカリスマ性があり  
有能な王といえる。

しかしそれは外野から見れば…だ、



実際自分に降りかかってくるとなると  
とても不愉快なのだ。

「ああ〜悔しい!!」

凜は閉じていた目をバチツと開き  
口角を　　ニイっと上げた。

「フッフッ仮はしっかり返してやるさっ」

\*\*\*\*\*

凜が部屋で仕返しを考えている頃

凜がいなくなった陛下の書斎では  
エルスが酷く怒っていた。

「陛下!!女性になんて事をなさったのですか!!」

陛下はエルスから説教を受けている…が  
その態度は、ダルそうでソファ―に寝っ転がって聞いている。

「…そんなに怒らんでもいいだろう?。」

「陛下、俺も女の子にあんな攻撃するなんて  
どうかしてると思っぜ?。」

流石のヒースも講義する。

「はあ…、我に見方はいないのか?  
困った困った。」

「陛下!…ふざけないで下さい!。」

「あゝ分かった分かった。我が弟はいつから  
こんなに怖くなったのかね?。」

…エルスが睨む。

「はあ、我が彼女に攻撃したのは  
彼女にあんなちけな魔法は通じないと分かっていたからだ。  
我は初めから彼女を傷つける気は無かったのだよ。」

陛下はそう投げやりに話した。

「…それはどうしてですか？」

「なあに、簡単にとさ。」

彼女は我そしてエルスの次に接ぐ魔力の持ち主なのさ」

「…リンが、そんなに魔力を…。」

「ハハツ、そんなに強いんなら

俺達、アイツの護衛なんて要らないんじゃないか？」

「余程のことが怒らない限り

必要ないだろうな。…しかし、

我が弟が女に興味を示すとはな」

「アイツは普通の女とは違うからなあ」

「…そうだろうな、我に齒向かう奴は男でもそういない。」

陛下は楽しそうに笑う。

「我も彼女には興味がある、

どうにかお近づきになれないものか」

そんな事を言う

陛下をヒースは呆れ顔で見る。

「…無理だろ、あんだだけ嫌われることしたんだから」

「ハハツ我を甘く見る出ない、

若い娘ぐらい簡単に落とせるさ」

陛下とヒースの会話を渋い表情をしながら聞いていたエルスだったが、あまりにも陛下が本気そうなので止めにはいった。

「止めて下さい…陛下にはすでに

沢山の愛人がいらっしやるでしょう?」

「クス、それがどうした?

我は強欲の持ち主だぞ、エルス

お前は謙虚すぎだ。ぼやっとしてると我でなくても取られてしまうぞ?」

これは忠告とばかりに

陛下はエルスを脅した…。

そしてエルスは苦虫をかんだような表情となった。

「…リンは誰にも渡しませんよ。」

「まあ、精々頑張れ。」

「…さあお前達もう下がれ明日は忙しくなるぞ」

陛下はそう、優しい声で言った。

「っちよ、お待ちください。最後に一つだけ質問があります。」

「ん、なんだ？」

「陛下は何故リンに当主の証を見せる様に言わなかったのですか？…もともと本物が確認するために呼んだのでしょうか？」

「ああ…、そんなことが。それはなっもう確認済みだったからだ。」

「…それは、どういうことですか？」

「パーティー様のドレスに着替えるときに信頼の置ける侍女に確認させたのさ」

ああなほど、とエルスは思った。

「さあ…もういいだろう？」

「二人とも休みなさい」

陛下は少しあくびをしながら  
そういった。

「はい…では失礼します。」

2人は騎士特有の敬礼をし  
部屋を去った。

キイイ バタン。

「お前が女を手に入れる宣言するなんてな  
驚いたわ」

「…やっと、一緒にいて楽しい女性と巡り会えたんだ  
誰かに渡してたまるものか、」

「まあ、そうだな。しかしリンは見たところ  
恋には疎そうだな…大丈夫か？」

「…振り向かせて見せるさ」

「さあ、俺は明日の連絡にリンのところへ」

行ってくる、お前は先に帰っている」

「はいはい、2人の邪魔はしませんよ。  
あっ、朝までには帰ってこいよ？」

「ッ…バカか！」

「フツじゃあな」

ヒースは帰って行った。

怒り（後書き）

すみません文を増やしました、（\*；人）



## 前夜

23時頃凜の部屋にノックの音が響いた。

コンコン。

「夜遅くすみません、エルスです」

「えッ嘘、エルス！？ヤバイ、どうしよう」

凜は殺気立った気持ちを落ち着かせるために少し前まで、お風呂に入っていたのだ。

おかげで、気持ちは落ち着かせることが出来たが、今の凜の格好はともじやないが、人と会うのはどうかと思うものだ。

「あー、髪の毛はまだ湿ってるし、しかも私ナイトドレスだよ」

凜の着ているナイトドレスは城で用意されたもので  
沢山種類があつたが、みんな何故かエロイデザインだった。

「誰だよこんな用意させた奴…！」

確か今回の祭は全て陛下が仕切っていたはずだ。

「ッ…お前かああああ…！」

「あー着替えるのも正直面倒だ。

…エルスだし、布で体を隠せばいいか、」

凜はそついいいベットから  
布を取り頭から覆った。

「よし、」

凜はドアを開けた。

キィィ。

「やあ、エル…ッてうええ！」

凜は一瞬エルの驚いてる表情が確認できたと思ったが、すぐに反転させられて、部屋の中に押し込まれる形となった。

ボタン…！

「あつ貴女はッ

何で格好をしているのですか…！」

「あはは、やっぱり駄目だった？」

「当たり前です…！」

俺だからよかったもの、他の男だったら食われてますよ…！」

エルスは凜の両肩をがっしりと掴み  
凄いい勢いで説教をする。

「…ッ、食われるって  
そりゃ無いでしょ。」

「貴女は男を分かっていないんです、  
扉を開けた瞬間、そんな色っぽい格好をしてるなんて  
誘っているようにしか見えませんよ!!」

凜はそういわれ改めて自分を見下ろした  
…まるでその格好は幽霊。

「…私にはむしろ不気味に見えるんだけど。」

うっん、と悩む凜にエルスは頭を抱えた、  
(リンは、天然なのか)

「はあ、まあ今回は俺も遅い時間に来たのも悪かったですし  
説教はここまでにしましょう。」

「…はい、」

二人はソファ―に座った。

「明日の予定ですが、凧は馬車と単馬どちらが良いですか？」

「ああ、それはもちろん単馬で」

「…そう言うと思いましたが本当に大丈夫ですか？道のりは長いですよ？」

「大丈夫、大丈夫　ちゃんと対策はあるから」

フツツと凧は笑う。

「？対策ですか…。」

「実はねえ…自分の馬をつれて着てるの！」

あの子が要れば大丈夫！！と凧は胸を張る。

「それは本当ですか？…クスツ、俺初めて聞きましたよ自分の馬を連れて祭に参加するお嬢様なんて」

エルスは苦笑いをした。

「だって、馬車は楽でいいけど  
いざと言うとき動きにくいからねえ、」

「…それにその馬は私の友達なの  
あつ、そういえばエルスもあつたことあるよ？」

「ああ、シルフッドであつたあの綺麗な馬ですが、  
あの馬は、貴女に忠実で驚きましたよ…、」

エルスは手綱を引いても  
一向に自分の言うことを聞かない馬を思い出した。

凜の命令だけを聞き  
実行し、まるで人間の言葉が分かっているかの様に  
動く賢い馬…実はエルスはそのような馬を1頭知っているのだが、

果たしてその馬も  
彼の知っている馬と同種なのだろうか？・

「確か名前はライトでしたよね？  
…今は何処に？」

「ん？明日の通り道にある牧場に預けてあるよ。」

「…そうですね、では明日は馬を取りに行くため少し早めにここを出ましようか。」

「うんそうだね」

「では…7時にこの部屋に向かえに行きますのでそれまでに準備して待っていてください」

「…わかった。」

そう最後に伝えると

エルスは立ち上がり出口へと向かった。

「…ああ見送りはいいですよ  
貴女のそんな可愛い姿誰にも  
見せたくないですからね ニッコッ」

「クッス エルスってお世辞が上手だね」

エルスは本気にされていないことを  
残念に思い苦笑した。

「…お世辞ではないんですけどね」ボソッ

「えッ？何か言った？」

「いえ、ではお休みなさい」

「うん、お休み」

二人はそういい  
分かれた…。



花に囲まれて、

カーテンから眩しく朝日が入り込む…。

「ふぁあツと！ 朝かぁ」

凜はノソノソとベッドから起き上がると  
ひとまず洗面所で身支度を済ませる。

そしてクローゼットを開き  
服を選ぶ…。

「うーん、流石に種類は少ないなあ」

ドレスは多くあるものの、  
単馬に乗る用のズボン式の服が少ないのだ。

「まあ、馬を乗りこなせるお嬢様なんて  
そう、いなかぁ…。」

凜は苦笑しながら

ズボン式の中でも、動きやすく  
デザインの可愛いものを選んだ。

ブーツに黒のパンツ、

上は白のブラウスに黒のリボンがついている。

そして最後にポンチョ式の黒のポンチョを被った。

「よしッ完璧!!!」

時計を見ると6時40分

「…時間あるし、お茶でも飲むかぁ」

そして凧はバルコニーへ移り

モーニングティーを優雅に口に含んだ。

「ん〜、街を見渡すのも嫌いじゃないけど  
やっぱり、リーフレアの森がみたなぁ」

うーん、と凧は木製のビーチベットの様な  
上で背伸びをする。

朝の清々しい風が心地よく凧の頬を撫でた。

「あーヤバイ、眠くなってきた。  
ふあゝあッ」

凜の瞼はしだいに重くなり…ついに眠ってしまった。

…凜はこの時、外で寝たことを後悔する  
ことなるうとは思ひもしなかった。  
…

凜が寝た後すぐさま、動物達が騒ぎ始めたのだ。

《あつあれは、森の主様じゃない？》

《まあ、本当だわツ主様が王宮に来ていたなんて》

鳥達が空から凜を見つけた。

そして、凜の近くまで降りてきた…。

《クスッ 可愛い寝顔だわ》

《きつとお花とかで飾ったらもつと可愛いわッ》

《まあ！それいいアイディアだわッ》

鳥はそう言つと、再び飛び去つて行つた。

いつの間にか凜がいるという噂が動物達の間にも広まり動物も、花の量も凄いものとなつた。

そして…数分後、すやすやと眠る凜の周りは  
白い花だらけで、まるで棺おけに入っているかのようだった。

その姿を見て集まつた多くの動物達は  
わが子を見守るようなそんな優しい顔で見っていた。

《こんな若いのによく頑張つてるよね。》

《うん、うん、でもやっぱり未熟なところもあるよねえ》

《ああ、だから俺達がしっかり見守つてやらないとなッ》

動物達がなんやかんやと

話していると部屋に誰かがノックする音が響いた。

《ヤバイ!!!人間だ。皆行くぞ!!!》

。

コンコンッ

「リン?んー、反応ないな?」

「アイツのことだから、まだ寝てたりしてなッ」

7時となった今ドアをノックしていたのは  
エルスとヒースだった。

「あー、もうこのままでもしょうがなし  
勝手に入っちまおうぜ?」

「気が引けるが、しかたないな」

「…おいそのメイドさん  
ちつと、ここ鍵外してくれないか？」

ヒースは近くにいたメイドを呼び  
凜の部屋の鍵を開けさせた。

ガチャガチャ…ガツ！

「はい、鍵は外れました。

…では失礼します」

「あゝ、どうもッ」

キィィ

二人は凜の部屋へ足を踏み入れた。

「おゝい、リィンどこだ？」

あれッベットにはいねえぜッ」

「…本当だな」

エルスは部屋を見渡す

…するとバルコニーのカーテンが風でゆれているのに気がついた。

「ヒース、たぶんリンはバルコニーにいる」

2人はバルコニーへと向かった。

そして少し離れたところにリンの姿を確認できた。

…が、2人は凜の姿をみて息をのんだ。

「こっこれはどういうことだ？」

2人が見た凜の姿は白い花に囲まれて安らかに眠る凜の姿だった。

「…これ、まさか自分でやったとか無いよな？」

「…それは流石にないだろ、」

エルスはそう答えると  
リンに近づき優しく頬を撫でた。

凜の肌は白くとても触り心地がよい。  
エルスの頬は自然と緩む…。

「うっわ、エロー!」

「…だまれッ」

エルスはヒースを睨んだ後  
ふと凜の服へと目を移した…。

(…鳥の羽?)

足元にも良く見ると落ちていた。

「クスッ、ヒース今回の旅は大変かも知れないぞ?」

エルスは手に鳥の羽を掴み  
ヒースに見せ付けた。

「あ?…まさかッ!」



「ああ おそらくこの花は鳥、  
いや動物達の仕業だろう…この当主様は  
愛されてるんだな」

「うわぁ…マジかよ、

ここでこんな状態なのに、森行ったらどうなるんだ？」

「さあな？…まあいいじゃないか、可愛いんだから」

「…お前、口元緩んでるぞ！」

エルスが咳払いをする。

「さて、そろそろお姫様を起こしますか？」

エルスはそういい  
凜の肩をゆすった…。

「リン…、リン朝ですよ？」

朝（前書き）

長くなったので切ります。

朝

ユサ、ユサ

(うん、何か揺れてる気がする)

「…うん、ん、ん、」

凜がそう言うと

隣からクスリと笑う声が…。

「凜、朝ですよ？起きてください」

「んっ…んっ」

(何か心地いい音がするなあ…・)

凜の脳はしだいに  
起き始める…。

「リン、起きないとキスしますよ？」

(…ん？、声？この声ってエルス?!)

凜は驚き ガバツ!!と起き上がった。

「…えツ？、…ええ!!」

凜が勢いよく起き上がると  
花が豪華に空を舞った…。

凜はそれに驚き

目を見開いたが…さらに驚いたことが、

「クスッ、お寝坊さんですね…チュッ」

凜は横を向いたと思つたら

いきなりエルスに額にキスをされたのだ。

「／／なッ…な、なああッ!!」

凜は慌てて顔を赤くし額を手で押さえた。

「フフッ…お寝坊さんへのプレゼントです  
…もう一つ要りますか？ ニコッ」

「いついよいよ！」

「つて、ああ〜！！私二度寝したッ」

即答されたエルスは  
少し残念そうだった。

「つてかこの花！！」

「私は死人か！！」

凜がベットの周りを見渡すと  
それは綺麗な花が飾ってあった。

凜はすぐにこれが誰の仕業か分かった。  
なんせこれは、日常茶飯事なのだから。

「…はあ、まさか王宮では

ならないだろうと思ってたのに、

結局これかあ…。」

凜は頭を抱えた。

「えッ？リンはこうゆうことは

よくあるんですか？」

「うん、私が少しでも外に出れば  
こんな感じ…だから、今回の旅でも迷惑掛けらと思う」

「…迷惑だなんて、俺はリンと要るだけで楽しいから  
そんなこと思わないよ ニコッ」

暫く凜とエルスがいちゃいちゃしているのを  
見ていたヒースだが流石に我慢できなくなった。

ンッ、ウン!!

「あーちよつとお二人さん  
いいところ邪魔して悪いんだがもうそろそろ  
出発しないか？」

「えッ？いつからヒースいたの？」

「初めっからいたわアホッ!!  
…それとエルス睨むのやめろ!!」

……こつして3人はようやく  
王宮を出るのであった。

## 旅立ち（前書き）

書き忘れがあったため「タイトル（怒り）」に文を増やしました。  
読まなくても支障はさほどありません。

誠に申し訳ありませんでした。



## 旅立ち

\*\*\*\*\*

凜達は昨日の中庭に来ている。  
青空に緑の芝生が良く映える…。

中庭には、馬車や単馬がずらりと並んでいた。  
馬の息使いがいたるところで  
響いている…。

「うわぁ 凄い数だね」

「ええ、今日は城にいる馬のほとんどが  
外に出ることになっていますからね」

ふくと凜は  
興味深そうに馬を見た。

「ねえ エルス達の馬は何処にいるの？」

「ああ、俺達の馬はあそこでもう  
待ってるぜッ…明るい茶毛が俺の馬だ  
どうだッ…カッコいいだろ…！」

凜は指を指されたほうへ視線をやった

「わ〜！！2頭とも毛並み綺麗」

凜はそういいながら  
馬に駆け寄って行った…。

「あつこら リン！！」

危ないから走らないで下さい！」

エルスが叫ぶが凜はまったく  
気にしていないようだった。

「ハンツ、お前は過保護なんだよ、」

「…五月蠅い」

2人が凜の後ろで揉めている頃

…凜はもう馬のところに着き  
馬に近づき

首を撫で、よろしくねえ と挨拶をしていた。

すると

ヒースの馬の方は挨拶を返すように ブルルッと

鳴いた。これが普通だが、エルスの馬は違った。

《クスツ可愛い子ね、こちらこそよろしく》

凜は驚いた。

「えッもしかして貴女も魔力の強い馬なんですか？」

《ええ、そうよ》

「じゃあ エルスと会話できるの？」

《出来るわ、…でも彼には貴女みたい  
いろんな動物と話せるわけではないけどね》

…そうなんだあと凜は呟いた。

「あっそうだ、名前教えてくれる？」

《もちろんよ、私の名は（サラ）よ  
そして隣が、（マルク）》

「サラにマルクねッ、私の名前はリン・グレイス。  
よろしくね！！」

《…グレイス、じゃあ貴女が森の主様なのね  
こんな可愛い子が主様なんて嬉しいわッ》

「…そんな期待しないでね？」

《クスツ弱気ね、でも威張られるより  
何倍もいいわね、私も応援するから頑張りなさい、》

「…はい。」

暫くすると後ろからようやく  
エルス達が来た…。

「凜、お前以外に足速いなッ」

「クスツ 二人は遅かったね？」

「この馬鹿が、だらだらと  
走っていたんですよ、」

エルスはそう毒づいた。  
その姿を見て凜はクスリと笑った…。

「さてと そろそろ出発しないとね。  
ん〜ヒースとは乗りたくなしっ」

「おいッそれはどっいう意味だッ!？」

「ごちゃごちゃヒースが喋るが

気にしない。

凜はサラの首を撫でながら話かけた…。

「サラ、私を乗せてくれる？」

《ええ、喜んで》

「クスッ　ありがとう」

この会話を聞いてエルスは目を見開いた…。

「なっ何故！リン、もしかして貴女は動物と話す能力があるんですか？！」

驚くエルスを凜はクスリと笑い

「うん、皆には秘密ね？」

と言い放った…。

「…ッ、貴女には驚かされることばかりです。」

「フフッ、謎が多いほうが楽しいでしょ？」

凜はそう言い…サラに乗ろうと足を掛けた。

「よっと…ってわぁあー!!」

「何さらっと自分が手綱握ろうとしてるんですか？  
貴女は私の前に乗って下さい。」

エルスは凜の両脇に手を入れ持ち上げるような  
格好をしている。

「わぁあぁっ!!分かったから  
エルス下ろして〜!!」

凜は必死にもがき  
ようやくエルスの手から開放された。

そして、エルスは流れるように  
馬に乗った…そして、

「さあ リン」

かっこよく凜に手を差し出すのだった。

凜は恥ずかしい気持ちを押し殺し  
エルスの手を掴んだ。

グイッ

体がふわりと持ち上げられ  
気がつくくとエルスの腕の中にいた。

(／／／ちっ近い！！)

「さあ、しっかりと

捕まっていてくださいね？ ニッコッ」

「ヒース、準備はいいか？」

「はいはい、いつでもどうぞ、」

ヒースは何故だか投げやりだった。

「じゃあ 行きますよ…ハッ！」

エルの掛け声と共に

2頭の馬は勢いよく走り出した…。



## 騙される

パカラッ・パカッパカラッ…。

野道に馬が地面を蹴り上げる音が響く…。

…そして凜の鼓動もせわしなく響いている。

(…ノノノう、ううッ…何でこんなに近いの？恥ずかしいッ！！！)

凜は未だにエルスにしつかりと

抱きしめられている。

身をよじり何とかエルスと離れようとするが  
グイッと腰を捕まれさらに密着してしまう…悪循環。

ギユッ。

「あ、あの…エルス？」

凜はたまらず声を掛ける

…すると彼は嬉しそうに凜に微笑みかける。

「はい、何でしょう？」「ニコッ」

(うっ、何だこのキラキラした笑顔は!!！)

「…ッ、あのね もう少し離れて欲しいのだけど…、」

「フフッ 駄目ですよ、危ないじゃ無いですか」

エルスはまるで小さな子供に言い聞かせるように優しく言った…。

「いや、少し離れてくれるだけでいいから全然危なくないと思うよ?」

「駄目です」

「本当にちょっとでいいから…ね?」

凜は駄々をこねる子供に言い聞かせるようにエルスに話しかけた…しかし、当の本人から反応はなく

「……。」

何故だかエルスの要る後ろから  
寒気が流れて来る…。

(あ、あれ？…静かになった？)

凜はエルスの様子のおかしさに気づく…。

そして凜は恐る恐るエルスの  
いるはずの後ろに振り返った。

凜は息を呑む。

「…!?!」

「エ、エルスどうしたの!?!」

凜が後ろへと振り返ると

そこには…首をガクンツ と下ろし  
うつむいているエルスの姿が…。

表情を見ようにも前髪で隠れ確認することは出来ない  
…だが、落ち込んでいるのは明確だった。

「…リンはそんなに俺が嫌いなんですか？」

声を落としたエルスが話す…。  
このただ事じゃない雰囲気には凍はうるたえる。

「…ッそつそんなことないよー!」

「では…何故、俺を遠ざけようとするんですか…、」

「そつ…それはあ、」

凜は困る。

(ッ…私にくエルスから伝わる体温が  
恥ずかしかつたらなの!>とでも言えと!?!…無理無理無理!  
!)

そうして、頭の中で困惑していると  
またエルスの暗い声が…。

「黙ってしまったって…やはり私のことが嫌いなのですね、」  
エルスはグスンッと鼻をすすする。

(えッ泣いてる!?!…ヤバイヤバイ)

「ちっ違う!!エルスのことを嫌いだ何て思ったことはないよー!」

「…それは本当ですか？」

「う、うん！」

「では…俺の事が好きですか？」

(…それは友人としてだよね)

凜はそう思い込みすんなりと答える。

「うんっ…大好きだよ」

「…では、近づいても良いんですね。」

「もちろんだよ!!」

焦っていた凜はいろんなことを口走っていることに気がついていない…。

…。

そんな凜をヒースは片手で頭を抑え…、

「リン…畏だ。」

と息を吐くように言った。

凜は意味が分からず首をかしげた。

「えッ？何がッ…ってわあ!!」

そして次の瞬間!!

ギョ〜ッ！！

「フフツ リン俺も大好きですよ。  
もう離しませんからっ」

凜はエルスから強い包容が…。

（えッ？…何この笑顔、）

エルスの表情はさっきと打って変って  
さわやかだった…まるで、演技の様に。

（しかも、さっきより近くなって…ってか、  
もう抱きしめられてるんですけど…！！）

「えつと〜、エルスさっき泣いてなかった？」

「え、何のことです？」

エルスはニコニコと  
リンを見る。

「えっ？…はあ？」

（…何だこの、さっきの出来事は何も  
無かったかのような雰囲気は…！！）

凜はパニックになりながらも考える。

(…そ、そういえばさっきヒースが何か言っていたような、  
確か…《罨》とか、……。罨!!)

(嘘嘘嘘!!…罨?!今までの芝居が罨だって言うの?  
…私が逃げられないように…の)

凜はもう一度エルスの表情を見た。  
そこには、なんとも嬉しそうな…顔。

(なっなんて、…黒いんだああああ!)

凜は…どっと、疲れた気分になった。それはもう  
包容とかどうでもいいぐらいに。

凜のその姿を見て流石に可愛そうになったのか、  
ヒースが励ましの言葉と…助け舟を出した。

「…リン、気力をしっかり持て、

あと少しだから、…おッほら、もう見えたぞ!」

「えッ!!本当!?!」

その言葉を聞いて凜は

凄く元気になった…そして、エルスは  
少し残念そうにした。

野道の先には野原があり、そこに  
木造のファームがポツン、と存在していた…。



## 騙される(後書き)

最近悩みが…、エルスのお陰で話が進みません、  
次こそ、ライトとの対面です!!

## 漆黒の馬

牧場の前に着き

エルスたちは馬を下りる…。

「…、リン何故ヒースの後ろに隠れるのですか？」

エルスはヒースを睨みながら話す。

「い・いやぁ…別に隠れてなんかないよ？」

凜はエルスと一緒にいるのに身の危険を感じ馬を離れすぐにヒースの後ろへ隠れた。

「…ああ！ほらっ、あっあそこに人が…。」

凜はそっぴい逃げるように一足先に

牧場主とおもわれる人へと近づいていった。

。

残された二人は凜を目で追っていた。

「おいつ、俺を睨むな！  
自業自得だろ？」

「……。」

「はあー、お前そんな執着心強かったっけ？」

「嫌、でも…リンを見ていると止まらないんだ。  
リンだけは心の底から欲しいと思うんだ」

思いつめたような表情をしているエルスを見て  
ヒースは頭を抱えた。

（はあ…、こう言うタイプって面倒なんだよなあ、  
これじゃあ、リンがエルスから離れたら  
ヤバイ事になりそうだ…、はあ。）

「はあ、好きな女を手に入れたいと思うのは  
悪いことじゃねーが、あまりガツクと嫌われるぞ？」

「…分かってる、」

「そうか…。」

暫く二人は会話を終えると  
凜の元へ足を運ばせた…。

「すみません！」

凜はこの持ち主と思われる  
おじさんに声をかけた…。

「はい、はい、ワシになにか用かえ？」

おじさんは背が低くて  
ほっぺがぷっくりとして愛らしい姿をしていた。

「あーっと、今日馬を引きとる  
ことになっているものですけど…。」

「ああつ、あの綺麗な馬の持ち主かえ？」

「…たぶんそうです。」

「そうかえ、あの馬が嬢ちゃんとはなあ、」

おじさんは ふむふむ、と嬉しそうに  
アゴ鬚をなでる。

「えつとお、御代の方は…？」

「ああ、それなら要らんよっ 引き受ける時に  
十分すぎるほど貰ったからなあ…、」

「馬はもう準備できてるから  
後は呼ぶだけじゃっ…はて、さっきは外にいたが、  
今は何処にいるのか…。」

「ちよいと待ってておくれ…今連れ戻してくるから。」

おじさんは はて、と首を傾げながら  
農場の柵をくぐるうとす。

「あ　　っ　おじさん、私が呼ぶから大丈夫ですよ？」

「おおっ　本当かえ。  
信頼関係がいいんだねえ」

「うん！！」

凜がそう元気に返事をする  
後ろの方から、クスリと笑い声がした。

凜は後に振り向く…。

「リンの返事は元気が良くていいですね　ニコッ」

「確かになあ…でも、お嬢様としたら駄目駄目だなあ？」

どうやらエルスとヒースは  
凜に追いついたようだ。

「／／／エツエルス…いつの間に!？」

凜は先ほどのエルスの抱きつき事件を  
思い出しつつもってしまった。

「クスッ そんなに怯えなくても何もしませんよ。

…そうですねえ、貴女が御代を聞いてる辺りからですかね、」

「ええッ！ そんな前からいるなら声をかけて  
くれたらよかったのに!!！」

「フツたまには ちょっと離れたところから  
凜を見たいと思ったんですよ。」

リンは突然口説かれて  
固まってしまった。

「…／／／?!！」

そんなリンを可哀想に思ったのか  
ヒースが助け舟を出した。

「おい、リンその変態は気にしないでいいぞ？  
それよりお前早く自分の馬つれてこい、」

「えッ…ああ、うん!!」

リンは顔を真っ赤にして固まっていたが  
ヒースのお陰で気を取り戻すことができた。

もちろんヒースは今の発言の所為で  
おもっいつきリエルスに睨まれることとなった。

……

リンは草原を大きく囲ってある柵に近づき  
大きく息を吸った…。

すうッ!!

そして、大きな声で

「ライトおおおおおおお!!」

と叫んだ。

近くにいたヒースは眉をひそめた。

「っ!!…うるさッ!! お前なあ



馬連れて来いと言ったが、呼んでくるわけ無いだろ!？」

「ッなにその人を馬鹿にしたような目はッ!!」

「ライトは頭がいいから呼べば来るんだよ!!」

「ヒース、リンの言ってることは本当ですよ、  
…ほら。」

そうエルスが言うとリンたちの頭上が

ガッ!!

と言う音と共に一瞬陰った。

そして後ろを振り返ると

そこには綺麗な漆黒の馬がいた。

《はぁ…まったく貴女は、そんな大きな  
声出さなくとも聞こえますよッ》

「ライトーッ!!」

凜は久しぶりに会うライトに  
感動し、勢いよく首へ抱きついた。

その様子を見ていて  
ヒースは マジかよ…、と驚いた。

「クスッ リンの馬は俺の同じで  
魔獣なんだよ、普通の馬じゃないんだ、」

そっぴい捨てエルスは先にリンの元へと  
足を運んだ。

ヒースはエルスの背中を見ながら  
なんともいえない敗北感を感じていた。

## 森の中へ

\*\*\*\*\*

凜達はライトと合流後少し急ぎ足で教会へ向かった…。そして現在は…。

凜達の目の前には壮大に広がる森たちが出迎えていた。そしてただ一っだけ綺麗に整備された道がズーっと見えない先まで続いていた…。この先は教会のはずだ。

「…、リン本当に俺と一緒にじゃなくて大丈夫ですか？確かにこの森は比較的綺麗に整備されていますが危険が無いとはいえませんか？」

相変わらず心配性？なエルスはリンを自分の馬に乗せようとする。

それを凜は引きつった笑顔をしながら  
やんわりと断った。

(… / / もう、あんな疲れることなんてするもんかッ!!)

「そんな心配しなくても大丈夫だよッ！  
私を誰だと思ってるの？グレイス家の当主だよ!!」

凜はどうだッ!!と胸を張って言う。  
するとヒースが頭を掻き、渋い顔をしながら…。

「分かってはいるんだがなあ、  
…そうとは全然見えねんだよなあッ」

「…ふうん、そんなに信じられない？  
何なら試しにこの森から出れない様にして  
差し上げましょうか ニコッ？」

凜がそう黒い笑みを見せながら言い放つと  
森の木々がなんとなくザワついた…。

身の危険を感じたのかエルスは黙り

顔を青くさせた…。

「いっいや、さっきのは俺の気のせいだったわッ!!」

「そう？遠慮は全然しないでいいのよ？」

凜はお嬢様言葉でさらにプレッシャーをかける…どうやら凜は黒くなる時自然とお嬢様言葉になるようだ。

《凜様その馬鹿はほっというて早く目的地へと向かったほうがいいのでは？》

凜がヒースをからかい遊んでいるとレインに似ているライトが止めに入った。

（ん、そうだったね…森では足止めが多そうだし早く行かないと日が暮れてしまうね。）

今は凜とライトは体同士がくっ付いているため

声に出さなくても意志通達ができるのだ。

「あつと、そんなことより

早く森進まないでだったね。2人にはこれから  
凄く迷惑をかけると思うけど我慢してね？」

凜はこれから来るであろう森の住人達に備え  
エルス達に忠告を入れた。

「クスツ、凜のことで迷惑なんてものは  
ありませんよ、気にしないで下さい。」

「フツ。いまさら何言ってるんだよッ」

「二人ともありがとうじゃあこれから森に入るよ、  
あッ、二人とも森に入ったら何でもかんでも殺しちゃ駄目だからね  
森の住人を殺したりでもしたら、  
私は森の住人に合わせる顔がなくなってしまうから  
くれぐれも気を付けるようにしてね」

「たとえ私が悪しき魔物に襲われても1匹や2匹ぐらいは  
余裕に倒せるから心配しなくても大丈夫だから」

…落ち着いて対応してね？と凜は2人に言った。

「…流石ですね、ですが我々も騎士のプライドがありますので  
しっかりと護衛させていただきますよ ニッコッ」

「フフッ頼りにしてるよ、じゃあ 出発〜!!」

凜たちは馬が土を蹴り上げる音と共に  
森へと足を入れた…。

## 邪悪な気（前書き）

暴力的表現があります注意してください。



## 邪悪な気

パカッパカカ…パカ…

森に3頭の馬のヒツメの音が響き渡る。

「はぁー。お前凄いい荷物増えたよなあ…。」

「…うん、まあ予想はしてたんだけど…これは  
予想を遥かにこえたね…。」

今の凜の姿は道の途中で動物達から貰った  
花の冠を被り、両腕には果実や花が一杯に入ったかごを  
ぶら下げていた。

…カゴも動物達がプレゼントしてくれたものだ。

「クスツ…でも凄くお似合いですよ。」

…ああでもこれじゃあ動きにくいですね  
リン俺が代わりにそれ持ちますよ?。」

「…うんそうだよね」

…じゃあ お言葉に甘えようかな。」

凜は走りながらエルスに近づきカゴを一つだけ手渡した。

「おや、もう一つも預かりますよ？」

「んーせっかく私にくれたんだし

一つぐらい持ってないと悪い気がしてね…、」

「なるほど…分かりました。でも

つらくなったらいつでも言ってくださいね。」

「うんありがとう。」

凜がそう柔らかく笑っていると突然

ライトが速度を落とし、止まった…。

なんだか不穏な空気が漂う…。

2人もそれにあわせて止まる。

「…??？ どうしたの？ライト。」

《…なにか、邪悪な気をまとったものがこちらに向かってきます。》

凜はそれを聞き急いでその気を自分でも探した。

(…：…邪悪な気、…この魔力はっ!!！)

「ライト 左に走って!!！」

《はい!!！》

ライトは綺麗に整備された道を外れ  
森の中へ飛び込んだ。

「…リンッ!?!」

リンのいきなりの行動に  
2人は驚く…。

リンはその邪悪な気…いや魔力に身に覚えがあった。

(…：…確信は無いけど、きっと…)

(この魔力の持ち主の狙いは私だ。)

そして凜の思ったとおり  
その気の持ち主は2人を無視し  
凜の方へやってくる…。

「ライト二人を撒いてどこか広い場所に私を下ろして!!  
…私を下ろしたらライトは出来るだけ私から離れてっ」

《分かりましたっ…しかしリン様を一人にするわけには、》

「気持ちは嬉しいけど足手まといになる、  
悪いけど離れててっ」

《…しょうがないですね、気を付けてください。  
まもなく、広い場所に着きます!!》

サッ!!

凜は広い場所に着くと走り続けるライトから  
さっと飛び降りた…。

凜は地面に着くとすぐに近くに落ちていた木の棒を広い自分の前に魔方陣を書いた。

そしてそこにおびき寄せするように少し離れて待つ…。

凜は念には念を入れ自分の周りにも結界を張った。

(これでよしッ)

凜は集中し、目を閉じ待つ…。

森はざわめく…そしてッ

ガッ!!

凜は確かな手ごたえを感じ

目をゆっくりと開ける…。

「あら、ずいぶん悪い顔をしているワンちゃんねえ？」

凜の目の前には術にはまって  
暴れている大きな黒い犬が…。

さっき書いた魔方陣は束縛するものだった。

犬は大きな口から鋭い歯をチラつかせ  
涎を垂らす…。

ガウウツ…バウツ…グルル…！！

大きな犬は体の周りに  
紫色のモヤモヤしたものをまとい…  
只ならぬ雰囲気をかもし出していた。

「クスツ暴れたってそう簡単には出れないわよ？  
……わたくし聞きたいことがありますの、」

凜はニコニコしながら犬を見る。

「彼方のご主人は誰？私その人に貸しがあるのですが、」

凜は魔力を強め

犬の束縛の力を強めた…。

ぐぐうツ…と犬は苦しそうに鳴く。

《…主八怒ツテイル、…オ前ノセイデ！！・ユルサナイ》

「…ふうん、それは私がシルフッドで邪魔したからかしら？」

そう、凜の感じた魔力はガーラを束縛していた  
魔術と同じものだったのだ。

《ソウダ！！…オ前ノセイダツ！！…殺ス、殺ス、殺スツ！！！！》

凜が犬と会話していると

凄いい勢いでエルス達が私の元に駆け寄ってきた。

「「凜ッ!」!」

しかしここで邪魔されるわけには行かない。

「手は出さないでッ!」!

凜の必死さが伝わったのか2人は  
戦闘状態ではあるが犬から離れた。

それを見て凜は犬へまた話しかけた。

「残念ながら私は殺せないわよ?…さあ貴方の主人を教えなさい。  
…言わないとどんどん苦しくするわよ?」

《誰が言ウカツ!…グワアアツ…ツコノ クソ小娘ガツ!》

凜はさらに魔力を強めながら話す。

「はあゝ、もういいわ。」

凜は目を閉じ深呼吸すると



いるはずのない相手へと言葉投げた。

「えーと、このワンちゃんの飼い主さん  
この間は大変お世話になりました。私彼方  
にお礼がしたいんですけど何時会えますかね？」

凜はこの犬を通して  
飼い主が自分を見ていると読んだのだ。

…しかし、返事は無い。

「はぁ…返事はなしですか。じゃあ最後に一つ  
私は森を守る者、彼方が森に近づく以上私は彼方を排除します、  
…これは忠告ですよ？ あああと、  
私を殺すのにこんな雑魚。馬鹿にしすぎじゃないですか？  
次からはもつとましな者を使うことをお勧めしますよ ニッコ」

凜は最後にそう言い捨てると  
一気に魔力を強め…

グシャッ！！

押しつぶした。

犬は紫の炎を激しくまとう

《グワアアアッー！！クソ、クソ、クソ、クソ》

覚エトケ小娘ッ 主人ハ絶対ニ才前ヲ殺スカラナッ！！！！》

犬はそう言うと体はボロボロと崩れ

灰になってしまった。

## 信頼

犬が消えたあと森は  
サワサワと心地よい風の音だけが響き静かだった。

凜は犬を倒したがいいが、少し問題に陥っていた。

(…きつとあの犬は魔物なんだろうな、てかどうしよう、  
たぶん私と犬の会話聞いちゃってるよなあ…)

(てことはシルフッドで何か騒動を起こしたことは  
感づいているだろうな…はあ、  
陛下の前で嘘を突き通したのに全部水の泡じゃないかッ)

(んー悩んでいてもしょうがないし、とりあえず  
いける所まで惚けてみようかな、うん、…そうしよう！)

…。

凜は一息着く。そして間拔けな一言。

「…ふう、あれが魔物かあ、」

すかさずヒースが突っ込みを入れた。

「って知らないでお前戦ってたのかよ!!」

「いやあ、魔力は禍々しいしのは

分かってただけどねえ…。

まさか自分を狙ってくるとは思わなかったよ」

凜はへらへら笑う。

「リン嘘はいけませんよ、貴女は初めからその禍々しいものが

自分目当てだと知っておいて私達をまいたのでしょっつ。」

流石頭の良いエルス  
すぐに、ばれてしまった。

何か誤魔化そうとも  
エルスの目が確信しているので無理だ。

「え〜と……はい、」

「感心しませんね、いったい何のために  
我々がいるのでしょうか？…ね、リン」

エルスはニコニコしているものの  
まどつてるオーラはとても冷たい。

「…それは、私を…守るため…です…。」

「そうです、よく出来ました ニッコッ」

ゾクッ！！

（えっ 笑顔が…怖いッ！！）

「う、ごめんなさいっ」

凜はエルスが怖すぎて  
もう白状することにした。

「はあ、心配したんですよ？  
いきなり道を外れたと思ったら  
それを追うように魔物が自分達の  
目の前を通り過ぎて行っただからです。」

…ごめんなさいと  
凜は小さく呟く。

「話から推測するとリンはシルフッドでも  
あの犬とあっていますね？」

「…うん、あつても正確には魔力にだけど」

「それはどういう意味ですか？」

「私があ魔力を感じたのはシルフッドのガーラに会った時、

その時ガーラは無理やり川沿いに縛られてたの」

「…では、その縛っていた魔力が犬の魔力だったのですね」

「うん、そうなの。…今回はたぶん

何かの計画を邪魔した私への仕返し、だったんだと思う」

「…俺もそう思います。ここだけの話ですが

怪しい組織が国を滅ぼそうと企んでいるようなのです。

…おそらく、リンが邪魔した計画はその企みの一つだったのでは  
しょう。」

「また面倒なことを考える奴がいたもんだね。」

…はい、とエルスが返事をし二人はしみじみとした。

「ちょっとまで、何しみじみしてるんだよ！

今の問題はそこじゃないだろ？」

凜はそうヒースに言われ

首をかしげた…。

「…？」

「首かしげんじゃねーよ、  
お前のことだろ！」

「ああ、そうですねいつの間にか話が脱線してしまいました」

凜は2人の言っていることが分からず  
未だに首をかしげている。

「はあ、まだ分からないのかよ。

あのなあ お前の話から推測するとやっぱり  
お前はガーラを助けたことになるんだよ」

「……！」

凜は自分の犯したミスで  
背中に生理的な汗をかく。

(… ああ、なんかヤバイ感じ?)

「…しかし、シルフッドでは魔法で消した痕跡はなかった。  
リン、貴女は陛下に嘘をつきましたね？」



(うわぁ…どうしよう、完全にヤバイ状況じゃん今。)

「…い、嫌だなあ私が陛下に嘘だなんて恐れ多い、あの時も言ったけど、きっと私の魔力が弱すぎて痕跡が残らなかったただだよ」

「それが本当ならリンは凄い人物ですよ。」

「…?」

「俺がリンの代わりにガーラを呪縛から放つだけでもおそらく多くの魔力を使い痕跡も多く残ります。それを弱い魔力で対処したなんて凄いです」

リンがガーラを助けた痕跡が残らなかったのはリンの植物を従わせる能力のおかげだが、その他にも理由はあった。

凜はあの時普通ではありえない、(呪縛の開放と地の再生)を一つの魔方陣に書き込んだ、そのためなんらかの力が働き偶然にも力が打ち消しあうかたちとなり、痕跡が残らなかったのだ。

「…。」

…もう、誤魔化すのに無理を感じた凜は  
蛇に睨まれたかえるのような心情に陥っていた。

（あゝっ私はバカかッ！！呪縛のことを言わなければ  
ばれなかったかも知れないのにッ）

「リンもう観念しなさい。」

「ッ…はい」

（はぁ…観念しちゃったよ、ってことは2人に私が  
普通じゃありえない植物を従わせる能力があることを  
教えないといけないことになるのか…。）

この凜の力が悪用されれば大変なことになる  
…でも、

（…でも、二人なら言っても問題ないか、）

2人と過ごした時間はほんのわずかだけど  
2人は凄く信頼における人物だと凜は確信していた。

「…さあ凜言いなさい」

「はあ、分かった言うよ。でもこれは他言してはいけないよ?」

凜は真剣な目を2人にむけた。

2人は突然凜が真面目な雰囲気をかもし出し戸惑ったがすぐに首を立てにふった。

「…わかりました。」

「…ああ、わかった」

。

「ええと…ガールを助けた方法だよね?」

「はい、」

「んー今回は特別、森の長の手助けでガールを元の場所に

返したんだけど。私はそれが無くても、魔法を使わず  
ガーラを助ける事が出来たの」

二人はそれを聞き凄く  
驚いた表情をした。

「なんか私 先祖がえりとか言われててねえ  
歴代の中で2番目に魔力が強いらしいよ。

…だから自然と出来ることは多くなる

まあ 大まかに説明するとこんな感じかな、」

ああちなみに植物だったら  
普通に対話することが出来るから。と凜は付け足した。

「…先祖かえりですか。凄いですね」

「なあっじゃあ この木もリンが命令すれば動くのか？」

まだ納得いかないヒースは  
実際にその様子を見てみたいようで…近くの林檎の木を  
指差した。

「…うん、でも基本的命令するのは嫌いだから  
お願いする方が多いよ」

凜はそう苦笑すると  
林檎の木に向かって叫んだ。

「その林檎の木さ〜ん。3つ林檎を分けて欲しいんだけど」

《全然いいですよ！！ 本当に3つでいいのかい？  
主様ならこの林檎全部あげたつていいんだよ？》

「いやあ〜全部なんて貰ったら食べ切れないよ  
3つがちょうどいいんだ。」

《そうかい？…分かったよじゃあ3つだね？》

「うん、林檎の木さん動くのは少し大変だから  
この赤髪に林檎投げてくれないかな？」

（こんな所で木に動かれたら、土がえぐれて  
後始末が大変だからね）

《了解。》

林檎の木はそう言つとすぐさま

林檎が実っている枝をヒースの方へ振った。

…林檎はヒューンツと

凄いスピードでヒースの顔面をねらった。

「えッ？…ちよっお前っ！！…つつっ！！！」

ポワンツ

顔面に当たると予想していた林檎は  
エルスの魔法により止められた。

「あゝ、取っちゃったかあ…残念ッ」

「ッ！…残念じゃねーよ！！危ねーだろッ！！！」

「ごめんごめん、でもこれで分かってでしょ？」

凜はニヤリと笑った。



## 護衛

ヒースはニヤリと笑った。リンに絶句した。  
そしてエルスは納得した。

「…わかりました。そしてリンが他言しなかった訳も」

「リンはこの自分の力が悪い奴に利用されるのを防いでたんですね？」

「うん…この力は確かに凄いいけど、国を動かせるほどの脅威ともなるんだよ。さっすがエルス頭いいねッ」

「そんなこと無いですよ、…それよりもう危険なことは止めてくださいね？」

俺達は事情を知ったんですから遠慮は要りません。」

「そつだぞッ勝手に動かれるとこっちも  
迷惑なんだよ、」

2人はやっぱり優しかった…。

「…せつきはぐめん、…ありがとう」



凜の植物を従わせる話については一段落着いたが、  
…気になることが一つ、

それは…、さっきの魔物のことだ

あんな魔物がいるとなると森の被害もそれなりに  
大変なことになっているのでは無いか、…と  
凜は考えたのだった。

(…ん、何かいい解決方法ないかなあ?)

自分がこの森にいらなくても  
動植物を守る…そんな解決方法。

(はあ、私が2人いればなあ、  
…2人…私の分身、…あッ!!)

凜は何かひらめいた。

「あのお…早速なんだけど、お願いが…、」

凜派申し訳なさそうに話を切り出す。

そんな凜を可笑しそうに2人は笑った…。

「本当に早速だなあ？」

「クスッ そんな顔しなくてもいいですよ。  
…お願いとは何ですか？」

「あのね、教会に行く前に少しだけ  
寄り道したいんだけど…いい？」

「…それは時間掛かりますか？」

「いや、場所も近いしそんなに掛からないと思う。」

「それなら全然大丈夫です ニコ、」

「ありがとう、…ああ、それとこれから先は  
護衛を頼りにしたいんだけど…大丈夫？」

そんな質問をする凜に  
ヒースが鼻で笑った。

「おいおい、ちょっとその質問は俺達を馬鹿にしすぎじゃないか？」

「…そうですね、今貴女の前にいるのは王宮の中でも最も強い2トップなんです。心配することなんて無いですよ」

「それに、もともと俺達は初めから護衛を頼りにされる立場なんです。

だから大人しく守られて下さいッ。」

凜は少し説教を受けた気持ちになった。

「…はい、努力します。」

「…そうして下さい、…でも、どうして急に護衛を任せるなんていったんです?」

凜はいくら守ると言っても

簡単には守らせてはくれない人物だ。

そんな凜が自分達に素直に

護衛をお願いするなんて…、とエルスは疑問に感じたのだった。

「ああ…それは、目的地に着いたら分かるよ。」

じゃあっ さっさと行こうかッ!!

と凜は言い。ライトの背中へと飛び乗った。



## 守る者

\*\*\*\*\*

ピキイイツ

見たこともない鮮やかな色をまとった  
鳥が甲高く鳴いた…。

少し森を進んだだけだったのに  
いつの間にかあたりは巨木で覆いつくされていた。

空気は新緑の香りを漂わせながらも  
じめじめとしている。

「なあリン、これ道間違っ  
てないか？」

あまりの辺境にヒースが眉を顰める。

「大丈夫しつかりあつてるよ。…ほら、その証拠に  
あれが見えてきたッ」

凜は巨木が続く道の先を指差した。

…その先には、

「…っ、これはまた今まで以上に大きな木ですねっ」

「うん、この木はこの森のご神木なんだよ」

「なるほど、言われてみれば

確かに神様の雰囲気が出ていますね」

ご神木は大きな根を地面に張り

まるで世界を支えているんじゃないかと  
疑うほど凄いものだった。

また、枝には多くの鳥達が巢を構え

ご神木は賑やかな音に包まれていた。

「ご神木の真下まで凜達は到着した。」

「ほう、う、こりやまたすげーなッ！」

ヒースが感動の声を上げた。

「ご神木に近づくとさっきまで見え無かったものが現れる。」

「…凄いですね、これは洞ですか？」

「うん、そうだよ。遠くからじゃ分からなかったでしょ？」

「はい、不思議ですね。近づくとこんなに大きな穴なのに」

「まあ、その大きな穴が隠れてしまっぐらい  
周りの木が大きいって事なんだろうね」

凜達は馬から降り  
木の洞の入り口まで近づいた…。

「…この洞の中には神聖な水が湧き出る  
泉があるの、神聖な場所だから資格のあるものしか入れない…、」

「ごめん、私 ここに来たかったんだ  
…悪いんだけどこっから先は私しか入れない、」

凜は困った表情をする。

「ああ、分かったよここで待ってればいいんだろ？」

「うん、ごめんッ」

「謝らなくてもいいんですよ…それより気お付けてくださいよね？」

「クスッ…わかってるよ、じゃっ行って来ます、」

凜は暗闇が広がる洞の中へと消えていった。



壁は青々としたコケに囲まれ  
隅にはヤコウタケが生えている。

：ガサ、ガサガサッ

地面に落ちている落ち葉が  
足を進めるたびに音を立てた。

凜の周りにはふわふわと丸い  
発光体が飛んでいる。

魔法で出したものだ。

「んー、もう少しで出口のはずなんだけどなあ…、」

凜はそういい、目を細める  
すると置くから明るいものが見えてきた。

「おっ、やっと着いたかなあ」

凜は光の中へ突き進んだ…。

「　　ッ、まぶッ！」

今まで暗い中にいたせいか  
光がとても眩しく感じた。

…凜はゆっくりと目を開いた。

「…おおっ、資料より全然神秘的だなあ、」

凜は花祭に来るさい

一応回りの森についての資料に目を通していたのだ。

洞の中心部は上まで空間がひろがっており  
ところどころ光が差し込み、翡翠色の泉にそそがれている

光により宝石の様に輝く泉  
まさに息を呑むほどの絶景だった。

「うわぁっキラキラ反射し綺麗だなあ、あぁっ！魚までいるよっ」

凜は膝を地面につけ泉を覗き込んでいた。

「はあ、ずっと見ていたけれど。待ち人もいるし  
さっさと終わらせますかッ!!」

凜はそういい 気合を入れて立ち上がった。

…凜は深呼吸をする。

そして凜は足場に魔力をこめ、  
水の上へと足を踏み出した

ピチャ、ピチャ…。

凜が歩くたび波紋が広がる。

…そして泉の中心へと来ると凜は  
ふところから小さいナイフを取り出し

手に傷を入れた

…ポタポタッ

そして泉の中へ血の滴る  
手を突っ込んだ。



守る者(後書き)

ちよつと早いけど更新!!

## 秘術

ガシッ

いや、…倒れていかなかった。

「ロード、力を使いすぎです。」

凜は突然聞こえた声にも関わらず驚かなかった。フツと鼻でわらった。

「ああ 成功したんだ」

「はい、十分すぎるほどに。」

凜の目の前には透明のプルプルとした何かがあった。体の中はを見ると水流がわかる。

「…その形は不気味だな、人型になれる？」

「はい、でも…その前に」

と言うと 何か は凜を抱き上げ  
岸の木のこぶへ座らした。

それが終わると 何か は  
ぐにゃぐにゃと形を変えた。

「…ほう 黒髪かあ」

「はい、ロードの血を貰いましたからね」

目の前にいるのは黒髪のイケメン  
歳はエルスたちと同じだろうか。

…でも無表情で人を寄せ付けない雰囲気を出している。

「私の血の影響か、でもそれなら何故女じゃないんだ？」

「女でも出来ますが、…男の方が強そうですね？」

ああ そう言うことかと凜はうなずいた。

この生物はグレイス家秘伝の魔術の一つで  
この植物の力を多く含んだ水とグレイス家の力を

混ぜることにより自分の力を分けた僕が作られるのだ。

この生物はなるうと思ったものに何でも形を変えられるのが大きな特徴だ。

「まあとりあえず、呼びづらいしお前に名前を付けるか  
ん〜… そうだなあ、《スイ》にするか」

「…《スイ》ですか、それは私が水から生まれたからですか？」

「だったら？」

無表情でスイは一言。

「……斬新ですね」

「…貶してる？」

「いえっ」

凜は無表情だが  
なんだか自分を貶してるように感じる。

「…まあ、いいや。それよりスイ」



「はい、何でしょう」

「彼方にやって貰う事があるの、

…彼方はこの土地に残りこの地に出る

悪しき物を払って欲しいの」

「…悪しき物、それはこの土地に出る魔物ですか？」

「うん、出来る？」

「はい、私の手に掛ければ赤子の手のを捻るようなものです。

…しかしこの土地に残るといふのは無理ですね」

「え、何で？」

「それは契約違反だからですよ、

私は形は変われど、代々グレイス家に勤めています

ですがそれは、主の傍にいて魔力を貰えるからです。」

つまり私は、グレイス家の当主の魔力を貰う代わりに

私の自由を上げましょう、ということなのです。…と  
スイは無表情に話した。

「魔力が欲しいのか、でもそれだけじゃ  
別にここを離れられない理由にならないんじゃない？」

「いえ、それでは（主の傍にいて）が出来ていないのです。」

あゝ…そこ重要なんだあ、面倒だな。と  
凜は呟いた。

「どうしても私をここに起きたいのですか…？」

「うん、もともとスイを作った目的はそれだからねえ。  
…何か、いい案でもあるの？」

「…まあ 本来は出来ないのですが、」

「…？」

「ロードは魔力が多い、そのため私の力も強くなり私の存在維持に  
余裕があります。ですので少し強引ではありますが私の  
分身を作ることが出来るのです。…しかし、その分身のお陰で

私は本来の力の半分となってしまうので、あまりお勧めしません」

ふうん、と凜はあいづちを打った。

「半分になるうが、別にいいんだけど…、スイの分身でも  
この魔物は倒すことが出来るの？」

「はい、最高のコンディションの時より倒すのに時間が掛かりますが  
魔物は確実に殺すことは出来ますね」

「ん、ならいいかつちなみに  
分身のスイとは連絡取れるの？」

「はいできます。私が魔法を使えばすぐに  
分身のところまで瞬間移動することも出来るんですよ？」

「わあー凄い便利じゃん！…じゃあスイ  
分身よろしく！…」

「はい…私的には力が減るのは嫌なんですけど、  
分かりました。少々お待ちください」

そう言うとスイはまた体をグニャグニャと  
変え始めた…。

…そしてっ

「はい、終わりました。ロード出来上がりはどちらですか？」

2人のスイが話しかけた。

「うん、気持ち悪い」

無表情の男が2人同じ体で  
同じ言葉を吐く…気持ち悪い。

「自分で命令しといて酷いですね」

「いやっだって…！同じ者が同じ声を同時に発するなんて  
普通気持ち悪いでしょッ！しかも無表情だし。」

？とスイは首をかしげ

ああ、こう言うことですねっと言った。

スイ「こ」

スイ2「う」

スイ「し」

スイ2「や」

スイ「べ」

スイ2「れ」

スイ「ば」

スイ2「い」

スイ「い」

スイ2「の」

スイ「で」

スイ2「す」

スイ「ね」

スイ2「？」

「(ニターア)」

ゾクッ!!

「キモイキモイキモイツ!!何それッ  
笑い方可笑しいッ!何よりウザいわッ!!!!」

「「おや、お気に召さなかったですか?」

「あ・た・り・ま・え・!!」

「もういいスイ本体だけ話せっ」

「分かりました。」

「はあ〜…。」

凜は斜め上に解釈するスイに  
頭を抱えた。



秘術（後書き）

スイマセン少し増やしました。



## 過去（前書き）

スイマセン。物凄く文を増やしたので再更新しました。

## 過去

\*\*\*

暫く座ってじっとしていたら  
走るところまでは行かないが  
何とか自分で歩けるように凜の魔力は回復した。

。

「よしっ、時間もないしエルス達のところまで戻ろうかなッ」

凜はそう気合を入れるかの様に言葉を吐き  
勢いよく立ち上がろうとした。

…がよろめいてしまった。

…フラリ、

「…わッ…っ…とありがとう」

スイが支えた。

そして、もう少し休んでください。と元の場所に戻された。

「まったく、…盛大に力を使うからですよ。正直こんな無茶をする当主は初めてです」

「いや、だって。資料には

(魔力+血)しか書いてなかったから勘でやったんだよ」

スイはそれを聞いてため息を漏らす。

そのため息は凜に向けてなのか、前当主に向けてなのか…。

「…それにしたって、力の使いすぎです。

知らないわけじゃないのでしょうか？魔力を使いすぎると生死にかかわるって事を。」

「そりゃねえ？…耳が痛いほど説教されましたから」

「なら、どうしてですか？」

…。

凜の口は閉じた。

そして重々しくまた開く

「…スイは私の命令に絶対だよね？」

「はい」

迷いも無くスイは即答する。

「…はあ、本当はあまり言いたくないけど特別に、血を分けたスイに話してあげる。  
…今から話すことはあなたの内に秘めておきなさい。  
これは命令よ。」

「ロードの命のままに。」

「…どうして無茶をするか、だよね？」

「はい」

「…それは、んぐたぶんまだ心のどこかで  
自分は要らない存在なんじゃないかと思ってるからだと思う」

「私は幼い頃から立派な人否、親にとつての優秀な人材、駒になる  
ように

育てられてきた。…もちろん私は期待に答えようと頑張った。」

凜たちのいる空間は冷たく

静かでちよろちよると泉の水が流れる音が響いている。

「フツ…でもね、私には才能がなかったの

何をやっても一位にはなれず、2位止まり。…だんだん親は  
私を…見放した。見放された私はただただ悲しく

何のために生きていけばいいのか分からなくなった。」

「…そして私に追い討ちをかけるように現れた真実は  
さらに私の心を黒いものにしてしまった。」

「それはある日の使用人達の会話で偶然聞いてしまったもの、  
【～お嬢様は坊ちゃんのだ用品ですものね～】…この話を聞いた  
私は

うまく息が吸えず苦しくなった。うすうす自分でも分かっていたん  
だけど

流石に真実と分かっってしまうと痛いことだった。」

「私が生を貰った意味は、お兄様の体にもしものことがあったときの代わりをするため。」

「私は今まで親に無能だと知られてしまったから愛して貰えなくなつたと、考えていたけど、それは大間違いだった。」

「私は初めから愛されてなかつたの。」

心のどこかで幼い頃は愛を貰って育つたんだと思いたかつたの…フツツ笑える話でしょう？  
と言ひ 凜は自分をバカにするように笑つた。

スイは話の間じつと凜の表情を見る。

必死に彼女の何かを分かつとするかの様に。

「…もともと必要の無い人間だから死んでもかまわないと考えたのですか？」

「うん、人間は生きるためには多少の理由は要るものなのでも私は誰からも必要とされず、生きる理由なんてなかつた。」

凜は目を閉じ一呼吸おく…そして、涙を浮かべながら言った。

「…、だからね今の生活には感謝しているの

昔と違って私はようやく人から必要とされる人間になれたの…  
凄く嬉しかった。」

「私は…生きがいくれた皆にお礼がしたい。…大切な皆を守りた  
いんだ、

その気持ちは何より強くて、自分の命が犠牲になってもいいと考  
えているの」

皆には無茶なことはしないと約束したけど

大切な人が死ぬのは耐えられないの…凜は悲しそうに顔をゆがめた。

「今、話したことが無茶する理由ですか。」

「うん、このことはスイの心だけに止めておいてね」

「御意。…しかし無茶をする主人を持つと私も大変なんですがね？」

「…そ、そうですね。」

たっ確かにそうだよねーっと  
凜は苦笑した。

「はあ、しかし私はどんなことでも

主人をサポートするように作られた身…貴女に一生付き添いますよ、

「…ありがとう、スイー!!」

凜立ち上がりスイに抱きついた。

「…クスッ、どういたしまして」

。



凜の体調もだいぶ良くなった頃

「よし、ここから出ようか」

「はい。」

「ああそうだ、スイ2」

凜はずっと放置されていたスイ2に話かけた。

スイ2「はい、何でしょう？」

「貴方、スイと姿を変えなさい、グレイス家のスイが暴れてると噂が流れれば大変なことになるから。」

スイ2「御意。…しかしどのような姿をとれば？」

「ん〜…ああっ！そういえばこの地方ってユニコーンの伝説あったよねっ。」

2人に聞いたつもりは無かったのですが  
スイ・スイ2が同時に話す。

「はい、大昔、この国の王様がユニコーンと力を合わせ  
人々を困らせていた魔のものを倒したという話ですね。」

「おおっピッタリじゃんっ…それでいいっっ！！」

スイ2「御意…では。」

スイ2はそう言つと白い光に包まれた

凜は眩しすぎて目をつぶった。

パアア〜アッ

そして。

パカラっ

ヒツメの音が洞窟内に響いた。

「…どっつでしゅっ？」

声がしたので凧は恐る恐る目を開いた。

「…おおッ凄いつ！！綺麗っ」

ブルルツとたてがみを揺らせば  
純白の毛が光を反射しとても幻想的に見えた。

凧はユニコーンに興奮する

「凄いい凄いいっ！！スイ2っ背中乗せてっ！！」

凧はスイ2まで近づいて  
綺麗な毛並みを撫でる。

スイ2「もちろん良いですよ、」

凧は、んーつとスイ2の背に乗ろうとするが  
クラが着いていないためなかなか乗れない。

…すると見守っていたスイが  
凜を後ろからフワツと抱き上げ  
スイ2の背に乗せた。

「…危ないので、暴れないで下さいね？」

「…わっと、…うん、分かってる。」

スイ2「…乗り心地はどうですか？」

「んーお尻が冷たいかな？でも毛並みは凄くいいよ」

スイ2「…私達は本来（水）ですので体温が無いのですよ。」

「ああ、なるほど。ん、もういい、ありがとう」

凜はそういい、下にいるスイに腕を伸ばした。

「スイ、降りれないから手を貸して？」

「はい、喜んで」

スイは優しく、小さい子を抱っこするように優しく包んだ。

「ありがとう、やっぱりスイも体温低いね？」

「はい、元はスイ2と同じですからね」

凜はそっと地面に下ろされた。

「じゃあ次はスイの番ね？」

「…私も何か変えるのですか？」

「うん、でも変えると言ってもその髪の色だけだよ？」

「…色を変える…、凄く気に入っていたのですけど。」

「…ごめんね？、貴方も知っている通り、黒い髪は異質なの

そのままだと目だってしまうの。」

「はぁー、残念ですが仕方ないですね。ではどんな色に？」

「んー、そうだなあ。スイ2も白にした訳だし  
スイもにるればいいよ、きつと似合うよ？」

「銀髪ですか。わかりました。」

スイもまた光で包まれた。

パアアッ

「…どつどつでしょっつ？」

「うん、とっても似合ってる。」

スイはもともと綺麗な顔立ちをしていたが  
白い綺麗な髪でより美男になった。

\*\*\*\*\*

「じゃあ、この土地は頼んだよスイ？」

「御意、任せてください。」

「よし、時間も無いことだし  
スイ行くよ！！」

「はい、ロード。」

…ようやく凧たちは出口へと歩きだした。

## 過去（後書き）

更新遅れてすみませんでした。

今多忙中の身で…、いつもより更新が遅くなります。

暖かく見守ってくれと幸いです。

くお気に入りが増えていてとても嬉しく思っていますく  
皆様これからもよろしく願います。



## 対面（前書き）

大変お待たせしました。

待っていてくれた方本当にありがとうございました。

## 対面

凜とスイの目の前はすぐに  
光の世界が見えている。…もうすぐ洞を抜けるのだ。

しかし凜はもうすぐ外つてところで立ち止まった。  
しかも凄く困ったような表情をしている。

「…ねえ、スイ？」

「はい、何でしょう ニッコ」

スイは最初の無表情は何処に行ったのか  
今ではニコツと素敵な笑みを見せている。

「ニコツじゃないッ！…さっきから言ってるけど  
いい加減に手を離しなさいッ！…」

…そう、泉を出てから今まで凜はスイに  
暗くて危ないからっ、という理由で手を繋がっていたのだ。

しかしそれももう必要ない  
なのにスイは一向に凜の手を離そうとしなかったのだ。

「…だめですよ、まだ暗いじゃないですか？  
足元が見えず転んだら大変ですよ。本当なら抱き上げたいぐらい  
なんです。」

何だこの過保護っぷりはッ！！と凜は  
頭を抱えた。

「気持ちは嬉しいけど、…流石に離そうよ？  
残り1mもないよ。ほら足元も見えるッ」

訴える凜をスイは困ったような目で  
見つめた。

「はあ、体は子供の様に可愛らしいのに、態度は  
可愛らしくありませんね？」

凜の表情は固まった、  
そして……イラッ！！

「五月蠅いッ！！別に可愛くなくて結構ですッ！！！！  
…もうッ離せ！！！」

凜は無理やりスイの手を振り切り  
逃げるように一気に洞を飛び出した。

「あっロード！そんな体で走ったら危ないですよッ！……！」

\*\*\*\*\*

凜は洞を飛び出した。

外にはいきなり出てきた凜に驚く二人がいた。

「っ凜！？」

「えッ…凜か！？」

凜は何からか逃げるように  
愛馬ライトの方へ走っていく…が、  
その足取りはおぼつかない。

エルスは心配になり声をかけようとするが、  
凜を追うように男が出てきてエルスの頭の中は

困惑した。

「凜っ…どうし…!?っ…貴様は誰だ!?!」

「ロード!?!止まりなさいッ!?!」

男はエルスを無視し凜へとどンドン近づく  
そして…ガシッ!?! 凜は捕まった。

「わあああッ スイ、はな〜〜せッ!?!」

「駄目です。離れたらまた走るでしょう？」

「そんな体で走ったら怪我をさせていただきます。」

「もうっスイは過保護すぎッ!?!お前は親馬鹿かッ!?!」

暫くスイと凜 がもみくちやしていると

エルスたちがいた方角から凜は異様な雰囲気を感じ取った  
それは恐ろしく冷たい。

…、

「あの、すみませんちよっと、いや

かなり2人に聞きたいことがあるんですが、

…状況を教えていただいてもよろしいですか？…「コッ」

エルスの顔には笑顔があったが、目は笑っておらず  
声もいつもより数倍低かった。

ゾクッ！

凜はエルスのあまりの怖さに  
スイの腕をぎゅっと掴んだ、

その様子を見てさらに機嫌が悪くなるエルス。  
そしてスイもエルスとヒースを睨んでいた。

…が、次に凜に話しかける時には  
優しい口調に戻っていた。

凜が怯えてると分かり  
爆発しそうな嫉妬心を無理やり押し込んだのだろう。

「凜、一体そいつは何なんですか？

あの泉は神聖な場所だから

(資格)のあるものしか入れないはずですよ？」「

「う、うん」

「それに貴女は泉で何をしてきたんですか？

そんなに魔力を消耗して、騎士が俺達じゃなきゃ

今後の径路は危ない状況ですよ！！」

これだけ魔力を消耗しているなら

凜の体に不自由が出てくるのは目に見えてるのだ。

そんな中、アマチュアな騎士なら

凜を無事守り通して教会に着くか不安なものとなるだろう。

「はい、…スイマセン。自分でもやり過ぎた感が大きくて、

物凄く反省してます。」

凜はしょんぼりして

頭を下げる。

その様子を見たエルスは深くため息をついた。

「はあ、しょうがないですね。そこまで反省しているなら

もう説教は終わりにします。…それよりこの状況を説明してくだ

さい。」

「う、うん。…私の魔力の激減とこの男の存在は繋がっているの」  
話を聞くエルスとヒースの目は真剣だ。

「率直に言うと、私の血と魔力でこの男をつくったの」

……しゅん。

そう凜が言い放つと

辺りはなんともいえない  
静けさに陥った。

「……リン、今なんて？」

「私がこれを作ったの。」

……。

「…冗談はいけませんよ？」

「うん、冗談なんて着いてないよ？」



「…本当に？…そんな、人間を作るなんてっ聞いたことないですよ、」

「ん？…人間？？」

「まっまさか！隠し子ですかッ！？」

ええええええッ！！

凜は思いもよらない言葉に内心凄く混乱した。

「そつ、そんなわけ無いでしょッ！！

こんな、…見るからに年上の息子がいてたまるか！！」

「…で、ですよね」

エルスはありえないと分かっていたが改めて否定され安心した。

「スイは人間じゃない、魔物なの。

昔グレイス家初代当主が契約した魔物、それがスイなの。」

そう言う凜にスイは眉を寄せた

「私はそんな下等なものではありませんよ  
いや、魔物ですけどそれよりもっと高貴な精霊の部類に入ります  
私は水の精霊です」

「…精霊、聞いたことはあるが本当に実在していたなんて」

エルスはスイをジーと観察する  
そして凜は、そうだったの!?!と驚いた、

「私達は普段、厄介ごとに巻き込まれないようにひっそり  
暮らしているので、人間の目にふれないのも当然でしょう、」

「では、何故そんな貴方がグレイス家の元に着くようなまねを?」

エルスはもつともな疑問を問いたただすが  
スイはそれを冷たくあしらった、

「何故そこまで貴方に言わなくてはならないのでしょうか、  
これはグレイス家だけが踏み込める話だと私は思いますが?」

エルスは面食らった、  
そして確信した、この者はグレイス家当主の命だけに従い

当主だけ守れば他はどうなってもいいと言う  
考えの奴なんだと。

「ああ、そうだな踏み入ったことを失礼した。」

…スイの前では何故か男らしい話し方になるエルス  
その姿はいかにも、嫉妬心で敵意むき出しに見えた。

## 屋敷

凜はあれから、スイと一緒に愛馬に乗った。

…そしてエルス達の目の前にようやく今日泊まるはずの屋敷が見えてきたのだ。

(ちなみにスイは今、

エルス達と同じ騎士団の服装をしている)

。

「ロー…、…ロード…ロード…！」

「ん…、んん。…？」

今まで疲れが出てスイに寄りかかるようにして

寝てしまった凜だが、ようやく目的地に着き目を覚ました。

「お目覚めですか？」

「…ふあ、…んっ、着いたんだ」

凜はまだ眠い目をこすった・

周りを見渡すがそこにはエルスとヒースの姿はなかった。  
どうやら先に馬を置きに行ったようだ…。

「はい、これから着替えてすぐに晩餐会となります」

「わかった、」

凜はそう言つと よっ、と

と言つ掛け声と共に馬からひらりと飛び降りた。

「っ！、ロードっ危ないでしょうッ！、」

「スイは過保護すぎなんだよ、」

凜はそうダルそうに返し

今まで自分を乗せてくれた愛馬に擦り寄った。

凜派は愛馬の顔を優しくなでる

「ライト、体は大丈夫？」

《ええ、もちろんこれぐらいなんともありませんよ。》

「クスツ…流石だね、今日はありがとう、また明日もよろしくね  
チユツ」

凜はお礼の言葉と共に、ライトの額に魔力を込キスをした。

《…凜様、魔力なんて要りませんが、もっとご自分を大切に、》

「大丈夫ツ。寝たお陰で、半分の魔力はもどったから」

《…本当に魔力だけは、凄いですね貴女は》

なんだか呆れたような言い草だ。

「クスツ、ほめ言葉として貰っておくよ、じゃお疲れ様、」

凜は暫しの別れをライトに言つと屋敷の係りの者がライトを連れて

行った。

その後ろ姿を見ていると

エルス、ヒースの愛馬たちも後を追うように  
係りの者につれていかれた。

「リーン!!」

ヒースが大声を上げ、凜に手を振る。

凜はその姿に苦笑し、スイ思いつきり不機嫌に…

「あの筋肉の塊は、騒ぐことしか脳に無いのでしょうかね？」

…、

エルス、ヒースと合流し。

今は使用人に部屋を案内されるのを  
客室で待っている所だ。

「おい、寝ぼすけっもう昼寝はいいのか？ガハハッ!!」

「お前ッ、もっと気が利いたことはいえないのか？」

凜に会ったとたんバカにするヒースに  
エルスは呆れた…。

「エルスいいよ、ヒースに期待したことなんて一度もないからっ」

「なッ！！ お前ッ 俺はなあ？天下も黙るヒース様だぞ！！」

「ああいろんな意味で黙ってるな、…もういいだろお前少し黙って  
ろッ」

エルスはそうヒースを征すと次に凜へと視線を向けた。

「…本当にお体はもう大丈夫なんですか？」

「うん、魔力はもう半分は回復してるし大丈夫だよ」

凜はエルスを心配させない様に  
笑顔でかえす…。

「そうですか、…安心しました。」

本当に心配していたのだろう  
エルスはホッとため息をついた。



「ところでリン、その  
スイさんは今夜どうさせるのですか」

「ん？、もちろん私の部屋につれていこうと  
考えてたけど？」

そう当たり前の様に凜が答えると  
エルスは眉をしかめた。

「…それは軽率な行為ではないでしょうか？  
年頃の女性と男性が一夜を過ごすなど勘違いされても  
文句は言えませんよ？」

凜はそれを聞きつゝんと考える

「確かにそれは一理あるね、でも大丈夫だよ  
スイには性別らしいものはつきりとは無いし  
当主の私以外ならその者の姿を模ることが出来るから」

たとえば…と凜は部屋を見渡す。

「んー、スイっヒースに化けてッ!!」

「はぁ、気が進みませんがしょうがないですね?」

パアア

白い光と共にスイは  
…ヒースになった。

「ロードどろです?」

「ん、気持ち悪いぐらい完璧ッ」

突然起きた事態にヒースとエルスは  
目を大きく開き、驚いていた。

「まあ…スイには子猫にでもなってもらって  
私の部屋に忍び込ませるから大丈夫だよ」

凜はニコツと笑った。

「…本当に今日は驚かされる事ばかりですね、

「はあ、本当にグレイス家だけは敵に回してはいけませんね。」

「ところで、何故リンの姿だけ化けることが出来ないのですか？」

エルスはこの疑問を投げつけた。

凧は少し困る、

何故ならスイには化けられないものなど本当は無いからだ。

しかし凧は今後のためと思い、最後の切り札としてスイを使おうと考えたのだ。

時には見方を欺かないといけない時も出てくるのだ。

…リンがどう言い逃れしようか考えていると

スイが口を開いた。…ヒースの声で、

「そんなこと決まっているではありませんか、

僕である私がロードのお姿をとるなど不敬に当たるからですよ

これは先代から守ってきた私のおきてです。」

なるほど、つとエルスが納得する中

凧はスイに感謝していた。

そして話がひと段落すると

今まで放心状態だったヒースがゆっくりと

スイに近づいてきた。

何かな？と皆不思議な目でヒースを見る。

「…これって俺なのか?!」

。 どうやらヒースは突然現れた自分の分身の理解が出来ていなかったようだ。

「違います。」

冷静にスイが返答する。

「何故俺が2人いるんだ!?…えッ、あつあれかこの状況は神様が、俺に恋焦がれる多くの女性を不憫に思い。美男の俺を増やし慰めようと考えたのかッ!？」

この馬鹿は規格外だなッ!!と凜は心の中で叫んだ。スイは目の前で熱弁するヒースを虫けらを見るかのごとく冷たい視線を送っていた。

「貴方は馬鹿ですね、私のこの姿の何処にそんな魅力を感じるのでしょうか？」

それに、貴方のような人種はそもそも、うざがられるなどして、女性に逃げられるパターンの人ですよね。」

流石毒舌!!

スイは余程機嫌が悪かったのか  
容赦なくヒースを切り去ったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0369r/>

---

光を強く

2011年10月25日03時02分発行